川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成三年七月二十五日 印刷
平成三年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七七一号

日川協加盟

No. 771

八月号

第43回 西日本川柳大会

とき 9月1日（日）午前8時半開場

ところ 岡山県久米南町中央公民館
（JR弓削駅下車、徒歩5分）

兼題と選者（各題2句）

「財布」 泉 比呂史 選
「踊る」 河内 天笑 選
「男」 貞岡 信太郎 選
「数」 土居 哲秋 選
「動く」 三崎 規正 選
「青」 八木 千代 選

席題 1題・**特別題** 1題

会費 2000円（記念品・昼食・発表誌呈）

呈賞 総合成績で知事賞ほか

投句 20×4センチの句箋1枚に1句、裏面に雅号を書き、8月25日までに投句料1000円を添え、左記へ

〒709-36 岡山県久米郡久米南町下弓削
弓削川柳社

主催 弓削川柳社

創立三十五周年 「竹の子」発刊 山内静水追悼 川柳大会

とき 9月8日（日）午前9時会場
同11時半締切

ところ 大広苑（竹原市竹原町新開）

お話 川柳塔社主幹 西尾 栞氏

兼題
「新」 小松原 爽介 選
「旧」 去来川 巨城 選
「真」 渡邊 蓮夫 選
「情」 礒野 いさむ 選
「美」 橘高 薫風 選

特別課題「未完」 小島 蘭幸 選

※各題2句・特別課題のみ8月20日必着、葉書で事前出句（欠席投句拝辞）

会費 2000円（学生句集・大会誌・軽食呈）

投句・連絡先 〒725 竹原市竹原町4535-5
小島蘭幸

主催 竹原川柳会

ぼけたらあかん

西尾　栞

大阪の名物天牛新一郎さんが平成三年六月二日午前五時、老衰で九十八歳の天寿を全うされた。新一郎さんは、明治四十四年、ミナミで露天商から古本屋を始められて、この道一筋にこられた。『我等が古本大学』という著書がある。

古本屋元の通りにして負けず　水　府
古書を売る遺族小さな家へ越し　いさむ
天牛の棚まにあった月給日　恭　太
路郎の忌天牛に来て落着きぬ　薫　風
古本屋不承不承に値を申し　葭　乃
古本を売って二階の暇乞い　路　郎

新一郎さんは織田作之助さんの夫婦善哉に載ったこともあり、折口信夫、藤沢桓夫にも可愛がられて一九七四年、大阪文化賞を貰われた。氏は九十四歳の時に次のような歌を作られた。

一、年をとったら出しゃばらず
　憎まれ口に泣きごとに
　人のかげ口愚痴いわず
　他人のことは賞めなはれ
　聞かれりゃ教えてあげてでも
　知ってることは知らんふり
　いつでもアホでいるこっちゃ

二、勝ったらあかん負けなはれ
　いずれお世話になる身なら
　若いもんには花持たせ
　一歩さがってゆずるのが
　円満にいくコツですわ
　いつも感謝を忘れずに
　どんなときでもヘエおおきに

三、お金の欲を捨てなはれ
　なんぼゼニカネあってでも
　死んだら持って行けまへん
　あの人はええ人やった
　そないに人から言われるよう
　生きてるうちにバラまいて
　山ほど徳を積みなはれ

四、そやけどそれは表むき
　ほんまはゼニをはなさずに
　死ぬまでしっかり持ってなはれ
　人にケチやと言われても
　お金があるから大事にし
　みんなベンチャラいうてくれる
　内証やけれどほんまだっせ

五、昔のことはみな忘れ
　自慢話はしなはんな
　わしらの時代はもうすぎた
　なんぼ頑張り力んでも
　体がいうことききまへん
　あんたはえらいわしゃあかん
　そんな気持でおりなはれ

六、わが子に孫に世間さま
　どなたからでも慕われる
　ええ年寄りになりなはれ
　ボケたらあかんそのために
　頭の洗濯生きがいに
　何か一つの趣味もって
　せいぜい長生きしなはれや

座右の句

我が道を行くに他人の差出口　（夢二郎）

私の句

師を偲ぶ伍健の腰に伊棹見る　古川　覚然坊

川柳塔八月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　ぼけたらあかん……西尾　栞……（1）
預言者の妻たち……東野　大八……（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……（4）
自選集……（37）
川柳の群像　山内静水……東野　大八……（42）
■**古川柳**　柳籠裏三篇研究（八丁～九丁）……（44）
水煙抄……黒川紫香選……（46）
秀句鑑賞
「同人吟……田中正坊……（41）
水煙抄……石川侃流洞……（67）
句評リレー……小西雄々・神夏磯典子・青枝鉄治・八木千代……（68）
銀河系……河内天笑選……（72）

預言者の妻たち

東野　大八

これは湾岸戦争以前からの話だが、キリスト教にとっての異教徒の開祖マホメットに、いくつかの欠点を見出そうとする傾向が強かった。

その中の一つに、マホメットは大層色好みであったことを大きな問題にしている。つまりマホメットは、正妻九人をふくむ十二人の女性を侍らせていたということだ。

このマホメットに、人あってこの世で最も好ましいものは何かとたずねたところ、

「女性と香料と祈りだ」

と答えたことが伝えられている。

もともとマホメットに限らず、それ以前からのアラビアでは、一夫多妻制が普通のことになっていた。マホメットがコーランにおいて四人の正妻を認めるよう主張したことは、信者たちの間ではよく知られている。

要するにこのことは、正妻は四人以内とせよ、というイミと、当時の多妻制は、しばしば行われた戦争によって、未亡人の救済に役

茴香の花……小出智子選…(76)
「葉書」……板東倫子選…(78)
一路集「焼く」……野田素身郎選…(78)
「かすか」……門谷たず子選…(79)
初歩教室「同居」……辻白渓子…(80)
■ずいそう 温泉はしご……西尾栞…(82)
大空のこころ(8)……橘高薫風…(84)
本社七月句会……(86)
各地柳壇(佳句地十選/岩原喬水)……(90)
柳界展望……(103)
八月各地句会案内……(107)
■編集後記……正坊・射月芳・楓楽…(108)

座右の句

雌蕊雄蕊 雄蕊雌蕊の夜となる　(甲吉)

私の句

ふっふたかが男と女じゃない　肥後和歌子

立てようとのイトもあるのだという。

マホメットは、一ダースもの妻妾を持ちながら、男の子に恵まれなかった(何人かいたらしいが、早死したという)。そこで、彼といくつも齢のちがわない解放奴隷のサイド・ハリーサを養子にした。ところが、この養子の妻となったザイナブ・ビント・ジャフシュというのがすごい美人で、ある日、立ち寄ったマホメットは、薄い衣をまとった彼女に見とれ、思わず、

「男心を動かし給うアッラーに讃えあれ」

とつぶやいた。これを耳にした養子は、

「よければ離婚しますから如何です?」

と気の弱いことを口にしてしまった。いやしくも息子の嫁をぶんどっては不義に当たるとマホメットは辞退したが、結局、アラーの神の啓示と称して彼女を頂いてしまった。コーランのスーラ33に、長いその啓示の言葉が今も残されている。彼女の名に、はさまっているビントは娘の意で、一般の妻妾たちにもみなこれがついている由。当方にはピンとこないが、これがイスラム社会のキマリだから仕方がない。

以上はマホメット研究者の、カイロ大学のF・シーティア教授の書いた『預言者の妻たち』に出ている。この開祖はまた、本妻筆頭のハディジャーの膝に頭を乗せ、アラーの神は偉大なりと言うて昇天されたと書いてある。

川柳塔

西尾栞選

草笛を吹いて母とは女とは
風が吹くたび噂の新しき
万緑に逞しくなるこのいのち
雷が鳴っても君を離さない
抱擁のまんま踊って欲しかった
てのひらの中に旅愁を閉じこめる

鳥取県　土橋　螢

ワイセツか否か蛙の腹つるり
散策の道筋にある墓石店
三日続けて玄関先に猫がいる
カンボジアのことがスカッと分からない
あの戦争は何だったのか紙吹雪
フセインが少しやつれただけのこと

松原市　谷垣史好

子は船出　母の港は閉ざそうよ

豊中市　安藤寿美子

弱いのは孫に泣かれる事である
メンバーの足らぬ時だけ呼んでくれ
珍しい人来るやっぱり保険です
甘い水へ来る螢なら要らないよ
苦い顔かくれトラキチらしい人

和歌山市　西山幸

糾明をすれば篠つく雨になる
とりあわぬ敵をおとなだなと思う
亡父の表札が庇うてくれている
いつか来た道ひとりぼっちになりました
真夏日の箸の重さに負けている
アリバイのために日傘を傾ける

米子市　林荒介

寺町に住んで仏をまだ知らぬ
静脈の透けてくるのも母ゆずり
今生の壺に充たしておくイロハ

読みかけの本から雨が強くなる
春雷に木の芽草の芽立ち上がる
ふる里の樅の力を借りにゆく

大阪市　西出楓楽

勘忍袋つくろうための法話きく
理路整然なさけを入れる隙がない
台所ない家がそのうち出来るかも
薬局でこと足る程に健康で
悪役をすすんで買って出る自信
凡人に徹しブランド買うとする

米子市　野坂なみ

逢えばもうつぎの再会約している（同窓会）
浄土とはかくありなむや京の庭
言葉はきっと心の中の鏡だな
その影は今もわたしの守り札
平成の雷さまが小さくなる
子へ投げる浮輪を徐々に小さくする

八尾市　高杉千歩

言い訳が上手になったと妻が言う
弱い者いじめはしない鬼あざみ
酢加減がおふくろの味忌がめぐる
夫唱婦随バラの刺さえ苦にならず
女は溺れて闇を深くする
好きやねんだけで別れた戎橋

寝屋川市　岸野あやめ

帰化もよし薄くれないのハナミズキ
ゴミ出し日ひとの浮気をまな板に
孫の言うグルメはだしの要らぬもの
部長から次長課長としごく順
窓際の課長に配る一番茶
つちのこはロマン人面魚はお化け

竹原市　小島蘭幸

蛇が去って行くまで本を読んでいる
象よりも大きなボクの父の靴
霧晴れて逢いたい人に逢いに行く
わたしよりやさしい雨が降っている
父の日の父を動かす参観日

倉吉市　奥谷弘朗

他人から花束もらったことがない
円満の鍵は女房の方が持ち
シベリアの捕虜をドラマにしたい夢
女房の何と見事な記憶力
少年の窓を開いた母の愛

松原市　玉置重人

六甲の水コーヒーに一家言
出勤簿先ずクーラーをオンにする
引き際の美学をいつも考える
補聴器をはずして素顔とりもどし
おもろない夫婦で隠しごとがない

岡山県　嘉数兆代賀

生き残るために頭を下げておく
鬼がときどき仏のかおしてのぞきに来る
鉛筆の芯尖らせている闘志
逢えば憂し逢わねば老母の櫓が軋む
その後の事は神に任した座りだこ

伊丹市　樫谷寿馬

甘えてはならぬ余生に先が見えたとて
溶岩に天草四郎の血が混じる
遺言の第一行を考える
負けるほど母性がつのるタイガース
この夏は暑さと遊ぶことにする

下関市　石川侃流洞

コーヒーはブラック不良老年睦み合う
ポケットがあるから耐えている拳
安楽死　医師が詰腹切る情け
脳死判定身内に響いて来る鼓動
超ミニの闊歩へ芸術性を撮る

大阪市　江城修史

限界を口にしぶとく生きてます
恩返ししてから逝きたい腎不全
ちぎれ雲今日は映画かパチンコか
一期一会　心の旅よいつまでか
負け犬ようらむな身から出た錆だ

名古屋市　越村枯梢

好きですと言うて別れた花ぐもり
人並に生きてきました泣き笑い
蓮の花に満開ですと誘われる
野仏はただ一人です雨の夜も
女は魔物声まで違う内と外

東大阪市　森下愛論

お銚子のお代わり弾む友と飲み
美しい罠を探しにネオン街
飲み歩きますます老いの日々多忙
旅カバン何処へ行こうか老い豊か
野垂れ死にするまで自惚れ離さない

鳥取県　松下たつみ

リーダーの誤算うしろは深い霧
一坪の花壇が母の支えかも
いい身内だけが釣書にかいてあり
みんな賛成　規則が出した果し状
スカンポスカンポ下校の道に詩があり

美禰市　安平次弘道

とても腹が立つから聖書読み直す
ある和解正義を金に換えました
ラストシーンきれいな嘘にだまされる
思い出し笑い気になる倦怠期
モナリザの乳房想像せぬように

松江市　恒松町紅

占いは誤診長生きしています
難しい言葉は要らぬ缶ビール
雷が落ちた思い出ある位牌
濡れ落葉から脱皮する青畳
ぬるま湯に溺れて一人立ち出来ぬ

松江市　柳楽鶴丸

ファッションショー青と赤のデュエット
不安ですアルツハイマー離婚
国境を知らずタンポポ咲いている
結婚式せずに迎えた三十年
六月のリズムで雨が降っている

松江市　舟木与根一

年金は優雅に回る風ぐるま
男にもかけ込み寺を急がねば
騒音も地価と一緒に上がり出す
にぎり飯だけは譲れぬコシヒカリ
憲法はカタカナ語とは言いません

神戸市　中村ゆきを

幸せな二人で席を占めている
も一人の私が手毬をつき始む
何事も極楽に見るくせがつき
初夏の恋　吾に乳房を教えたり
夫より教祖の方を信じこみ

松原市　小池しげお

腰痛の痛さを知っている手摺
父だけが恥だ恥だと騒ぎ立て
けじめだけ着けておきたい切手貼る
露天風呂少しみだらな風の私語
小走りでほんとのことを言いにくる

富山市　舟渡杏花

良心へ暫し目隠しして貰う
男のロマン藁一本に縋りつく
これ以上進めば自分を見失う
大拍手送り出される火付け役
王様にマジック教えている家来

京都市　都倉求芽

葱坊主　身のふり方を風に問う
空少し昔にもどす竹とんぼ
ためらって心残りの夜が明け
人生をまず足し算の一年生
時は平成　島原大変に御座候

尼崎市　春城武庫坊

風薫る　時を止めたい夜が来る
球根は蝶の約束通り咲く
ゆっくりと遅れを知らす古時計
眼の高さ変えて自画像描きかえる
リンダ復活　梅雨の雨足強くなる

尼崎市　春城年代

夕風が主婦をひととき和ませる
ねむれないまま月のカーテン開けておく
便箋を買うただけでも若返る
万緑の中で浸れりカタルシス
衣がえ昔はセルという季節

笠岡市　松本忠三

九十の母日本語の確かなり
適当がわたしの性に合ってます
お付合い程度の量がわからない
七十の手習いですが間に合うか
表彰を受けたことなし野良に生き

今治市　矢野佳雲

耳がもし無けりゃと眼鏡怖くなる
出稼ぎの戻らぬもいて村祭り
子に賭けた夢に泣いたり笑うたり
父がしたように子にする肩車
来年の話聞きたい鬼の鬱

柳井市　弘津柳慶

茶の間からエヘンエヘンとせき払い
肩叩く孫の下心わかってる
余裕などもっての外の年金者
バランスをくずして打率下降気味
肩車されて行列の中に居る

西宮市　林はつ絵

これはわたしの時間真っ赤に塗りますよ
ありがとう千べん言うて消えましょう
老父の影ワンパターンの庭いじり
使命感働き蜂の千の羽
この瞬時氷河の上に置く命

倉敷市　小野克枝

生きた犬抱いて平和な終戦日
定年の無い脛撫でて回り道
ああ夫婦不協和音のまま夫婦
白い皿伏せて言いたいことがある
妻の手をさぐるしかない旅続く

堺市　楊井二南

行きずりの縁では偲び甲斐が無い
軟らかな手首に秘めた技が有る
大吉は折目正しく保存する
自惚れと自信の別は紙一重
アドバイス三拝九拝して受ける

豊中市　田中正坊

雑兵に妻が子がいる孫もいる
ペンネームやっと九歳になりました
胸突き八丁　息はずませる六十路坂
六十九もう変えられぬ旗の色
銘　正宗　男の美学きわまれり（徳川美術館）

熊本市　永田俊子

まっすぐに歩いた父の狭い地図
指針一途北よりほかは知りません
太郎冠者老いて三下り半を貰う
うら表ない日の丸に他意はない
蟻に似て蟻より淋しい飢餓の列

高知県　赤川菊野

留守番をオウムにたのんだ日の不覚
孤の部屋で太宰治を読む夜長
乱開発　神の怒りか普賢岳
大吉を引いた帰りに事故に逢い
噂より他に話題のない女

廿日市市　林野甦光

差し替えのシナリオ抱いて八十路越す
情熱はまだある老いのわさび漬
譲られた席で居眠りなど出来ぬ
素人にしてはと素人がほめる
一枚だけ障子がついて気が和み

大田市　藤田軒太楼

埋れ火の未練が抱く老いの夢
身につかぬ貫禄親の七光り
半生の足踏みやっとあくが抜け
メンバーに紅一点がいる励み
子の好意無にして過疎の土に生き

寝屋川市　稲葉冬葉

付き添いの鼾患者を眠らせず
万才三唱いつも他人の事である
この指たかれそんなお人を待っている
虫干しへ十三年の喪が明ける
懐妊の兆候バラも秋桜も

玉野市　小谷仙山

影法師今日は私の前を行く
輪の中心に居て退屈をして居ます
前世を毛虫に聞く程野暮でなし
石ころ一つ老いの足腰ためされる
過去のきずレントゲンは知っていた

堺市　高橋千万子

たよりない荷造り小包投げて見る
また来てね女オウムに教え込む
舌打ちをしているファンは実のファン
思い出を喪中ハガキが呼びおこす
うかうかと行けぬ手の鳴る方もあり

奈良市　天正千梢

波枕乱るる夢を二度三度
とりまきがきれいな花だけ見せてくれ
きらわれる原因小骨とりすぎる
星の語らい話せる方とめぐり合い
秋芳洞太古の音に耳すまし

今治市　越智一水

目を閉じてみても腹立つ貧乏性
妻の留守初老になっても落ち着かず
負けぬぞと空を見上げりゃ空がある
若者の輪にいて遅れまいとする
夏や夏　隣も胡瓜きざむ音

高槻市　川島諷云児

なるようになるさ元気でいるうちは
断ち切ったはずの未練が渦となる
蛇口からポトポト落ちる妻の愚痴
長生きをすればするほど増える罪
受け皿を拒んだ日から修羅の道

守口市　羽原静歩

八月の虹がきれいな河川敷
ポツダムの上等兵も遠い夢
地球儀に一度アイロンかけたいな
不揃いのリンゴでみんな親思い
父さんの転勤　園児が一人増え

寝屋川市　江口度

カットにあやめ新聞もしめり勝ち
商才の芽を摘んでいる塾通い
お嬢さんと呼べばみんなが振り向いた
引きつった笑いもあろう宮仕え
棺桶に釘うつまでは本を買う

松原市　佐藤奏月

初めての港に期待してしまう
沿線の枇杷の実熟れて母はひとり
カルピスの乳白色は愛一途
天保山じんべえ鮫はうす紅
雨催い昨日の日記付けている

西宮市　門谷たず子

港から世界は広い夏帽子
出船入船母の港にある情け
消しゴムに甘えてばかりの物忘れ
川下り古い仲間の笑い癖
やっぱりとまさかの間ゆき来する

京都市　山本規不風

危篤から惚けが癒って鋭過ぎ
水郷で逢うて葦切り鳴く別れ
龍馬の墓に鬼百合白百合月見草
リモコンでコロコロ夫婦気が変る
長生きの秘訣を言うてから寝込む

仙台市　川村映輝

怒った時の恐さ教えた雲仙岳
過疎の村一か八かのボーリング
言うは易しほどほどというむずかしさ
週休二日大人の犠牲になる児童
結局は金のことかと理解する

鶯の鳴き止みを待ち茶を啜り
泰山木の香りを供え父母を恋う
共に地獄に落ちてもと言う美しさ
愛染さんでスタート浪花の夏燃える
天神祭コシノヒロコの浴衣買う

堺市　藤井一二三

夜の画廊真夏の色を盗まれる
意地通すほどでなかったワンカップ
停電も飢えも知らない平和論
だめ押しておかねばメロン熟れすぎる
楠公と死んだ河内の男達

藤井寺市　吉岡美房

十万億土遠くて近い黄泉のみち
積んだ業みんな背負うて一人旅
とてもとても死と向い合う気になれず
功成らず名も成さぬまま丸うなる
子に託し孫に背負わす果てぬ夢

奈良県　上田翠光

例外がこんなところにあるルール
慎重な男にしては甘い読み
石橋を叩いて叩きまだ行かず
我を張っているが退く時期心得る
結論を急いだばかり穴へ落ち

大阪市　河井庸佑

中流にどっぷり浸る比べ癖
比べ合う湯舟も旅の解放感
マニキュアの赤は生血を吸う構え
バラ色を好む少女で適齢期
メロン氾濫香りにむせる八度五分

大阪市　津守柳伸

頑張ろか開き直ろか弱いとこ
ライバルなので私と私離れない
まだ欲しいもの有ったのでホッとする
お母さんひじきおいしゅうたけました
むらさきにとけこむ雨の菖蒲園

大阪市　本間満津子

友達が沢山居てる雨の午後
山坂を一緒に越した守り札
消しゴムは赦してくれる古い傷
読むものが沢山あって呆けられず
離された私を諭すかたつむり

大阪市　神夏磯典子

ごきぶりと麻薬退治にいる根気
トップモード熱い女の眼をあつめ
お家の事情で摩擦たえない世界地図
戸も床もサッサで拭いて一人住む
子育てに街みる暇もないつばめ

大阪市　藤田頂留子

人の身を教えてくれた春落葉
泡立てずどぼりと沈む丸い石
陽の道や一直線に三輪二上
ヘルスメータ妻も軽うなりました
年金が少うし増えて仏花

大阪市　北　勝美

父の敷くレールに乗らぬ縄電車
倖せの尺度が違う嫁姑
涙腺の緩み実家へ締めに行く
嫁入りの荷に積みあげる親の見栄
寂しさに鏡を覗く昼下り

大阪市　井上白峰

ドアチェーン人を疑い深くする
心証は善くも悪くも口一つ
付和雷同僕の面子がそっぽ向く
心の芯えぐり取られた事故現場
戦傷がいくさの話に軋む義肢

大阪市　北山悟郎

鉛筆を舐めて文字かく人に遭い
手も口も出さぬ利口な懐手
右手は僕左手は妻で絞る的
縦糸の強さを女知っている
お茶漬で紆余曲折に終止符を

唐津市　田口虹汀

賞罰のない履歴書を切り札に
故里の米カタカナの名は要らぬ
まあいいさ顔が立つなら待ってやろ
ずぼらではないが上司と合わぬソリ
屋上にキツネを祭り新社屋

唐津市　仁部四郎

ボーナスがきみはずぼらという中身
三%余分な出費に馴らされる
世話焼きの男に寡婦のドアチェーン
ノミネート助演賞にはかすみ草
国賓が手ぶらで降りたエアポート

唐津市　久保正敏

挨拶が子供らしない憎らしさ
お手植の松が枯れたと村議会
お帰りは九官鳥が言うてくれ
アメ横で買うた値段へサバを読み
執刀の途中で研ぎに出せと言う

唐津市　山口高明

酒飲めば百八十度性を変え
新緑のふるさとがある国訛り
和尚でもパチンコしたがるときもあり
君の名は知らず私の名も忘れ
小銃を担ぎ歩いた足が萎え

唐津市　浜本義美

唐津市　浜本ちよ

海に来て海の広さに亡父を見る
一杯のつもりがおだてに乗せられて
人格を持たぬ貫禄いただけぬ
不自由な手足で犬も飼えぬ老い
男無視女無理して痩せたがり

八尾市　宮西弥生

仏に会う日まで男の掌の中で
ビル一つ建って町の詩消える
着がえする女から年齢が消えてゆく
傷をもつ人の情けについてゆく
目ざましに起こされているひとり旅

八尾市　宮崎シマ子

餌運ぶ蟻の力を見て飽かず
あれ程に泣けたらと思う蟬時雨
うちの子はすぐに誓ってすぐ破る
イルカの群つばめ返しで水を切る（海遊館で）
朝潮橋　大都会とはなりおおせ

八尾市　古川覚然坊

合掌へ人間根性神の見通し
五月晴れ臆せず多情なるブーツ
その人気　私生活まで記事にされ
人気者来ぬ二次会は座が白け
せせらぎでどじょうが怖い目高の子

八尾市　鷲見章

煩悩や飛天に白き脹ら脛
草野球のメンバーに元甲子園
カラオケマイク東海林太郎の顔で立つ
フルムーン帰ってからの晴れ続き
ティールーム妻の知らない人と午後

八尾市　山下美津留

抑えてる傷うずきだす酒の席
良い話会費の件で行き詰る
調子良い話今度も流れるぞ
かしましい蛙三匹家で鳴く
ハガキ出す趣味で友達ふえてます

八尾市　片上英一

つかのまの亭主関白恋しぐれ
ママさんへ返しに行った女傘
誤字脱字嘘字もまぜて丸い文字
がんとして口割らぬ奴しじみ汁
信号も出ていたらしい男の訃

米子市　小西雄々

リサイクルせよと焼却炉の悲鳴
フレッシュな夢を忘れず毛虫這う
野仏の鼻欠けたまま過疎つづく
峠から見守る母と道祖神
暫くは死角えらんで風に逢う

米子市　林　瑞枝

アンテナの鳶よ明日もまた逢おう
影追うて谷より仰ぐ磨崖仏
下町のパワー熱熱のコロッケに
王さまの狙うおもちゃを差し上げる
雷の子を遊ばせるピアノ弾き

米子市　石垣花子

漬物をうまそうに食う歯が白い
大きな傘を妻は疑うこと知らぬ
汐満ちるようにねむけが差して来る
満ちるにもひくにも海は手抜きせぬ
壁画出土痛し痒しの町役場

米子市　菅井とも子

やんわりと嫁のことばを受けている
本尊も風を吸いたくなるお寺
時満ちて廃寺の謎も解け出した
辛くないとカレーライスの匙が言う
宴に浮かれて約束ひとつ置いて来た

米子市　青戸田鶴

ひと彩に群れても花は淋しがり
雷鳴一過つきまで失った
きつい言葉で私自身をきずつける
忘れたい事が多くて畳拭く
どくだみの白涼やかな窓の下

米子市　寺沢みど里

大き目の傘へわたしの影がない
打ち解けて飾り言葉はもう要らぬ
種子袋満ちてあしたが待ち切れぬ
みかん剝く香りへ内緒むずかしい
行間をこころ豊かな絵で埋める

米子市　政岡日枝子

続く不幸にばっさり切ったレモンの樹
浮き雲やみな一様に悲しけり
鳶が一羽落ちこぼれではなかろうか
イヤリング外して勝負してみましょ
等身大の影を土中に突きたてる

米子市　田中亜弥

雨あがり虹をつたって亡母がゆく
系図辿れば僕によく似た人がいる
峠越せば赤の他人になり切ろう
エチケットあふれて街の美しき
好きな夫とそれから長い道のりを

米子市　沢田千春

浮雲に乗って下界をながめよう
あたたかい亡母の言葉を引出しに
雑踏で突然消える影法師
面かえて人間やっととりもどす
生まれかわって寺の門から出る二人

米子市　新　正子

ふるさとは青い地球と申します
同志かなおんなじ石にけつまずく
五年たちタマは身内になりました
五十から二幕大事にする舞台
猫舌で熱いはなしが飲み込めぬ

米子市　小村てい子

和解する旗はいつでも持ち歩く
夕映えのお慕いしてます庭の下駄
背もたれにゆとりが欲しい記憶力
返し縫いしてから旅へ出るつもり
気を長くもってラムネをぜんぶ飲む

和歌山市　堀端三男

漬物石が重たくなったと母が言う
指貫が母の苦労を喋り出す
勝利への悲願を托す千羽鶴
一日一善こころ豊かに老いてゆく
かすみ草活ける花瓶を選ばない

和歌山市　牛尾緑良

丸い背の私の影がついて来る
蛙鳴く水田　憩いの夜がある
父に似てなどと父の日世辞を聞く
親不幸してても届く母の文
妻の夢子の夢私に夢が無い

和歌山市　垂井千寿子

父の敷くレールは温いまわり道
雨が降るから歩きたくなる京の街
菩提寺のしんかんとして陽は真上
時によりピエロにもなり三世代
ポケットベルで夫婦の絆確かめる

和歌山市　福本英子

げんまんの指から漏れた芽が伸びる
亡夫の名が消えて久しい紳士録
時季来れば女ひとりの芝刈機
バナナからメロンへ亡父の苦笑い
どんどんと無精に慣れてくる怖さ

和歌山市　内芝登志代

食卓につくと自然と掌を合わす
実物よりきれいな写真の褒め言葉
姑を敬う心となり初老
角砂糖の角がゆるんで梅雨さなか
何よりの土産ふたりの仲のよさ

和歌山市　松原寿子

七重八重に編んで貴方へ届けよう
眠り人形になって面影消せるなら
水鉄砲ほどの乱射なら出来る
約束が小指の演技だとしても
とてもしあわせ女は恩義忘れない

和歌山市　内田結実

ありがたくおうけしましょう後ろ指
つっかい棒無いから強くなりますの
気配りのどこか足りない缶ビール
花しょうぶ見頃ですよとさりげなく
辛すぎるから香奠をことづける

和歌山市　細川稚代

人指した指から心冷えてゆく
傾いた安楽椅子に亡父の影
まだ学ぶものあり母の独り言
バネにして学ぼういつか飛ぶ日まで
楽だから手の鳴る方へ従いてゆく

和歌山市　桜井千秀

小間切れにすれば気の済む書き損じ
手の甲がそっと打ち消す生欠伸
楽観と悲観交互の自然界
仇野の空に溶け込む石仏
雑草もそれぞれの名で呼んで欲し

和歌山市　木本朱夏

母性愛育ててくれぬ紙おむつ
書を捨てて緑の風に逢いにゆく
病院の隣にできた葬祭殿
ニッカーボッカー　ホワイトカラーにひるむなよ
相席が美男うどんが食べ辛い

和歌山市　福井桂香

漁火が妻をあの日につれ戻す
のんびりと爪を切るのもよい我が家
雑学の中からもらう智慧がある
きき腕を過信しているドライバー
雑音もモーツアルトも聞いている

和歌山市　山川克子

争いは嫌い目立たぬ位置にいる
穏便に運ぶ手立てのうそもある
諦めでなくて悟りという理想
満腹の蚊はイヤだが叩かねば
信号が青でも渡れない事情

和歌山県　寺田裕美

外泊の叶った母へビワ熟れる
冗談へきれいに本音まるめこむ
ラインダンス男の口が開いてる
呼び出しをポートタワーの上できく
傘の花しずしず進む菖蒲園

和歌山市　田中輝子

追伸に橋のかかった事も書き
2Bよあまり饒舌にならぬよう
ビール一本冷し忘れていた不覚
身元調査お手柔らかに願う縁
軌道修正しても消せない愛ひとつ

和歌山市　山田高夫

真っ昼間から酔っているあかんたれ
パトカーがバックミラーにぴたとつき
それなりに威厳　社長のヘタな文字
花は正直手塩にかけた色で咲く
置きざりにされているのに市民税

和歌山市　青枝鉄治

鬼の意地手の鳴る方へ背を向ける
義理欠いて貯めた金にも税が追い
兎追いし里の山にもブルの爪
ロボットにこき使われる二度の職
身に覚えあるから小言引っ込める

島根県　西村早苗

もう一度ゆきたい秋の駅がある
遠くなるばかりあなたのきれいな眼
突貫工事夜明けに荒れる国訛り
山奥の湯にぴったりのうちわ風
アパートは二畳リンゴの荷が届き

島根県　小砂白汀

願わくば河鹿が欲しい渓の夏
改造に応え雲仙噴火する
長生きも過ぎたか私は誰ですか
雨しとど昔と違う傘の音
言うべきか言わざるべきか腹の虫

島根県　堀江正朗

人情は花の心に似たぬくみ
嬉しい日うれしい声で小鳥鳴く
失明の欲をなくした座にすわり
夢醒めて胸かきまわす妻の声
白杖と耳の広さの道でいい

島根県　堀江芳子

おしのびと言うお見舞に湧くいのち（薫風先生のお見舞をうけて）
夢でない薫風先生夢でない
額ブチの絵だ病室の窓ガラス
若返る話結局齢に触れ
朝のお茶ついでくださる婦長さん

島根県　榊原秀子

良妻の名にこだわりをもっている
ビルの窓いくつあっても同じ窓
まん中に生まれて少しある差別
釣好きがたった一人でいる岩場
父の日がきたから栗の花が咲く

島根県　栂みどり

野あざみを手折り五月の風を呼ぶ
花生けて心豊かに正座する
雨の日へ心がなごむ香をたく
遍路旅愛しき亡夫へ鈴ならす
針箱に亡母の手紙が眠ってる

島根県　松本文子

別れなど喜劇にしよう丸い月
忘れられなくて夕陽に立ち止まる
やっと生きて来たなと思う七回忌
大阪の星を探しているのです
行きずりの恋だと思う紙コップ

岸和田市　島崎冨志子

もめた事もう忘れてる老い二人
不整脈心の不安知らされる
老後へと始めた趣味が重くなる
よくしゃべるインコへ妻も負けていず
住宅地カラス夫婦も越してくる

岸和田市　古野ひで

文字離れとても哀しい眼の病い
病院の休憩室にある縮図
冗談の中の本音に悟らされ
二十年ひとり芝居も慣れました
一瞬の事故にもあった運不運

岸和田市　高須賀金太

人間のやさしさ土のある限り
胸板の厚さに男におうなり
アメリカに負けぬ意地ありコシヒカリ
まだ意見あるらしい目が笑ってる
意味不明和製英語が多すぎる

岸和田市　岩佐ダン吉

それでいい人間だもの揺れてます
ぬくい目で母言い訳を聞いてます
お酒には確か弱いと聞きました
窓ぎわで僕なりの絵をかいている
鯖高値そのうち時価となるのかも

姫路市　大原葉香

バンザイの出来ぬ達磨にある焦り
親の地図子の地図つなぐ梯子段
先生と呼ばれる人が多すぎる
占いも手相も知らぬ方がよい
孫の知恵借りる日もある隠居部屋

姫路市　丁坪サワ子

明日の絵を描きたくたっぷり墨をする
ふたりだけの暮しへ近所小姑
延命器具　時には外したい身内
亡くなった主も知らずに来るツバメ
家庭科が優の男でもてている

姫路市　中塚遊峰

長生きがしたくて下手な芝居する
青墨もすれたに描けぬ春の絵が
人の気がまだ読みきれぬ古希の坂
平凡が倖せだとは気がつかず
逃げ時も知って野良犬側に来る

岡山市　川端柳子

油断すな油断すなとて胸の太鼓
まん中の突進左右からなさけ
チリ一つ無い部屋主を待たされる
言い忘れ仕忘れ悔やむ親孝行
ご一緒に踊らされてた銭の音

出雲市　吉岡きみえ

ふるさとの浜ひるがおが咲いたろか
天性かころころ肥ってよく笑い
掃除機に悩み吸わせてケセラセラ
ティータイム孤独のスプンかきまわす
病院を出ると大きな深呼吸

出雲市　園山多賀子

温かい言葉反芻しています
傘寿今踊り忘れた花茗荷
一畳を塞ぐ男の青写真
影法師いっそ並んで歩こうか
御先祖の誰より長く生かされる

出雲市　金村青湖

風は初夏過疎守る老いの茶摘唄
旬を摘む指からもどる記憶力
結局は婦唱の朝の靴を履く
水虫に耐えるも現世梵行経
白寿まで生きる夢抱く新刊書

出雲市　竹治ちかし

カーネーション送るぐらいの恩返し
石垣に苦労を積んで母の城
生きている予定で夢を小出しする
人好きになって長生きしたくなり
もう母の唄は聞こえぬ街に住む

出雲市　久谷まこと

表現も控え目だから信じきる
色褪せた思い出だから捨てきれぬ
残り火を継ぐは易いがよく消える
耳栓をして姑の肩を持つ
今日もまた片カナ記事を読みかえす

守口市　野呂右近

二三行書いて平和な日記帖
いつからか落合う所句碑の前
妻子から善意の禁足令が出る
残り飯握って妻と菖蒲園
挿木する父には梅雨もまた楽し

羽曳野市　榎本吐来

団欒の一夜を母の忌がくれる
肝腎のことには触れず夫婦箸
ボケて来た話主役の席にいる
盃を舐め過去を語ってまだ男
梅雨空の土曜の午後を惑う靴

加古川市　吐田公一

糸切歯で切った昔の赤い糸
十人が寄れば十の物語
ちっぽけな歯車家中振り回し
汗流す男の顔が生きている
食卓をみな平らげて金メダル

寝屋川市　宮尾あいき

梅雨晴間覚悟してます洗濯機
雨の中好きな菖蒲に突き当り
風薫る土佐の港は初鰹
梅雨乗せて雲鈍行で来るが良い
八十路生きてうれしやひ孫抱く

七尾市　松高秀峰

雑巾に序列がある母の知恵
欲しかった雨も続くともう愚痴る
定年の今日から無口の父となる
裏の裏までも見抜いている姑
家持てぬ男が車に派手になる

宇部市　平田実男

使い捨てなじる割箸たちの私語
問診が身の上話にまですすみ
嫁の目を気にして孫達とはしゃぐ
増築の隣へ妻の偏頭痛
喉仏までの言葉が増えて老い

京都市　松川芳子

白足袋に女の自負を秘めている
補聴器に母の笑顔がまた戻る
大学入試裏目になった親心
それぞれの視野で見付ける青い鳥
思い出し笑いをしてるオルゴール

西宮市　奥田みつ子

千体仏　煩悩の数限りなし
ためらえば庭の桔梗も揺れている
母港あるから少し冒険しています
宝石展　螺旋階段下りてくる
仮の世の仮の姿か夫婦独楽

鳥取県　林露杖

万緑を両の掌に掬む岩清水
さつき展愚作一会の場を賜う
無一物吾に川柳雪月花
悔やまるる亡母に愛語の足らざりし
浄土から届く忌日の青嵐

岡山県　小林妻子

燕夫婦下の新車は気にしない
生きてゆく私も蠅も命がけ
気に入りの顔塗りつぶすのも日課
子に残す程の轍でなかったが
それなりの理由で背く初夏の髪

岡山県　矢内寿恵子

繕うて着せることなど風化する
足跡を辿り山坂越えている
子に愛の千語を埋める一行詩
ぜいたくな愚痴を流れている平和
負けて勝つ意地溜めている胸の襞

大和高田市　岸本豊平次

展示会目の正月が買う羽目に
歩こう会坂がありそで欠席し
雨の日の明日香のバスに一人揺れ
父の日は母の日ほどにあてにせず
水墨画余白に墨の色が生き

姫路市　人見翠記

旅立ちは形見の指輪身につけて
泣かされた人を慕うも女かな
万葉を読みて旅を夢みる我達者
目覚むれば花との対話またたのし
雨よ降れ机で本が待っている

箕面市　坪田紅葉

行く先は花の老後と思ったに
おしゃべりに夢中になれる友がいて
平成は女の天下と長い髪
堪えしのぶ事が女と教えられ
ぼんやりとうつる鏡に替えました

大阪市　大塚節子

世渡りの自信が女を喋らせる
命ありて今年も鱧食うている八十路
きれい言並べて一言刺をさす
爪ブラシ山蕗のあくしぶとかり
女独り誰がために炊く実山椒

宝塚市　丸山よし津

ぎりぎりに耐えて輪ゴムは役に立つ
地には地の情けがあって花が咲く
失った鍵が出て来る半ズボン
外敵に意外に強い蜘蛛の糸
豆辞典また同じ字を引いている

静岡県　薗田獏沓

逢う時の気くばり裏の喫茶店
泥水と戦闘帽は忘れまい
嫌われを百も承知で意見する
男一人残して女旅に出る
逢う友の薬の量が増えている

静岡市　渥美弧秀

成人の娘の眩しくて亡夫想う
孫叱る嫁へ姑は遠く居る
少年が今日も追われて通う塾
辞書の隅から万札が顔を出す
瑞穂の国のコメ脅かす星条旗

諫早市　原田メイシュン

雲仙普賢何気にくわぬか腹を立て
嫁ぐ娘に話す言葉の声に出ず
酒席の代役ならば俺もでき
新しい畳女房は古いままで良い
惚け防止などと孫の守りをさせ

東大阪市　崎山美子

色あせた虹がまたいだ歩道橋
先輩の一言再起を決意させ
弁当箱愛のエールがつめてある
手作りの弁当うれしい初デート
ドクターの一言祈るように待つ

羽曳野市　吉川寿美

面いくつ替えても人間臭い顔
消しゴムの滓を散らして負けが込む
罪状否認のまんまで夏をやり過ごす
気配りの過ぎる病夫といる疲れ
いま少し女でいたい片乳房（親友乳癌）

香川県　松村迷観子

弱点の方へ攻め手を変えてくる
前職という肩書がものを言う
金色が人の心を狂わせる
草木染自然の色は涙色
親なれば子なればこそと言う看護

松山市　谷真風

闘病へ幻聴という魔が攻める
待つ事は何んにもないがカレンダー
無無無のど飴一つ口にあり
病人をいじめるなんて下の下だな
病床に春夏秋冬五年たち

羽曳野市　田中透太

花菖蒲別れた人を連れてくる
弱音吐く男へ雨の日が続く
いつまでも恋の火種を持ち続け
言い訳はしないで欲しいお父さん
思いきり泣きたい港に母が居る

奈良県　長谷川春蘭

平穏に老いてゆくなり水中花
つつがなき友と再会夏燕
句碑を読む友の背にある夏帽子
向日葵やものの哀れと程遠く
幻想の空間に散る大花火

海南市　三宅保州

善人を演じ続けてきた猫背
九条の針を狂わせてはならぬ
真に受けてうるさがられる無礼講
少々の誤差は許せる古時計
こちら向かそうとするから逃げられる

十和田市　斉藤　劦

二輪草一輪散ってまた一輪
父の日の父は画用紙はみだして
よれよれの青い背広を待つ厨
悪い子はどこにもいない松の芯
廃線の駅が燕の子を育て

大阪市　坂口公子

サイクルが違うて鈍な旅帰り
うぐいすもおんなじ声で礼文島
最北限なんと遊散証明書
めのう海岸原石拾わす夕茜
雲の上の空の青さを信じよう

鳥取県　江原とみお

蛸踊りで終る境涯かもしれぬ
恩と恨みちょんちょんにしておこう
言い過ぎた後で毒消しのんでいる
ヘアトニックたっぷりふって出ていった
消しゴムでこすりつづける蟠り

大阪市　板東倫子

菩薩の名つけた岳から火砕流
目も耳も耐用年数来たらしい
投げた石ベンツに当る狭い国
拷問のような視線をはね返す
二百年目のモーツアルトと普賢岳

有田市　松井かなめ

何もかも話せる人にあいに行く
愛用の自転車取られ歩いてる
友の通夜般若心経すすり泣く
パトリオット子供遊びに入りこむ
酒呑めず出湯に酔うたフルムーン

豊中市　吉田あずき

虎の皮脱げば忽ち弱い鬼
弱いのが勝つと自分が勝ったよう
薬草料理飢えたあの日に似た記憶
衣替え相も変らぬワンピース
吃水線までは賢い女なり

奈良県　田中紀美代

子の地図に注と書いてる母ごころ
あじさいの咲いたその日が恋となる
でこぼこの夫婦でやっと一になり
潮どきを逃してからの長い時
風邪三日若葉無邪気に伸びている

尼崎市　奥山美智子

きっかけをつかむ眼鏡が見当たらぬ
日めくりに今日のけじめをつけて剝ぐ
帯かたく締めて女の意地がある
四捨五入　四に本心いれてある
シャネル五　女の軽い鬱がある

竹原市　岩本笑子

タンポポよきっと優しい風は来る
言葉尻　夫の機嫌をとっておく
かたつむり花言葉など知りません
ストレスは溜めない主義でよく笑い
仲の良い双生児へ違う友が出来

広島県　田村新造

シベリアの戦友を探しているルーペ
生き証人僕がシベリア語り継ぐ
望郷よダモイダモイが口癖に
ノルマまだ残る日暮れの歩み板
戦友の屍の肌着奪い合い

貝塚市　行天千代

老い一人愛妻号が大きすぎ
母の日はお寿司にケーキ食べすぎて
選挙済んで入れてない人礼に来る
雲仙もストレス溜って爆発し
火の雨が降るとは誰も思わざり

弘前市　真喜内實

えくぼより魅力不思議な泣きほくろ
箱庭で苺けんめい赤くなる
わが娘からカラオケレッスン受けに行く
婿殿が来るよりうれしにわか雨
きつつきにたたいてもらいたい背中

倉敷市　田辺炙六

行きたくない税務警察裁判所
夫婦して競う失せもの忘れもの
ラッパ吹く息も続かぬ父となり
耳遠くなって長寿の相と決め
童謡が好きで大正琴似合う

西宮市　西口いわる

あじさいの怪しいまでの美に浸る
愛一つ千のばらにも変えられぬ
雨もよしクラシックに酔うている
片想いそんなページもあってよし
少し病んで寄せ書きもらう愛もらう

高知市　北川竹萌

ふるさとを忘れぬ桜植えて出る
白日の下誠心のけじめする
納屋隅に秘密を詰めた火消壺
半世紀汗忍従の思い出よ
歳重ねコンピューターの外に住む

竹原市　岡本清水

子を思う深さを笑う弥次郎兵衛
末っ子七十　親から見れば未だ子供
宅配便都会の中の野菜畑
逢うて来た余韻静かな一人部屋
久久に訪ねし恩師居士となり

岡山県　二宗吟平

来賓で抹茶の席に招かれる
色々な礼儀作法の床しいな
願いごとする日は花の水を替え
騙し打ち薄着にすればすぐ嚏
仲ようてしのぎを削る同じ趣味

竹原市　信本博子

凧の糸切って景色の美しさ
成り行きで古いマンション買うピエロ
子の自立養老院を考えよう
イクラ丼血圧計が邪魔になり
あげるよと言えばよかった貸した金

高槻市　竹内花代子

留守番がボリューム上げてる名人会
スーパーのレジで素直な一円貨
約束は雨それも好し花菖蒲
連れ舞の蝶に見とれた花の谷
お使いの日傘が匂う草いきれ

弘前市　小寺花峯

知りすぎた過去が灰皿の中に浮く
満席の電車で漏れる子の躾
遊んでる風が団扇の絵に入る
泣いて飲む酒は男の黙秘権
みつかってあげたい恋のかくれんぼ

岡山県　松本元江

札幌のみどりが萌える通り抜け
白樺の芽立ちが映える日本晴
ライラックの花盛りなる五月晴
銀嶺のすっきり蝦夷富士雲払う
五百三十八人降ろして機体恙なし

富田林市　松本今日子

六帖は不精な私に丁度よし
中年二人ミッキーマウスに成り切れず（ディズニーランドで）
歯の抜けた声を聞いてる赤電話
辛抱をしている顔をしてあげる
リンゴ剝く女の無口に刺がある

守口市　森川まさお

舟に乗り足弱な人喋りだす
老婦人うしろを向いてラムネ飲む
鯉のぼり不快指数の低い朝
板の間の厨に寺の赤電話
潔さ城址に石が残るだけ

今治市　野村京子

保護色に慣れきっている丸い爪
ジューンブライド太郎と花子離婚する
夏帽子男につけるバーコード
妻が持つ鏡の視野で踊らされ
人目さけ恋の眼鏡がくもりがち

松江市　竹内すみこ

青空に本気で石を投げてみる
好きだからすこし離れて見ています
すぐ割れる割箸だから愛される
負け犬に傘が重たいはしり梅雨
一筋の涙をかくす赤い薔薇

島根県　藤原鈴江

おだやかにこの日を生きる流れ雲
振り返ることのみ多し萩の花
自転車に乗れば二十歳の風になり
喜寿になりやっと成人したような
老いたれどやっぱりロマンス大好きで

茨木市　堀良江

ヘアスタイル変えて人目が気にかかる
お互いに子をほめ合ってくらべてる
ままごとのお世辞ぴったり板につき
親だとは言っても割りが合わぬこと
昔菓子味の今様かこちつつ

島根県　石飛水煙

太鼓判押されて医師を凝視する
母静か黙って白い皿磨く
七十歳生母の顔は知らぬまま
正座して娘を他人に渡します
抜け道を考え涙も用意する

大阪市　桝本蕗児

自分史のあちらこちらにある漫画
万巻の書に埋もれて失語症
裸女群舞志功が画く観世音
B面を時々見せるのも男
ビデオでは審判のミスはっきりと

大阪市　町田達子

団地の風住人十色と言う気儘
マジックの鳩筋書を知っていた
太平記の里へ熟女の梅雨晴間
卯の花の匂いが風に懐古調
紫陽花の心変りを責められず

寝屋川市　堀江光子

忘れ度いことも昔の懐しさ
昔なら供の一人もつれた人
後継ぎのない名人の寡黙な背
水割りでカラオケ歌うただけの仲
養生は気永がよいと人事に

守口市　結城君子

羊雲あすの天気を予約する
地盤まだ譲る気はなし白牡丹
よしきりの案内役で舟すすむ
行々子サービスしてるように鳴き
夕焼ぐも雲仙岳は知らぬらし

大和郡山市　坊農柳弘

嫁が来てデザートやらが出るお膳
消しゴムで消せぬ心の日記帳
ほととぎす夏は嫌いと言ったのか
ハイヒール　マタニティーには似合わない
船酔いの予防に酒好きワンカップ

川西市　野村静雄

夕立に買物袋持ち替える
火砕流自然は人と妥協せず
道順を尋ねあぐねて通夜の家
行く先の詮索をして立ち話
少しずつ神に近づく物忘れ

弘前市　肥後和香子

とりかぶと一握り程の勇気です
真っ赤な嘘ギリシャワインはお見通し
抱かれ方上手に出来て風となる
恋すれば急遽猫科に所属する
嫌いでも好きでも涙止まらない

倉敷市　井上富子

山菜の籠に野鳥の歌も入れ
単純な動機で買ったプレゼント
藍を着て素足が運ぶ生ビール
イヤホンを陶酔させているバッハ
一人ぐらしの涙をためたマホービン

鳥取県　新家完司

梅雨晴れ間妻は洗濯ぼくは釣り
桃太郎それから利子で食べている
こころとは違う言葉が出てしまう
カルシウムが不足気味だね僕の影

大阪市　黒田真砂

荒海へ今飛び立ちぬ二羽の鳩（甥結婚）
友送る菊の香りと涙雨
ばらの私語聞くゆとりない日の不安
蝶々のささやきを聞くイヤリング

大阪市　寺井東雲

連敗の阪神応援限度ある
父さんの敷いたレールに刺がある
廃線が生れ変ってトロッコに
奥の手があるからマグマ恐ろしい

大阪市　渡部さと美

雨がえる一句ひねっている姿
山かげの貴婦人揚羽とそっと逢う
もつれ糸さらりと指摘第三者
コインランドリーよう働かせ雨しとど

大阪市　塩田新一郎

異議無し異議無しもう考えてやるものか
戦争映画好きで戦争反対で
呆けて来たとこちらで先に言ってやる
止まれ時古希の時計の螺子巻かず

大阪市　上田柳影

年金を貰いうぬぼれ捨てました
粗大ゴミと言われてからの重い口
有難いことUターンする土がある
無精卵あきらめ続く旅つづく

岡山県　荻野鮫虎狼

振向けば妻も出してる赤い舌
シナリオが少し変った夜が怖い
税務署も笑って済ます程のケチ
老いらくの恋は言葉を選ばない

岡山市　井上柳五郎

ホトトギス啼く声四囲の山戻る
古希祝い妻はいらぬと子に拒み
読み書きに視力根気も吐く弱音
がらくたを再利用へとためたまま

岡山県　岩道博友

焼き捨てる民具は惜しいが始末する
タイミングはずしてお医者へ行って来る
人波を抜ければ朝市終りかけ
客が去にやっと屋敷を開け放つ

岡山県　池田半仙

枝振りをためる皐月の金縛り
弥次喜多のような夫婦で五十年
一服のお茶も気分の味となる
戦乱の時代をなんで太平記

岡山県　山本玉恵

私小説の所どころにある過信
森ねむる明日を占う星の下
一本の綱に不信な掌がまじる
ためらいをみどりの風に見すかされ

岡山県　千原理瑛

祝盃がこんなにうれしいおいしいこと
グラス満杯ビールの泡の幸せよ
その傷に触れまいとして触れている
師の句碑と語ることの多き日々

岡山県　花田たけ志

ため息をつけばやさしい風当り
酢料理に夫婦げんかのつけが来る
無農薬農家は自家用だけらしい
銀行のバブル好みに身構える

島根県　石田清泉

満腹の世相地球まで怒り（雲仙岳噴火）
点滴に一切の欲捨てました
故郷のチマキは本当によく喋り
写仏して迷いが一つずつ消える

島根県　松本はるみ

水割りの優しい彩にまどわされ
紫陽花に一言もらしたばっかりに
二人から一人になったときのこと
日輪に叛きひまわり種妊む

島根県　北川民子

欠け茶碗欠けた月夜へ捨てに行く
年ごとに靴のかかとを低くする
車酔いわたしは天馬で駈け抜かん
流行語に振り回されて頭痛する

鳥取市　両川洋々

蓮の座を弥陀と指切りしておこう
万一の時に火縄が湿ってた
約束は破る気仮面もう要らぬ
太陽へ土の訴状は届くまい

鳥取市　小谷美っ千

たくましい母の枕が濡れていた
いわし雲男の野心かきたてる
迷うことなく西に向ってペダル踏む
裏切りを許して昼の月を見る

鳥取県　羽津川公乃

幸せを溜める袋は大き目に
胸襟を開いて青い空を抱く
ライバルの長所も策に読んである
闘病に勝って歩幅も広くなる

鳥取県　土橋はるお

橋の上の二人に丁度よい月だ
境界杭打ちに子と孫つれてゆく
電柱の上で陰口聞いている
選挙カーに泥ん棒の手振ってやる

鳥取県　乾喜与志

万歩計持たず三十分あるく
振り返る九十年が矢の如き
杖持たぬ白寿に従いてゆく卒寿
犬連れた人のうしろの朝の道

島根県　佐々木芳正

足して二で割ると程よいお二人で
大の字に寝て薄給に甘んじる
送り出す妻ネクタイに一寸触れ
郭公が鳴くと古里からちまき

鳥取県　西原艶子

プライドを捨てて体重計にのる
貫いた愛を支えたお茶がある
口紅をひいて女の業羽織る
約束の指切りをする愛でなし

出雲市　板垣夢酔

台風に風鈴たまげている悲鳴
金出して踊る阿呆を見に出掛け
カレーは子供ハヤシは大人恋の味
コーラスの蛙と乱舞する螢

出雲市　小白金房子

間伐材生かす子供の遊園地
さかずきに男の野心こぼれ出す
花火師の苦労真夏の夜をこがす
竹の子の器目を引く京料理

米子市　川上より子

友の退院胸張って家留守にする
西瓜苗すそ分けすると雨となる
植えしまい茫々の海に今抱かる
誘われて七夕を書くふと初心

米子市　金山夕子

恥じもしない自慢もしないわたしの子
呆れるね猫につられて大欠伸
印象がだんだん黒くなるお方
川柳は麻薬と友は言い切った

倉吉市　渡辺菩句

腹の虫泣くそっくりに春の雷
連休が終りドリンク売れたとさ
絵ごころはあるが絵筆を持たぬ指
峠から降りたくはない絶景かな

倉吉市　淡路ゆり子

老いとなる今日も笑顔を大切に
海老で鯛釣る気で父にプレゼント
爪切って明日のおしゃれ考える
成るがまま成さるるままに活火山

和歌山市　若宮武雄

こぼれ種自由に生きる意地を持ち
嘘を書くこの便箋が白すぎる
義理欠いて不快指数に責められる
土蛙決して顔に泥塗らぬ

和歌山県　岩崎瑞穂

口喧嘩後は静かな黙秘権
まだ揺れる情熱があるループタイ
見え透いた嘘を真顔で聞き流す
節高で指輪の味を知らぬ母

和歌山県　西口忠雄

鳩時計照れてるような声がする
泣きに来て笑って帰る伯母がいる
切られ役ばかりの父は庇えない
目ばなしのならぬ夫の軽い靴

和歌山市　北山好笑

信仰の熱い夫婦の離婚劇
狂信の友に踏絵をふまされる
すばらしい借景栄養過多のモデル来る
観光地の風景恥が落ちている

岸和田市　芳地狸村

妻の顔ぼんやり浮かぶ麻酔抜け
ぱったりと顔だけ知ってる人に会い
正成を探るハイカーのバスの列
キャンプ地の奥に出会った滝の音

岸和田市　原さよ子

らっきょ漬け梅つけ主婦は満ち足りる
うっかりが日々多くなり老い進む
素直にはなれぬ自分を持てあます
従姉妹会皆ちょぼちょぼでよく喋る

誰を待つあじさい彩を替えながら
何げなく話せば意外や縁続き
因果とや親子がたどる同じ道
ふれ合いの人皆優し老いの旅

岸和田市　清野こう

信念に生きて矍鑠八十路ゆく
貧農の汗を嗤うかコンバイン
年寄りの煙草と愚痴は止められぬ
使わねば老いの器械は錆びていく

倉敷市　稲田豊作

二人暮しなのに忙しく梅ラッキョ
五十肩と言われて五十を意識する
地球儀で孫のハネムーン今日このあたり
雑草がまたまたのびる雨の庭

神戸市　山口美穂

齢ですか私の額広くなる
エプロンの白と平和はいいもんだ
ある絆座布団なんて水臭い
パスポート無用と鬼が呼んでいる

呉市　槇田英詩

かっちりと生きる相続した日から
形容の違いでこうも凸と凹
花ことば知って縁起をかつぎ出す
母老いぬ故郷の四季は忘れない

竹原市　森井菁居

肩の荷が重い間は夢がある
長雨へ蛙いかにも愉しそう
どの柄も売場の鏡よく似合い
米がどうなろうと苗をしかと植え

西条市　片上明水

神も鬼もいる世の中に生きている
欲が無くなって歩調をすぐ合わし
老いのリズムまだ崩れなく米をとぐ
意地ばかり張っておれない老夫婦

堺市　柿花紀美女

参観日吾子の自慢へママ化粧
五里霧中かすか北方領土権
霧笛泣く北の領土へ墓参船
陶工の血の汗滲む赤絵皿

唐津市　筒井朴竜

万歩計ふしぶし痛む日は越えて
万歩計寄るは昔の通学路
笑わずに外人長い握手する
校舎あり老人寮となる歴史

町田市　竹内紫錆

昔から変らないわとあだなこと
父母苦労した道子ども避けて行く
勘当と言えば口笛吹いて出る
嫁自慢お稽古事も中に入れ

藤井寺市　福元みのる

十和田市　阿部　進

倖せは愚痴をこぼせる妻が居る
勤めより疲れがでます孫の守り
古里の道につまずく石がない
もくもくと一途に歩く駄馬の道

黒石市　相馬一花

玉露には番茶の気持ち判らない
近眼の振りして老眼かける妻
できそうな顔の生徒が落第し
女房の留守に夫が洗濯し

弘前市　村田善保

四面楚歌　人形になり聴こえない
鬼手仏心　全力尽すメスの冴え
生かされて生きてる生命大切に
温かい話で病床励まされ

和泉市　西岡洛酔

妻無口低気圧の不安定
雑兵の靴のちびりは勲章さ
消費税味方に一円玉の価値
百度石　善男善女に磨かれて

和泉市　岡井やすお

告別式にはライバルもほめてくれ
高齢化へ仕事の質を変えてみる
酒の味判りはじめて量が落ち
額縁の裏の掃除は念入りに

広島県　藤解静風

逢いたくて海が見たいと書いておく
自己弁護みごと女は足を組み
不粋な旅でいつでも妻が従いてくる
お隣の畑も荒れてほっとする

河内長野市　井上喜酔

栄光を追えば思い出限りなく
切り札を出すのが怖い意気地なし
雑草の仲間にいれば安堵感
策持たず敵の真ん中通り抜け

河内長野市　植村喜代

目まぐるしく冬あり夏ありこの五月
信じてはいけない人程寄って来る
首の鈴替えたばかりに猫の世話
姑さんを見舞って老い先見たことと

羽咋市　三宅ろ亭

緑陰という極楽に頁追う
安らぎに似てくたびれている眠り
一汗をかいて快適の語意わかる
一筋縄にゆかぬ人もいて過疎

加賀市　細呂木魯木

終ってみれば空しいサスペンス
人生の一齣勝つための座禅組む
応接間あっても座敷のない暮し
おふくろと呼ばれ貫禄ついてくる

福岡県　横地正好

雨の日の理髪屋野良着が順を待ち
妻別姓何とはなしに畳冷え
花剪れば蜂の縄張り飛んで来る
籠の鳥養老院の愚痴を聞く

西宮市　瀬尾六郎太

中之島バラに誘われてゆく二人
セピア色変色写真皆善人
尊厳死安楽死なんて綾の綾
五臓六腑持ちこたえたぞ七十年

西宮市　秋元てる

眼の奥の津軽はいつも蟬しぐれ
アルバムにひっそり生きているドラマ
千手観音中の一本吾に向く
亡母と混同　手を握っている病妹よ

富田林市　片岡智恵子

鉄せん咲く声なき言葉吐くように
言葉さえ知らず恐怖の火砕流
講話きく心の脂肪とるために
はじらいの頬りんごから貰う

寝屋川市　平松かすみ

亡母帰るきれいに障子張り替えて
ムードには弱い男の空財布
ごてること覚え車道へ寝ころがり
他人さんと比べてみたく孫の口

伊丹市　山崎君子

美人ではないけど孫のいい寝顔
留守居番戸締りをして昼寝する
梅雨入りのあじさいの愚痴聞いている
梅雨晴れにひとりで歩く港町

奈良市　米田恭昌

愛想よい孫　孫なりの処世術
合掌の心忘れぬ老母の微笑
泣きじゃくる子を指切りで安堵させ
一人寝の振子の音の恐怖感

八尾市　吉村一風

土壇場の決心酒に見透かされ
たまに来て寝れるだけねて子は帰り
土地を売るはなしは仏間避けてする
湧いてくる涙に蓋も底もない

藤井寺市　中島志洋

エリートがごみ袋提げご出勤
肩書を誇示する胸の白いバラ
ダイエット鏡が辛い点を付け
セールスをいらいらさせている無口

吹田市　栗谷春子

練供養足もとかなりご老体
天からと地からと五月いただきぬ
眩しさに五月はこころ傷め月
赤信号男ありけり渡りけり

静岡市　安本晃授

早送りしたいビデオの僕の罪
どん底で思惑ちがう縄梯子
価値観のだんだんずれる子供部屋
人生の裏道好きな土踏まず

豊中市　滝北博史

抱き上げてベッドへ運ぶ日もあった
女房がくれた靴代飲む屋台
お互いに言い訳しない夫婦です
人生に橋のない川多かった

豊中市　江口明光

親戚がばたばた逝った義理の数
二枚舌使いこなしたダルマの目
大谷廟高い品位で眠る亡母
よく怒る主人があさりの砂を噛む

島根県　高野律子

八方美人ぬるま湯好きで敵もなく
ライバルに足ぶみばかり見せておく
呆けるなよ一日一度言うて見る
冗談と思えど案外本音かも

豊中市　上田登志実

盛り場に人溢れても人不足
ネクタイの一本ごとに過去絡む
梅雨しとどされど予定は変えられぬ
葉ザクラになって交番ほっとする
日本中兄弟という縄のれん
ひと言で揺れる若さがまだ残る

豊中市　一瀬福一

はじらいが今でも残る山の宿
ひとりぼっちの儚さを知る旅路
約束を忘れていない流れ星

出雲市　石倉芙佐子

拾い物一瞬サタンが囁いた
優しさを一杯貰った松葉杖
おにいちゃんが留守でファミコン一人じめ

出雲市　小玉満江

倦怠期夫婦茶碗を替えて見る
色直し新婦レンタル帯を締め
義理一つ消して喪服の帯を解き

箕面市　椎江清芳

鴉の子拾って来ました愛しくて
家ぐるみ動物好きで賑やかで
五月雨がトタンの上で踊ってる

境港市　細木歳栄

さらさらと砂の泣く声きいていた
大きくも父の声には愛がある
地上げ屋の罠にかかった都市砂漠

鳥取県　津村八重子

浮気虫頭を上げる四十代
金も有り暇もあるのに寝老人
満七十嬉し淋しの無料パス

大阪市　清水利武

去年の梅そのままにしてなお漬ける
山門に立つと己の小さきに
父の日や老父語らずとも高楊枝

米子市　白根ふみ

紫陽花の道を辿れば寺が見え
蓮の花浮いた言葉に騙されぬ
キャッチボール親子の絆ある広場

米子市　茂理高代

満ち足りて健忘症になるつばさ
蜜蜂の群に女王が二匹居る
浮く事を先に習ってからにする

米子市　木村冨美子

開発はダメらしいからリゾートに
早起きで年とったねと笑われる
特徴は横着病と早食いだ

鳥取県　谷口次男

新開発故郷の街を観光車
卒寿までを話題にし合いクラス会
輪の中がだんだん欠けてつむじ風

大阪市　冨岡温子

鉛筆が大黒柱背負ってる
礼服の客で混んでる無人駅
家裁まで行って夫婦の絆たつ

鳥取県　幸家單車

子離れができず子供にぼやかれる
調子良い返事の軽さ気にかかる
冗談にかこつけ本音吐いている

岸和田市　三輪通彦

ある日突然夏になりました
焼け木杭の二人がバスに乗り合わせ
うちの孫とうとう蓼にされちゃった

大阪市　岡田ふみ

舟遊び水面の風は歴史めく
カラオケにお国訛りのまじる宴
石鹸の香漂わせて今日の倖

大阪市　松尾柳右子

台秤食べ過ぎというキログラム
初恋の人によく似た店で買う
迂濶にも言葉がすべりどないしょう

吹田市　井上照子

仙人のようでも金で回れ右
急逝に曇った眼鏡ぬぐえない
心とは違う敬語に舌を噛み

鳥取市　岩原喬水

鳥取県　上田俊路

順風に乗ってサインを見落した
エリートの部下が目立って気がもめる
瀬戸内の夜景ほのかな島の宿

大阪府　籾山隆

手にすれば川のバッジの重たさや（新同人に推薦されて）
句の道の標はやっと一里塚
師の教えつねに脊髄走ってる

鳥取市　美田旋風

歳月とともに野心を捨てて行く
ひな壇へ雑魚の反論届かない
山陰へ壁画が謎をかけてくる

鳥取市　武田帆雀

マイカーで髭剃る朝の寸刻み
嬉しくて三番までも唄い切る
何事もなかった朝の玉子焼き

鳥取市　春木圭一郎

縁結ぶ神と信じて手を合わせ（出雲大社）
二人連れ静かな方へ行きたがり
神々のお宿十九社せまかろう

大阪市　神保拓生

呆けた人笑うな君は若いだけ
現代っ子ホテルの庭でほたる狩り
地下街で方向音痴道を聞く

香川県　木村明人

金貸すとそれからバッタリ横を向く
白黒を付けず玉虫色で置く
長期入院愚妻に大きな借りが出来

鳥取県　田村きみ子

梅雨明けてうまい空気を吸っている
墓掃除すまして肩が軽くなり
慰問文昔むかしに書きました

川西市　松本ただし

真実を追う向日葵にある疲れ
口だけが上手になった冷奴
ゴキブリも僕も動かぬ熱帯夜

鳥取県　前田一枝

約束の場所を違えて恋逃がす
小心な男大きな法螺を吹く
水ねだる鉢に水やり今日終る

島根県　加本義良

春の彩雨の雫が濃くなる
梅雨空を中和させてる赤い橋
こだわりを捨てると広い茜雲

吹田市　山本希久子

意外にもせまい世間と知る輪廻
薬飲むための大事な食事です
記念する日となりましたお月様

自選集

脱税のワーストワンにただあきれ
われ以外みな師の思い丸くいる
恋百句恋三百句ああ激し
世の中が変わり鳥は街に住み
亡妻の指輪が娘の指にまだ光り

工藤甲吉

清く生きてきたなと波うち返す
ひと言が足りぬと自分でも思う
近道を走ってきたと正直に
出好きな人だと好意持っている
いわしの浜に立つと女は若返る

正本水客

日本の食卓に乗る多国籍
修理代だけは助けになる器用
万歩計今日の健康確かめる
如才なく易者は明日の虹を見せ
睡魔にもだんだん弱くなって老い

金井文秋

雲仙岳マグマの歴史くり返す
戦争は人間の群れ飢えている
せめて影の内閣でもと社会党
踊り忘れた男　金儲けにも疲れ
体験談共感をよぶ拍手鳴る

藤井明朗

ほろ酔えば軍歌を唄う父でよし
一坪菜園枝豆見事に出来てます
スポンサーのないＮＨＫが好き
惚れているのか身上話する
代役のそれからすーとスターの座

松川杜的

雲仙へ科学は逃げよ近寄るな
差別とは何現実のない叫び
浴衣着て逢えば夜店の灯も憎い
一言へ三口返って耐えている
物忘れ貸しと恨みは別らしい

大矢十郎

鈍行の窓を開けるといい風だ
家族みな呼ぶと本社へまた戻れ
だんだんと私語消えさせてゆく講話
手を拭いて恐縮そうに握手する
サングラス素肌多目に見せたがり

黒川紫香

夕鴉噂を撒いている樹海
妻よりも先に死ぬると決めている
橋のない川落人の里がある
綾取りがとっても好きで子が産めず
目の前で地獄を作る火砕流

月原宵明

八十を生き抜く冒険しています
輪の外で小さなワルになっている
無理したらあかんと叱る長女次女
巣立ち皆させて小さな鍋洗う
角砂糖とけてく形で退化する

岩本雀踊子

走馬灯くるくる消えない亡娘の姿
初盆が亡娘の思い出をかきたてる
逝った娘に逢うて一夜を泣き明かす
倖せの薄さに耐えた娘の笑顔
蟻の列ルール違反も時に見る

藤村〆女

転げ落ちた谷を浅いと錯覚する
錆びた槍小脇に谷へ降りてゆく
いくつめの谷かと蛇は這いながら
谷底にもすこし足らぬ縄梯子
償いの谷の深さが測れない

八木千代

計画と裏金動いてマーケット
年金で暮して嘘の無い平和
根来寺の木かげでちょっと待ってやり
おばはんの内職めめくそ程の嵩
真夜中の電話にふたり目くばせし

児島与呂志

笹舟に座り知らない海に出る
先生にあげる野花を摘んでいる
おちつけよ橋が揺らいだことくらい
親指の痺れ　不孝のせいだろう
長い夢たっぷりと見し母米寿

久家代仕男

のどに穴あけて言葉を失いぬ（救急センター入院・手術）
死神がちらちら覗く白昼夢
点滴瓶見上げて今日も陽が沈む
九死に一生取り巻く家族の顔が浮き
長生きをしすぎたなァとふと思い

有働芳仙

知恵を借る千翁　河童に話しかけ
宿命を千翁河童と一騎討ち
河童描く千翁キッスしたくなる
歩いて来そうな河童　千翁自惚れる
河童にも馴れて千翁恋の筆

水粉千翁

激しく生きた静かに過去を語る人
明治には弱い大正甚振られ
時流にも乗れず暗喩に自惚れる
駄洒落食傷一つ覚えの片仮名語
大局を黙って視てる父が欲し

野村太茂津

お汁粉の梯子いやいやついて行き
僕のこと言うてるような句に出合い
還暦の今は共同生活者
祭り寿司頑固に里の味守る
遠来の観光客に道譲る

野田素身郎

バイブルも父の短所を知りつくす
目を閉じて宴のあとのさびし過ぎ
親子断絶これが儒教の国ですか
寄ってゆけゆけとカラスがそそのかす
石楠花を陰紋にする帯の人

波多野五楽庵

妻がしたとおり湯が湧き飯が炊け
いい腕を持った切身が薄すぎる
さじかげん妻に預けてあるいのち
マネキンの足から初夏が萌えて来る
お念仏だけが詰っているあたま

遠山可住

肩の凝る人と別れて歩を早め
恋人と歩くと邪魔になる雑誌
手招きの話へ乗ると怪我をする
プラカード気楽なバイトと思われる
ラブレター子供が欲しいと書いてある

辻白渓子

お別れにくれた笑顔が最高だ
ささやかな善意黙ったままで去る
満点のテスト宝にして励み
悲しみに耐える枕が高すぎる
反省の酒に悪酔いしてしまい

小林由多香

斑鳩の古墳悲劇も秘めていた
冤罪で次々皇子が葬られ
残酷史も共に発掘する古墳
蘇我藤原汚点も残した日本史
川原寺　礎石の白は何語る

阿萬萬的

曇後晴を信じる塾通い
目裏に恩師の檄が活きている
嵐呼ぶ静けさを抱く鳶の輪
又しても打たれる杭に甘んじる
食うてチョン屈託もない笑顔持つ

西田柳宏子

にんげんの欲ぶらさがる星まつり
夕食のおかずに悩む妻の愚痴
コメ買ってくれとデパートから電話
葬儀社の暑中ハガキが無事に来る
生ゴミにされるおそれを抱いている

高杉鬼遊

字余りのはがき何度も出してみる
風鈴を買いそそくさと戻るなり
忙しいからちょっとだけ昼寝する
もう済んだこと紫陽花も色褪せて
下駄履いて歩けばさぞや涼しかろ

小出智子

あてみんなはずれて水を飲んでいる
喜んだぶんだけよけい腹が立ち
ポケットの寒い予感はよく当たる
一病息災　用心深いスニーカー
ライバルの喜ぶ顔を見せられる

河内天笑

ふれあいの祭典'91

川柳祭作品募集

作　品　3題・各1句（未発表作品）
題と選者（1題3人共選）

「米」　橋本衛門七
小川惣郎　伊佐次無成
「像」　伊東静夢
池田南岳　中野文擴
「娘」　鳥本　泰
春城武庫坊　和田光代

2次選者　去来川巨城　小松原爽介
黒川紫香　藤本静港子
平山繁夫

応募料　1000円（定額小為替）
締　切　8月31日
応募先　加西市北条町横尾514
加西市役所　川柳祭係

第10回 夜市川柳募集

	題	選者	締切
第1回	「顔」	小島蘭幸	6月末
第2回	「流れる」	谷垣史好	7月末
第3回	「街」	石部　明	8月末
第4回	「友」	高杉鬼遊	9月末
第5回	「泡」	八木千代	10月末
第6回	「ひらく」	森本夷一郎	11月末
第7回	「皿」	小出智子	12月末
第8回	「魚」	金築雨学	1月末
第9回	「卍」	森中恵美子	2月末
第10回	「名前」	中尾藻介	3月末
第11回	「続く」	橘高薫風	4月末
最終回	「芸」	西尾　栞	5月末

投句先　〒593 堺市堀上緑町2－9－2
河内天笑方
堺川柳会

—同人吟

秀句鑑賞

—七月号から

田中正坊

愛はほのぼの大草原の小さい家

石川　侃流洞

アメリカの農民一家の生活を描いたこのドラマ・シリーズが放映されてからひさしい。近ごろの何かにつけて威猛高な指導者たちとは無縁な、古き良き時代の庶民の営みがそこにはある。格言や歌詞の一節、あるいは慣用句を安易に句に織り込むことについては問題もあるが、この場合は成功している。父親役のマイケル・ランドンが七月、病死した。

ばあさんの頬へキスした阿呆な蚊よ

宮尾　あいき

このところ、ユーモア句が少なくなったと言われ、その原因の一つとして女性作家の進出が挙げられるが、どうしてどうして…。最近、本社句会でお見かけしないが、いつもニコニコ、ことし傘寿を迎えられた作者の顔がポッカリ浮かんでくるような楽しい句。

タンポポの踏まれた型で花が咲き

宮崎　シマ子

ゲンゲ、クローバーとともに、野草の花の代表のようなタンポポ。今では在来種の日本タンポポよりも、公害に強い西洋タンポポの方が多いようだ。どのような環境にもめげずにたくましく生長して花を咲かせ、やがて白色の冠毛が風によって四散し、各地に仲間を増やすタンポポに栄えあれ。

小糠雨　人が死んだり生れたり

中村　ゆきを

小糠雨—細かい雨、霧雨とも言う。ごくあたりまえのことを、あたりまえに詠んだ何の変哲もない句ではあるが、「小糠雨」という一語がよくきいている。

ノルマにはまだまだ足りぬ雪乱舞

田村　新造

今年に入ってから毎号のように投句されている〝シベリア回想〟の連作を心して読ませてもらっている。二月号に「シベリアの名簿へ胸がまた疼く」とあったように、新聞に掲載されたカタカナの抑留死亡者名簿にかつての痛痕の体験が蘇ったのだろう。帰還者たちの胸には、今なお雪が乱舞しているが、自分史を回想してこのような連作にまとめるのも川柳の一つのあり方ではないかと思う。

右往左往しているうちに歳をとり

小田川　智重子

全くこのとおり。はじめて社会人となった二十代、働きざかりの四十代、定年後の六十代、そして気がつけば古希—というのは私の場合。敷かれたレールの上を、まっすぐ進むようにはいかないのが人生。「右往左往」という四字熟語が生きている。

まだ不良少年　のこっている父だ

河内　天笑

まさに作者の自画像。私自身も何を隠そう中学生時代、〝秘密警察〟ならぬ教護連盟という名の〝隠密教師〟に補導されたこともある不良少年だったが、何事にせよ禁止されると、それを犯したくなるのが人情。そしてその習性は、終生変わらない。所詮、大人とは子どものひねたものに過ぎない。

大騒ぎして島の名を書いただけ

工藤　甲吉

ゴルビーの来日、それをはやしたてたマスコミ。あの大騒ぎはいったい、何だったのだろうか。打つべき時に打つべき手を打たず、格好をつけるだけの日本外交を風刺して余すところがない。

秀句鑑賞をお願いした先輩が体調不良で辞退されたので、ピンチヒッターとして一筆。

川柳太平記（159）

川柳の群像

山内静水

東野大八

おそろしく古いことで万事覚えもないが、四十代も末ごろだったと思う。どこかの川柳大会の帰りに駅前のとある古道具店の店先で

「やあ、ここに居やはったんですか、センセ」といきなり声をかけられた。見ると当方と同じような冴えぬ風態の一人の男。

「何を買やはるんです？」

「ひやかしだよ」

と答えると、この相手―。

「鉄瓶の掘り出しもんが欲しいんです」

と奥の方へ行ってうろうろした挙句、

「こりゃあいいや。どうですこれ？」

と埃だらけの奴をぶら下げて現れさし示す。

「南部もんだな。黒くて丈夫そうだ」

とこちらは無責任に相づちを打つ。

「センセがいわれるんだからこれにする」

と独り合点してそれを包ませて現れた。

「失礼ですが、貴方はどなたです？」

「やあ、これはこれは竹原の山内静水！」

と丸っきりあけっぴろげで黒い目をむく。すべて生地なりでものを言い、行動に移る。その小気味よさについ嬉しくなって、古新聞の重い包みのこの相手と握手してしまった。これが筆者と静水の最初の出会いであり、それっきり二度と会えない間柄で終るという、まさに一期一会であった。

右のような至極人間的な、親しみやすい闊達さだろうか。彼を知る柳人たちは、静水といえば誰もがニコやかに敬愛の情を示す。

その好漢山内静水が、去る三月五日永眠した。その本誌の追悼記事を目にして、筆者はかつての日の黒い鉄瓶の肌を想い起こし、寂しく心の中で合掌した。享年七十五歳。

山内静水・本名俊見、大正5年3月10日竹原市竹原町生れ。小学校卒業と同時に、石工見習五年修業。昭和11年現役志願、福山歩兵志願合格、中国大陸を転戦。昭和15年現役除隊、国鉄に奉職。昭和17年召集されてラバウル守備隊へ、終戦により21年5月帰国して国鉄へ復職。昭和45年呉線電化により国鉄勇退。約三年間新日本通商株式会社勤務、病気退職。

以上が家族句集『おかげさま』の家族略歴における戸主静水の要約である。

一方川柳人静水の方は、昭和30年光鉄道病院の川柳会に入会したことにはじまる。その翌年9月竹原川柳会を創立する。

「私は昭和29年暮、突如T病の宣告を受けたが、お蔭様で主治医も驚く程、快調一年にして退所は出来たが、川柳と言う菌にとりつかれていた。（中略）『ひろしま』主幹森幽香里女史にいろいろ相談をして静水の号を貰った。後日女史曰く「水」ほど勢いの強いものはなかった。「静水」は間違っていたかなあと笑っておられたが、以来路郎師の『川柳は人間陶冶の詩である』の師の心を心に、川柳

に静水の号に恥じない人間に少しずつなるべく努力を続ける所存です。国鉄職員五十歳」（『川柳塔』雅号ぶっちゃけばなし）。川柳をはじめて早々で地域グループを作った頃の環境へのいらだちで改号したらしい。

この頃、兄事した川柳の先輩が、山田季賛（本名且三）である。歳は十歳も下だが、鉄道関係では高専卒の格も上の実力者で、川柳面でも約十年もの大先輩、静水が川柳になじみはじめた頃は、『川柳雑誌』不朽洞会員である。したがって二人の仲は、齢の隔りも忘れて、季賛は静水を「俊見トシミ」と本名で呼び捨て、一方、静水は「兄貴」と敬称して後からついていく弟分であった。

季賛の柳熱は大変なもので、日帰りのできる川柳大会には、子どもをへこ帯で背中にくくりつけ、街でも駅でも大会場でもお構いなしという傍若無人ぶり、その子どもが成人すると静水は媒酌人の役回りを勤める仲だった。こんなことから昭和51年6月季賛が病死すると、彼の遺句集『鉄道草』（B6判・156頁）を静水が編集発刊の大役を引きうけている（昭和52年6月竹原川柳会刊）。

また、静水は竹原川柳会会長として柳誌『たけはら』が軌道に乗りはじめた昭和42年初夏、学生句集『竹の子』を発刊している。

「川柳たけはら誌の佳句短評を書くようになってからもう四年になる。今では毎月の近詠の中でもことに学生諸君の作品を読むのが楽しみである。（中略）例えば小島蘭幸君などもその一人である。

先生のミスをそのまま真似て書き

これは昭和39年同誌一月号に掲載された作品だが、当時高校一年生だったと思うが、いかにも学生らしい面白い着想だと感心した句である。それが学窓を巣立ち、社会人となった蘭幸君が

ウインドを覗く女の眼女の眼

のような句（昭和42年6月号）を見せるほど成人している。まさに長足の進歩であり、歳月の流れは矢の如しである」（『竹の子』序文石原伯峯）。この蘭幸が静水亡きあとの『川柳たけはら』の編集発行人の大活躍をするのである。

静水自らの本は、川柳界でも話題を呼んだ家族句集『おかげさま』（昭和56年刊）がある。B6判二百二十頁の大冊で、その内容は、静水、妻房子以下八人の各家族の労作によって生れたことは「短詩型文学の詩句集は数多く出版されているが、この本がおそらくこう矢であり、静水君の面目躍如たるものがある」とその序文で中島生々庵が書いている。

この本の後書に静水はこう書いている。

「句集編むときめき五月の風光る　静水

尊いお恵みによって生かされて六十五年。幼い時に井戸に転落、支那事変、大東亜戦に参加と、とうの昔死んでいてなんの不思議もない私が、今朝もパッチリ目覚めさせて頂いた。体重45㌔と痩せこけているが、どこも悪いことなく勿体ないことである。人様から所望された時、うぬぼれにもさらさらと書けるような句のない私に、発刊に踏み切らせたのは、会員の勧めもさることながら、子供は勿論のこと嫁御まで、作品はどうあれ川柳を作ってくれた事に勇気づけられたからである」

「―君、川柳は下手でもいいんだよ。川柳は情熱だよ―と麻生路郎師から情熱のバトンを受けた静水さん、今その情熱のバトンは、私たち竹原川柳会会員の一人一人の手の中にあります。一人一人力を合わせて竹原川柳会35周年記念大会をきっと成功させます。見ていて下さい。合掌」（『川柳塔』小島蘭幸悼文）

辞世の句　　山内　静水

ようようしてもろて幸せでした

どこへおつれなさいましてもいだかれて

▼次号は「**若柳　潮花**」

柳籠裏三篇研究（八丁～九丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

137　**げびた餅菓子杉ッ葉が真半分**

青木＝普通の饅頭に比較すると、大形な杉ッ葉模様を焼き付けた葬式饅頭。この食べ残しの真半分になったのを茶簞笥の菓子鉢などに見付けたが、あまりうまいものでもないから食指が動かぬので、下卑た餅菓子と言ったのであろうか。

佐藤＝賛。二つ切りにして客に振る舞うのである。その形からして上品とはいえぬ。

岡田＝じつは杉っ葉でなく柴です。それを饅頭の上におき、焼ゴテを当てて葉っぱを取り去ると、葉の部分だけが白く残る。葬式用に主として用いた。

138　**じやうけすに釣をよこせと根津でいゝ**

青木＝「じょうける」は、ふざけるの意。岡場所の一つ根津へ遊びに来る客は、土地柄で大工客が多かった。

主題句は、大工客が遊び代金の釣り銭を受け取ろうとしているのに、女郎がふざけてなかなか渡さないので、「じょうけず」に釣り銭をわたせと催促している図。

佐藤＝賛。「このおつり、あたいが貰ったァ」と女郎が冗談口を叩くそぶりで、あわよくばせしめようという魂胆だから、それで客も主題句のような口吻を漏らすのである。

岡田＝四六見世ですから、一分出せば必ずツリがくるはずなり。

139　**たれながら火をかして居る野がけ道**

青木＝くわえキセルでせいせいと立小便をしていたら、野がけに出て煙草が吸いたくてうずうずしていた男から煙草の火を所望された。野がけに出かけた仲間同士のようにも思えるが、他人から火を借りている光景と見たい。

吸い付けて煙をいただく野掛道　二20
吸い付けて連れに追っ付く野がけ道　昭三桜4
野がけ道けぶを出し　一人駈け　明五松1

西原＝賛。せわしいことだ。

岡田＝同。

140　**紋ン付ヶを雛にだかせて奥へ出し**

青木＝紋付は、宝引に似た一種の賭け事の遊戯。

主題句は、賭けの紋付け紙を雛人形に抱かせて奥へ出した。「雛に抱かせて」から推定すれば町家ではなく、大名・旗本の奥のような気がする。とすると、はしためから腰元へ、さらに腰元から雛に抱かせて奥の恐らく町家

上がりの側室へと出した。駄労解です。

佐藤＝「雛に抱かせて」がはっきりしないが、礎稿のような状況か。「奥へ出し」を特定の人物の所と考えず、奥女中たちのところへ、というだけでよくはないか。

七久保＝主題句の中七「雛にだかせて」は、青木説のは雛人形に抱かせての意ではない。「お節句の日に」であろう。下品な博奕である紋付けも、この上品な雛の節句の日にかけてすれば、多少なりともそのあやかりで上品そうにみえるのである。この句の場合の商家の感じがする。

西原＝七久保説に賛。お屋敷における節句日の、今のアミダくじ程度の遊びであろう。

岡田＝雛の上にのせては、即ち雛でカムフラージュ。〈奥〉は、紋付が入るのだから大名邸ではなく、旗本などのお屋敷か。

九丁

141　**江戸に無ひ紋日田植と祭リ也**

佐藤＝「紋日」は、物日の音便で、この場合は遊廓の物日、つまり五節句その他特別に定められた行事のある日をいう。

主題句は、大坂の住吉明神のお田植神事に泉州乳守の遊女が奉仕する民俗と、京都の祇園祭に、奴と称する断髪男装の遊女が神輿の渡御に供奉する民俗の二つは、江戸吉原にない紋日になっていると詠んだ句であろう。

江戸にないのがやっこと五月女なり　三一19

田植から一月置て奴なり　傍一39

田植の奴のと女郎けちな所　筥一31

鈴木＝賛。**岡田**＝同。

142　**百人も肴屋よんで伊勢屋買**

佐藤＝伊勢屋は吝嗇家の代名詞。魚を一匹買うにも、高い安いを吟味して、何人も肴屋を呼ぶというのであろう。それにしても百人とは大げさだが、「百」の語は何かの風刺でもあろうか。

七久保＝主題句の「百人も」は吝嗇家の伊勢屋がその気性まる出しにして値をたたいてる様を大げさに吟じたもの。また、この「百」は鰹の値の「百文」を表わしている。

初鰹あつかましくも百につけ　五3

紀内＝七久保氏説どおり、この魚は「初鰹」としてよいと思う。「女房を質においても」という江戸っ子に対して…という句である。

西原＝賛。伊勢商人の勤倹ぶりを江戸っ子が悪口に「伊勢乞食」といった。川柳では伊勢屋といえば、「けちんぼう」の代表、それを大げさに詠んだ。

岡田＝やはり七久保説のように鰹の句。

143　**ちんぼこの出たを高位に交せて置キ**

佐藤＝越前侯の槍印か。あるいはめくり札の青一（あざ）か。めくり札の青一の左隅に「ちん鉾」が描かれているが、これを詠んだ句と考えていゆ。

八木＝「カルタ」となれば、佐藤氏の独断場であり、やはりめくり札か。

鈴木＝越前福井侯の槍印でしょう。

岡田＝この句、百人一首と思っていました。

川柳塔社常任理事会（七月一日）

▽山根八重・石尾かつ乃・太田幸枝・乾隆風　西川和子・黒田くに子の同人推薦を承認。

▽九月本社句会の開催日を六日に変更する。

▽昨年以降の新同人に川柳塔碑基金（一口千円）への参加を呼びかけることを決定。

▽太茂津副主幹から全日本川柳和歌山大会の準備・役割などについての私案を発表。

五濁抄

黒川紫香選

浜田市　中尾まゆみ

歩まねば刻の流れに追いつけぬ
絹糸のような強さよ愛一途
鮮やかに友ひとり切る紙ナイフ
好きな人の名前は涙では消せぬ
澄んだ瞳で花の悩みを聞いてあげ

熊本県　大川幸子

それぞれのドラマが過ぎる交叉点
控えめの歩幅へ愛が満ちている
いつまでも過去にこだわる姫鏡
遮断機の無い道をゆくカタツムリ
蚊遣り焚く用意してある山の宿

松山市　白石春嶺

討ち死にの屍に似たり熱帯夜
黒めがね取ればダンプのやさしい目
ときめきを押さえ王手の歩を握る
丑の日はみんなうなぎにするデスク
万国旗だけは仲良く手を繋ぐ

名古屋市　藤井高子

夕焼けをしずくに散らす雨上り
ふりむけば坂の角度はなおきつい
人許すことも覚えて海が凪ぐ
ご近所の絆で同じ陽を拝む
和やかに十把一とからげで座る

枚方市　山崎彩子

土手一ぱい帰化植物の穂がゆれる
言葉尻咎められた日梅雨に入る
口惜しさをハッシと画布に一タッチ
二度の職ねぎらう言葉を倍にする
故郷にも火の山あって落着けず

尼崎市　児玉歌子

見せしめに使う女の黙秘権
止まり木のコネぐらいならたんと持つ
バッタリと過去ある人と戎橋
すいすいと事が運んでいる内助
ゆっくりと投げる男の遊び球

佐賀県　寺中三枝子

以心伝心すぐ来てくれる友がいる
雑魚じゃない今は光っているイワシ
豊作のコメよ生真面目すぎないか
スカウトの耳打ち目立つネット裏
淋しい日お宮の鳩に豆をやろ

広島市　流奈美子

入院の友へジョークのありったけ
潮満ちて貝に安らぐ子守唄
梅雨晴れ間亡母を語らう煮ころがし
裏道でいくど拾った哲学書
ふと雲の誘いに乗った旅の空

富田林市　池森子

爽やかな朝の大きな目玉やき
梅雨の晴れ間に女と妻の裏を干す
太郎ばかりを頼りにしてる母の膝
わたくしの行方を探す冬の森
少年期の父に貧しい詩ばかり

鳥取県　大角幸代

やさしさが素通りをしてケンカする
幸せのリボン小指に結んどく
かたつむり花の雫で目を覚ます
反論ができないままのまわり道
爽やかなえくぼに心のネジゆるむ

香川県　川崎ひかり

ウタガエば味方も敵に見えてくる
義理と見栄一緒に包んだノシ袋
ポケットの中で辞表がユレてます
読まれても困らぬ程度の日記帖
倖せの隣にあった落し穴

香川県　池内かおり

点滴がなくなり笑顔柔らかに
婦人服売り場で夫目立ってる
行く先を決めたらミシンよく走り
大安にすんなり受ける慰斗袋
コロコロと逃げた豌豆追っかける

静岡市　沢田きん

日記帳小さな罪を伏せてある
優しさの裏に隠れる強い意志
一応は子の言い訳も聞いてみる
母さんの童話を聞いた子も育ち
目薬を差してひと時本を伏せ

松山市　宮尾みのり

語り継ぐものを無言の母が持つ
鬼一匹飼うているから耐えられる
脱ぎ捨てて捨てて一つの夢を追う
若者は戻らず緑深くなる
肩書がとれたらただのおじいちゃん

大阪市　亀井円女

卯の花へ尽きぬ名残りに身を委ね（住吉大社卯の花苑）
雨宿り犬と仲良くなりました
子育てでこの頃雀よく食べる
女はおかしつまらん事まで覚えてる
軽快なロックに手拍子足拍子

砂川市　大橋政良

一回り小さくなった母と住む
釘を打つ金槌一つない平和
嘱託の少し小さい弁当箱
にぎりめし一つの恩が返せない
犬かきの背に本当の父を見せ

藤井寺市　高田美代子

放浪記　目に触れるものみんな友
向日葵のくびはゆっくり暮れてゆく
アダムとイブが洋服を着て中之島
ぞんざいな口きいている照れ隠し
触れ合うて歩いただけの傘たたむ

尼崎市　森安夢之助

裏町の止り木が身にあっている
養子に行って肩書がころげ込む
決断が早い男の裏表
ぎりぎりの話コーヒー冷めて来る
甘い顔してはおれない遺産分け

尼崎市　尾宮弘治

門限にぎりぎり娘酔うている
金持って母が待ってる試着室
詳しくは傘を畳んでから話す
親不幸詫びて亡母に灯をともす
冷め切った心を洗う髪洗う

尼崎市　的場十四郎

窓の灯が静かにくれる妥協点
人情の流れの中に居て平和
さまざまな暮し干してる青い空
肩書はないが自由な朝がある
浄瑠璃の声音聞こえる近松碑

久留米市　鶴久百万両

サーフィンへ風の騎士から誘われる
砂時計よ止まれ恋しいひとに逢う
負けて勝ついくさはあんただけにする
惚けていかんいかんと紙の弥陀を折る
水茎のあとあざやかに師の個展

姫路市　松本一郎

百点の妻で少々もてあます
躓いて心の驕り知らされる
友達に囲まれ妻のお人好し
罪深き七十歳の写経かな
薪を売る古い家並のつづく町

期待して老後託せる嫁が来る
つばくろのさえずりに似る一年生
寛いだ顔で教訓たれる父
善人で催促下手な人の妻

尼崎市　野瀬昌子

むきだしの夏へビールと冷やっこ
生きているからこんなにも幸せだ
トーストが焦げる幸せな時間
出迎えの妻がとってもうれしそう

鳥取県　大角正道

ちらちらと木漏れ日やさし梅を挽ぐ
旅なれた妻のうしろについて行く
添寝してときどき脱線する童話
氷屋の旗暑そうに炎天下

摂津市　木下道子

三食をきっちり米寿口達者
傷心へなさけ無用のすきま風
嫁姑哀しい性の千里眼
もろもろを溜めて胃の腑に叱られる

富山市　大西桂子

束縛が嫌い息子も知っている
三界に家のないのは男です
じゃが芋の花活けてあるビルの隅
家計簿の赤鉛筆を買いに行く

富山県　高畠五月

父親は入れてもらえぬ旅プラン
母さんのビキニ姿に息をのむ
夏休み父の任地に押しかける
孫を前に語り部となる寂しい日

岐阜市　渡辺杏村

雨止まず一夜の絆の楽しさよ
庭植えの胡瓜届ける単赴先
行く人の踵確かめ昇る段
発泡スチロール商品皿の知恵あまた

熊本県　岩切康子

妥協して靴の重さが身に応え
夏雲を掴んで孫の泳ぎぶり
親切がいつも裏目の苦労性
ブランドで固めたギャルの切口上

酒田市　永澤裕子

時々は眼鏡も補聴器も外す
今ならばまだ翔べそうな赤い靴
マニュアルが欲しいと思う事ばかり
ご意見は無用最後の花咲かす

和歌山市　山口三千子

走り書き唯それだけで心足る
この部屋を花で飾ろう今日も雨
打算知り実年の恋いま終る
花の個性人の個性でいける花

島根県　槻谷一葉

兵庫県　森　脇　和　子

控え目がいいよと母の躾糸
目印のリボンが褪せて飢えている
薬草の効きめ伝えてボランティア
大ジョッキ愛の囁き聞き洩らす

東予市　小　山　悠　泉

出世欲捨てると肩が軽くなる
結果が出て絶好調と言う自信
万華鏡のぞくメルヘン見えそうで
パンツ脱いで寝ると疲れがいえそうで

堺　市　宮　本　かりん

喪服着た揚羽も舞うて一周忌
苦しみを断ち切っている爪の音
コンピューターに選び出されて夫婦です
善人の靴がななめにへってゆく

奈良市　米　田　芳　子

母の日に嫁からうれしい花の鉢
野面から虹立つを見る庫裡の窓
めはりずし楽しみにして墓参り
あと出しも覚えた孫のジャンケンポン

尼崎市　鈴　木　良　征

叱られてもやっぱり恋し母の膝
秋のりんごは浮かれて樹からよく落ちる
起伏幾年掃海艇が海渡る
分厚い胸で優しく清濁併せ呑む

鳥取県　今　本　早　苗

長い髪あっさり切って夏がくる
あこがれの人に打ち出の小槌振る
私を叱ってくれた父が逝く
若者が理想を語る村となる

西宮市　菊　池　トミエ

雨読にも飽きて音楽聴いている
晩学をためらうように眼鏡拭く
掛時計明治の振子まだ元気
サングラス女も変身したきとき

池田市　水　木　博　男

頭下げ妻の口添え待っている
かくれんぼみんなで鬼を探してる
一億中流旗は女が振っている
花の名を聞かずに男花を買う

米子市　小　塩　智加恵

老いの旅　孫の土産を買いに行く
造花まで豪華さ競う夏の寺
喜びが素直に口を出る夫婦
ジャンプして神の背中にふれてみる

和歌山市　森　茜

福耳を掻く赤ちゃんの手の丸み
それぞれに流されてきた川の幅
立ち話いつもの角で老婦人
いじわるをしているなんて気付かない

京都市　本荘福子

意地捨てて子と向い合う子の部屋で
入門書並べて趣味のないお方
女にも五人くらいの敵はいる
中流に近づいたらしペット飼う

熊本市　黒田緑

若い日のネクタイ忘れたまま下がり
右するも左へ向くも風のまま
踊らせる虚像で稼ぐ視聴率
色のない風が心を吹き抜ける

熊本県　高野宵草

量よりも質を食べたいフルムーン
心にもないこと言える年齢を積み
建前で座った椅子の窮屈さ
落日の早さを知った山の道

枚方市　中山おさむ

自尊心ほどほどにして冷酒酌む
煽て甲斐ある爺ちゃんに成りきろう
接待の名で生臭い街泳ぐ
合鍵の老妻も寄り道して帰る

寝屋川市　宮崎菜月

また朝だチクタク時計のおそろしや
狛犬よ夜は寄り添い寝たかろう
大阪のたこ焼き土産に帰る母
半年後橋に佇む恋もある

芦屋市　黒田能子

このままの平穏がふと恐くなる
つり橋の真ん中へんでゆれ始め
飛ぶようだ助走がとても長いから
我が足のまんまの靴が捨てられず

米子市　中井ゆき

路線バス待って不安な一人旅
初給料孫が送ってくれた春
朝毎につぼみの数をたしかめる
山椒の香りも孫は厭と言う

貝塚市　池田寿美子

ゆたかさにあきらめリッチで夕暮れる
おろかさが見返りばかり考える
替え玉の鬼が出番を待っている
風だけは変らぬままに御影堂（唐招提寺）

兵庫県　酒井靖子

笑うたら済む事だった花鋏
生きざまを小さな虫が見せ付ける
住みなれた路地に滲んでいる情け
にこにこのお面忘れてきた句会

東大阪市　安永暁子

娘あり手伝う事のありすぎて
大人でも優しい人について行き
早乙女の姿は見えぬ田植です
たのもしい魚の目玉食べる孫

尼崎市　長浜澄子

五指に足る楽しみだから湧く闘志
前向きに生きると決めて髪を切る
明日迄待てぬ噂が先走り
親離れ出来ぬ子猫に雨しきり

香川県　植田チカエ

賑やかな孫が寝たのでお茶を入れ
子供らの姿に家の顔がある
季節ごと花一輪にむかえられ
孫が来て丹下左膳のような傷

西宮市　岡本道子

結納の晴れ着未練な親心
つる草の上手にからむ裏手門
争わず納得もせず寝につく
よい思案頼んだ夫の高いびき

守口市　森川春子

退院するのに仏滅避けている
思い出をエッセイ風に書きとめる
飼主に似た犬　食べると横になる
回復期　病院食のおかず増え

枚方市　森本節子

お誘いも犬にかまけてしぶってる
付添いの親かたくなる稚児行列（当麻お練）
曇り日は血圧微妙に上下する
花菖蒲色とけあって水の面

尼崎市　山田保蔵

ゴミ見れば豊かさわかる勝手口
お留守番　電話のベルにうろたえる
駅前ですごい易者におどかされ
おもちゃ場で万札持つ子しあんする

尼崎市　木下義嗣

すし詰めで帰る古里母がいる
里の母甘い小言をおいて行き
花束を貰った男に誘われる
毎朝にネクタイ替える若社長

尼崎市　中澤向西

おぼろ月詳しい話してあげる
そう言えば肩書ついてとばされる
青空に緋鯉真鯉がうれしそう
好きな人来るとこまめに動き出す

尼崎市　那賀島雅子

しっかりと蓋した噂洩れている
だれも皆ふりむく銭の落ちた音
辛抱を固めたような太い指
ベランダの眺め家賃に入れてある

今治市　和田宏

母さんの肩はいっつも凝っている
胸つき八丁足はとっくに棒みたい
スカウトが島を訪ねる青田買い
雨の日をえらんだわけでない予約

新潟県　高野不二

肩書きのどれも本気でない勤め
消印有効へやっと間に合せ
寝て考えた時は名案だった筈
値札見て見るからいい絵だと思う

出雲市　森山健歩

口下手な聴診器さん信じます
百叩きぐらいじゃとても目が覚めぬ
ひまわりも儲け話の方を向く
どの社にも跳ねっかえりがいるらしい

尼崎市　吉永伊三郎

てんこ盛りのアイスクリンに逢う夜店
鏡拭く美人の顔になるつもり
神様は祭りが好きで夏終る
売られ行く仔牛をつなぐ朝の市

和歌山市　堀畑靖子

草花の手入れで暮れた日曜日
後輩の価値認めよう風みどり
沈んだら浮かぬ気がするから泳ぐ
同じもの飲んでしましょう仲直り

静岡市　永倉柳華

潮干狩股から見せ合う貝拾い
昼寝するこれも小さな幸のうち
見栄っ張り寂しい女かもしれず
いい返事するたび揺れるイヤリング

大阪市　今西静子

宝川みどりに染まる露天風呂
吊り橋を揺すって笑うのも若さ
利根川の源流しかとまなうらに
何もかもあなたまかせの旅に酔う

鳥取県　黒田くに子

一寸ひと息忙中閑の深呼吸
おとぼけがとても愉快なおじいちゃん
見栄張ったローンで嫁の荷がとどく
口笛と帽子はずんで町へ出る

和歌山市　玉置当代

景観もよいが団子がまた旨い
親切を素直にとれぬ色眼鏡
妻らしく今日は鰯の団子汁
仏前へ留守を頼んで旅に出る

広島市　森田文

新緑のダムの底から田植うた
指太が茶室に座して落ち付かぬ
働き蜂藤の見頃へ気が付かぬ
来る度に本日限りの無駄を買う

高槻市　芦田静江

フルサトに眠りたい日の兵馬俑
父の部屋静かワンルームの憩い
扉きしんで妻出てこない朝帰り
リンネとや庭を飾った鳥の墓

尼崎市　湊　修水

近松の墓にやさしい初夏の風
葉桜にすごい毛虫のボスがいた
父の日にネクタイいらぬと先手うち

尼崎市　佐野六浦

豆腐屋が濡れた手で返す裸銭
貼ったテープが音も一緒にはがされる
完璧な言葉に妥協などはない

兵庫県　東浦砥代

のんのんと育てて欠けていたモラル
灯を消して疲れた仮面そっと脱ぐ
絡ませた指を信じてしまう酔い

熊本市　北川一進

耳だけは達者返事がちゃんと来る
ときどきは謎かけてくる差向い
告白は苦手他人の口を借り

熊本市　遠山夏生

栄転の挨拶状は直ぐに来る
内面の支えに妻がいる強味
花束の先手が勝つと限らない

鳥取県　乾　隆風

曲り角から正論の鈴鳴らす
残り火を燃やす螢の命だな
竹竿が届かぬ欲の深さかも

出雲市　原　章峰

棘のある言葉ゆっくり咀嚼する
昨年より低い所に葱吊す
安定飛行お臍が痒くなってきた

出雲市　岸　桂子

露天風呂　月も仲間にゆれている
わたくしの記憶にはない竹の花
旅の恥しらない街に捨てて来る

松江市　松浦登志子

コロコロと笑う母あり頼もしい
絵手紙が女の生き方うつしてる
釣り好きの夫　魚を口にせず

尼崎市　田中　薫

安眠へ古い枕が手離せぬ
黒幕の意外小さな靴をはき
肉親の縁薄そうな描き眉毛

尼崎市　明壁敏之

好い汗をかいて樹陰の万歩計
無駄遣いするなと追伸書いてある
地下街で方向オンチ試される

和歌山市　田中みね

気分は少女趣味の仲間と旅日記
天国にゆけば馴染がたんと居る
妥協などとても苦手な石頭

葉桜の下を好んだレース糸
約束をした買物に印がいり
紙コップ北に大志の長い旅

鳥取県　山根八重

うれしい日　影もいっしょにはずんでる
同姓同名よその葉書が舞い込んだ
さむらいが揃いかぶとの緒を締める

鳥取県　西川和子

温もりが欲しくて軽い旅に出る
ジーンズを仲良く濡らす赤い傘
御縁日鳩もお祭り気分です

京都市　小林英子

この辺りから酒の肴は妻の愚痴
指切りの好きな女の不しあわせ
テレビ二台で老夫婦障りなし

大阪市　尾崎黄紅

蕗を煮る初夏の香りにむせながら
苗植えててるてる坊主外しとく
淋しさをふっとばそうと歌唄う

鳥取県　伊吹富恵

植木鉢まだ生きいきと母達者
私の胸に亡夫が螢になって住む
酸性雨が怖いみどりの地球です

佐賀市　江口万亀子

仲間からはずれ二人は恋になる
秀才であったばかりに村を出る
色だけのお茶で会議がまだ続き

広島市　名和喜一郎

我が庭の気取りやさんはアマリリス
ふる里の小川に石を投げに行く
も一度振り向いて欲し息子の背

寝屋川市　井上すみれ

赤んべえされても楽し曽孫といて
きみと来た砂丘は谺返さない
かきあげる家事に追われた乱れ髪

藤井寺市　田中孝子

つっぱりの度合い健康バロメーター
雑草にはげまされてる弱い花
嫁も婆も気楽ごくらくよい別居

八尾市　向井しづ子

終業ベル母なる面とつけかえる
はたせない約束もある議員です
くもっても雨があがれば虹も出る

鳥取県　美浦美代子

直球で叱ってくれる人間味
五つ玉の手垢に亡父が生きている
広かったあの頃父の肩車

藤井寺市　楠昭子

尼崎市　前田いわお

先祖の地ビルの谷間に囲まれる
菊さし芽咲く花浮かべ水をやる
昔知る人に見せたい尼崎

松山市　丹下美津子

ご祐筆の家系守って城下町
口止めをすると秘密が走り出す
家裁でけじめつけても男ついて来る

鳥取市　西村黙光

働くと汗へ光が増してくる
幸せがはちきれそうな波の音
山びこも愛想段々悪くなり

鳥取県　石尾かつ乃

子供だけの旅を許した日の不安
巣立つ子を見送る影が二つある
時を打つ時計のんびり山の宿

今治市　越智青園

花言葉頭に見舞の花をよる
断片の記憶つないで過去を追う
目玉焼片目で今日の菜足りる

今治市　渡辺南奉

年金で少し大事にしてくれる
他愛ない夢が宝石箱にある
明日村を出ます色々ありました

鳴門市　八木芳水

言い切った人を男らしく見てる
賛成という声につい騙される
八十の色気食い気に先越され

出雲市　富田蘭水

あの人に逢えないままに梅雨が来る
梅雨空に明るい話の大安日
運転のあなた信じて乗ってます

十和田市　阿部喜久江

はるばると出掛けて行った掃海艇
フルムーン孫の土産を先に買い
さりげない顔で策士が寄ってくる

西宮市　平田香子

腰すえて余生を風のままに生く
決めてから迷い出した娘の心
合鍵を落したらしいうすい縁

桜井市　小林はつ子

昨日より今日は弾んでネギを切る
グルメ旅優越感のある財布
丸腰になった男の妥協癖

兵庫県　倉垣恵美

嫁ぐ娘よわたしの延長線を引く
羽ばかりつくろうて翔べぬまま
散らかした部屋でゆっくり脱いでます

日本人同士はわかる英会話　旭川市　朝倉大柏

上狙う男に風が吹き止まず

手ざわりの生地に女の夢がある　芦屋市　根来敬

ピノキオと奇遇の夢は大切に

お祭りはしたし出費は気になるし

猫舌に合わせたようなお茶が出る　熊本県　増田一乗

港にも似て広びろと母の愛

長生きの自信崩れた立暗み

旅楽し法話もあった老人会　豊中市　田中道胤

参道の馴染の茶屋のうまい餅

道連れは少し呑気な方が良い

庖丁を研ぐ気にさせた妻の留守　岡山県　大石あすなろ

父と歩が揃うて今日を満ち足りる

ジャンケンで負けて粗末なラッパ吹く

退屈で噂ばなしを持ち歩く　寝屋川市　坂上高栄

なりゆきに目が離せない大勝負

目がほしい棚のだるまの一人言

平和だなー父のいびきが二階から

ロープウエー仰げばリュックが重くなる　神戸市　岩田信義

スクールバス文字が大きい幼稚園

自分史を発掘しているおもちゃ箱　大阪市　濱田良知

日曜を知らない犬に起こされる

地価高騰　城を見下ろすビルが建ち

兵たりし頃の水虫未だ癒えず　兵庫県　円増純子

嫁がせて暫し空虚のなかに住む

寄せ鍋の味溶け合った嫁となり

飾り気のない人柄に従いて来た　京都市　山海友熙

遮断機の向うへ風船とんでゆく

アメリカへゆく子が土産聞きに来る

仕舞い風呂犬も洗った夏休み　鳥取県　野口重富

歯に衣を着せて浮世は平和です

避暑地より暑中見舞の憎らしく

耳許へ小声でお寝しょ告げにくる　和歌山市　山田博章

空瓶が割れて凶器になる嫉妬

耐久レース男のいのち枯れるまで

下手な子もうまい子もいる草野球

通じ合う女とも束の間屋形船　姫路市　福本好花

分校も林間学校に衣替え
伯父が来て何とか話のかたもつけ　吹田市　西岡豊

ほろ酔いに愛のポーズを考える
べんちゃらの愛とも知らずのぼせてる
スイスイと町の奉仕にミニバイク　河内長野市　大西文次

特上のにぎりパトロン付いている
よい意見だと司会者にほめられる
将来に期待をかける荒削り　香川県　永峰伽名子

手術後の雑用見過し大事とる
雲仙もマニラも地球の怒りにふれ
嬉し涙　悲しなみだを押えた手　兵庫県　北川とみ子

聞く耳はもたぬ妥協の爪を研ぐ
星ひとつ流れて亡母の樹をゆする
特別の笑顔で巣立つ過疎の駅　静岡市　増田扶美

病名にふれずに帰る雨の中
糠漬けの濃い紫に食すすむ
鮎解禁墨痕淋漓山の駅　相生市　中塚礎石

長話せっせと洗濯機は動き
風下で聞いた話は大きすぎ
あくびする青空に浮く白い月　兵庫県　西井つや子

口下手が抱いた感謝の温かさ
雑草と闘う私の夏が来た
美しい母は美しい絵を残す　大阪市　清水絹子

泉州の文化を守り茶粥炊く
母さんの寝顔が好きなそば枕
バラ園の案内役は鳩の群れ　大阪市　川原章久

カラフルな日傘長閑な渡し舟
何食わぬ顔で帰った女傘
花街のゴミまで減らす不況風　泉佐野市　真崎浪速子

妻に負う扶養家族でいる健保
老妻と話すことなし星が降る
忙しい妻が蒲団を上げさせる　佐賀市　古川一徳

日本ほどいい国はない世界地図
泣きボクロ母はむかしを語らない
すぐ金に換算をする粗大ごみ

子供みたいにさせて長生きさせる妻　摂津市　もちづき　遊美

折角の人生活用生きたミネ
オバタリアン猫も杓子もクビ飾り　島根県　菅田　かつ子

朝顔のうれし涙か玉の露
ステテコが一息いれる冷やっこ
五十過ぎ素的な言葉出なくなり　島根県　松本　聖子

押しつけの親切素通りしてしまい
古里が呼んどる母が手を振って
階段の上り降りにも歳が出る　唐津市　福島　紀一

うらやまし青豌豆のはじける実
バス停まで四季の移りを楽しんで
恋人のようにナースは説き聞かせ　岡山市　中嶋　千恵子

ため息をつめて風船飛ばしたい
老い先は短し今日も観劇へ
家という重い荷物に明け暮れて　大阪市　武田　昌三

止まり木に名刺渡したのが不覚
なぜ医者に見せなかったと医者叱る
窓際に椅子取りゲームの負けいくさ　岡山県　伏見　すみれ

温かい余韻受話器にまだ残り
男の化粧品並べ男は弱くなり
肥満体支える足が痛み出し　岡山県　福原　辰江

染めかえのきかぬ頑固がひとりいて
円周の支えで守る桶の底
沈丁花やさしく私を佇ませ　岡山県　牧野　秀香

会釈して下さる人の名を忘れ
雲仙岳火砕流とは恐ろしき
寝たきりを見舞う言葉を模索して　岡山県　富坂　志重

気晴しに呑んでやろうか盗み酒
雨上り甘いデートの傘をほす
ほほ笑みがもれる母さんの葉書　東大阪市　松山　隆

考えてどうにもならぬ飲んで寝る
共白髪　鏡も時に嘘をつき
神仏に賽銭あげる癖がつき　静岡市　小木　久子

そっくりな口真似祖父のにが笑い
照れながら花束受ける父の顔
他人ごと気にしてばかり暇な人

兵庫県　奥野テル

ネジ捲けば踊るおもちゃに似た私
式終えた安らぎがある更衣室
冬物をしまい切らずに衣替え

米子市　木村はるえ

カレンダー遊ぶ予定がピッチリと
自慢する何物も無い古い家
朝まだき子供の声の消えた街

島根県　福間博利

静けさもまたよし孫が去にました
真実を明かせともう一人の私
階段の昇り降りにも七十歳

堺市　桜井荘次

頭の中にこびりついてる般若経
ワンテンポずれた笑いが笑い呼ぶ
いたずらのとっても好きな鬼の面

岡山県　土居ひでの

そよ風のナイショへ慌てる花菖蒲
心根の一番きれいな知恵遅れ
待ち合せ十分前の花時計

鳥取県　小西五十鈴

宍道湖のしじみ懐かし朝の膳
古里は湖底にしずむ物思い
山を越え谷を越えると亡母の里

米子市　服部朗子

紅付けて蕾の群れが二つ咲く
お隣の屋根の谷間に梅雨が来た
満たされる三度の食事おいしくて

橿原市　西本保夫

大粒の涙で弱さカバーする
矢のような視線が反対席にある
ひとり言聞こえる風が吹いてくる

岡山県　後安ふさえ

この辺が潮時主婦の座をゆずり
次の世で逢えるでしょうか耕花さん
ふる里のイメージ消えた駅に立ち

静岡市　浅子まつゑ

機械なら耐用年数すぎている
針箱に思い出ばかり詰めてある
草抜けば右往左往の蟻の群

大阪市　乾哲静

年の差なんてやっぱりあった離婚劇
受け売りでまた揉めている嫁姑
平和でも世間の水は甘くない

桜井市　脇本とき

みんな留守折よく雀とたわむれる
この空地いっそカラオケバーにでも
会場に私一人が和服着て

（前月分）松江市　原　長三

生き甲斐が筆と紙とを捨てさせぬ
伝説の池に咲いてた花菖蒲

松江市　原　長三

想い出がよみがえりくる宿の月
年取ってお元気ですかが気にかかる

岡山県　福原悦子

ここだけの内緒に心弾ませる
矢印の無い道を行くその若さ

唐津市　山口ふさ子

日本の文化は古寺と花にあり
約束がずっしり肩にのしかかる

豊中市　みきわきみ

停年は無いが自適もして居れず
角帯をしめてすこうし粋がって

鳥取市　谷口侑里

約束の度に待つのは私です
草笛を吹いて少年孤独です

藤井寺市　菊地繁男

あいさつを交わして帰る犬散歩
母の愚痴ためた手紙今日も来た

鳥取県　鈴木公弘

平凡に生きる理想をもっている
デートしてから水虫が治らない

茨木市　藤井正雄

勇ましく出掛けた夜釣り獲物ゼロ
意地を張る老舗のれんにある重み

堺市　山本半銭

横座りい草の匂いを嬉しがり
愚痴っぽくなってる友も我も老い

岡山県　江口有一朗

自家用車足腰弱い子に育て
持ち味をどう引き出すか子の躾

千葉県　上鈴木春枝

答案へ隣のペンがよく動き
親と子で大器晩成まだ信じ

今治市　渡邊伊津志

ハナハトを知ってる顔を懐かしみ
ゆっくりと出来ぬ気性を寂しがり

香川県　田中スミエ

敷居ぎわ猫顔をみて引きかえす
何も彼も話してみたい茶を入れる

和歌山市　木村親踏

夕涼み友達のまま帰される
一匹の蠅をとうとう追いつめた

広島市　中村要

目配せが噂話の腰を折り
古傷に触れぬおきての夫婦仲

静岡市　青柳金吾

お裾分けだけで足りてる老夫婦
中流の暮し戦後を笑い合い

広島県　森川抜智

長電話　夏の登山の打ち合わせ
旅行する話はすぐに乗ってくる

宇部市　中村三良

限界を越えた所にある理想
縄電車終点みんな夕ごはん

鳥取市　大坪天涯

とりあえずビール楽しい夜が来た
どうしてもカネのしがらみから去れぬ

鳥取市　谷口百合子

自分史の理想が少し派手に出る
葉書では心つかめず電話する

島根県　今川三津江

俄雨ランドセルから先にぬれ
来客へ犬ことさらに吠えたてて

鳥取県　山本正光

慰めのこころ届けよ島原へ
年金も貯金もみんな仕切る妻

鳥取市　近藤秋星

空白を埋める枕を縫っている
梅雨哀し君の手紙も濡れて来る

羽曳野市　徳山みつこ

君がいて心ゆくまで海の青
頂上について元気が湧いてくる

姫路市　山崎治夢

懐かしい顔が減り行く敬老会
金婚も済み妻の座は空気のよう

唐津市　浜本治幸

又来ると言って三年経てしまい
病む父の手話母だけが知っている

姫路市　谷清柳

一度だけ男が泣いた終戦日
余生とはこんなものかな茶がぬるい

明石市　小川正雄

二次会をそっとぬけ出し屋台酒
立飲みをでればちらつくネオンの灯

静岡市　三浦つね

毎日があっと言う間に過ぎて老い
朝早く気兼ねしながらごみ燃やす

静岡市　大村正雄

火に油言い訳きけば燃えさかり
老兵は戦の話で若返り

和歌山県　三原三究

どこまでも核心に触れず長電話
アルバムに自分より若い亡父の顔

付き合いの慰め言葉ほしい時　池田市　岡本吉太郎

お茶漬けの味の暮しで金婚式　東大阪市　大平太一郎

いい父さんいい上司で休肝日

顔よりもその人柄に会って惚れ　泉佐野市　大工静子

姉妹来て吾が家春にして帰り

岩蹴って落ちる水あり枯葉のせ　岡山県　後安江山

春が逝く噂話も花と散る

咲いて散る花にもドラマありました　大阪市　山北三三三

風止んでから風鈴が売れ残る

倦怠期時時妻が他人めく　鳥取市　萩原美雪

初孫の世話家中の手が伸びる

幸せが続くとちょっと恐くなる　鳥取県　石谷美恵子

軽くしたサインが不眠症にする

たゆみなく流れる水はくさらない　鳥取県　浜田民子

溶岩が身投げするよう転げ落ち

すれちがう事にもなれた無人駅　羽曳野市　芦田絢子

うどん好きそば好き彼は気が長い

雑学もカルチャー仕込みでもの知りで　香川県　工藤吟笑

派手好み色の尺度を見失い

あの人も仏心か島巡り（四国霊場参拝）　香川県　田中ふみ

遠くなるおじゃみ毬つき数え唄

趣味作り強いライバル目標に　松江市　佐野木みえ

鷲羽山より眺める瀬戸の橋偉大（瀬戸大橋）

砂時計　江津の町も活性化　寝屋川市　太田とし子

強がりの女の枕濡れている

玄関の靴がだんだん大きゅうなる　富田林市　山原昭水

甲虫決闘なんか好きじゃない

螢にもきれいな水に住む権利　富田林市　浦田トシエ

茄子カボチャ夫々咲いた花の色

雨の日は仏のお茶も少な目に　宇部市　野田豊子

相談も出来ず亡母恋う花手桶

老い悲し腹時計まで狂いだす

鳥取県　中藤俊子

朝もやに港の漁船は起き出した
看護婦が目礼をして声もなし（甥の死亡）

鳥取県　橋谷静江

酔うほどに妻の機嫌をとる夫
口車乗ってしまって損をした

鳥取県　中西智恵子

宿題はしたかまだかとセミが鳴く
掘るたびに日本歴史がしゃべり出す

岡山県　森下正子

お粗末と受けた包みに大慌て
退屈をさせない雑草（くさ）が追いかける

岡山県　杉本伊久栄

欠伸だけ良く出る雨の日曜日
退院の夫の話に耳を貸す

出雲市　島重昭

ゆるされた試歩に小石が高すぎる
街の灯は夜霧に濡れて生きている

泉南市　坂根流水

紫陽花は女ごころを色に見せ
あんな奴こんな奴でも皆わが子

大阪市　家村高雄

小銭出し外人さんも消費税
せせらぎを枕に聞いて草の宿

池田市　木村一笛

主役に桃も西瓜も甘夏も
よく歩く坂道に咲く爪切り草

姫路市　福島姫女

手話夫婦何時も二人の世界に居
二つの用一つ忘れて二度になる

大阪市　森崎忠禄

鮒ずしを食べて近江の息を吐く
柿の葉寿司静御前がふとよぎる

和歌山県　上岡正直

オンチでも好きです歌はカラオケで
にくまれっ児でもよくやるよ自衛隊（雲仙岳噴火）

唐津市　野崎ハル

はて知らぬ力も無念千代の富士
おはようは花のほほえみそのままに

奈良市　井上大

金丸がまた脚本に朱を入れる
花束にまさかと思うテロの罠

島根県　岩田三和

完熟のキュウリの味よ文化村
農村も一人前に人不足

大阪市　平井露芳

ストレスは消えたが癒えぬ二日酔
万歩計たまには仕事のお供する

新聞は後にして読む川柳誌　東京都　山口新子

透明にガラス吹き込む迷える日　羽曳野市　山本たけし

出納簿何と書こうかデート代

手を出せば握ってくれるように見え　鳥取市　田賀八千代

転ぶたび女口紅色を増す

悪女には更年期などありません　神戸市　木村貴代子

母の手の針は見えぬに縫えてゆく

辛抱がすぎて入院したまんま　静岡市　柳沢たま

写真機の前では笑う癖がつき

占って付けた名前に春が来ず　静岡市　大石たき

言い訳のつもりがいつか愚痴となり

名も知らぬ美事に咲いた花を愛で　静岡市　片平静代

つばめの巣雀が住んで冬を越し

姑の勘狂わぬ味の匙加減　大阪市　小糸昭子

ゆっくりと子供に帰る観覧車

夕暮に猫も私も五月病

濡れて来た猫にも春が訪れる　兵庫県　中野とよ子

冗談で話せる友の幸を呼ぶ　唐津市　山下剛司

火砕流自然のこわさまざまざと

災害に本領発揮機動力　唐津市　入江喜久亭

フルムーン旅を約した夫は病み

縁結ぶ出雲の神にミスもあり　唐津市　野田旭恒

火砕流果敢に散ったカメラマン

父の日に贈るスーツをデパートで　広島県　岸田武

足袋はいて女に還る老妻よ

行楽日わが家のお茶で締めくくる　十和田市　小笠原敏夫

教室で田畑の違い教え得ず

ご祝辞が新郎よりも親を賞め　鳥取市　中居武士

集団美彼女探すに一苦労

格調の高いおどりに月も冴え　静岡市　中西雅

コーラスに腹の虫まで歌い出す

砂あそび輝いている幼児の眼

情熱がマグマ見たいに未だ燃えて　八戸市　島田昭治

孫に電話ハイ島田ですと直ぐ答え　池田市　林　すて

我が部屋が一番落ちつくお城です

書く事をためらう日もあり日記帳　大阪市　喜多佐津乃

宅配の中味野菜の勢揃い

手仕事を終えて新茶でリフレッシュ　熊本県　立道善太郎

まあすわれ二度と来られぬ姿婆世界

そっとして今日は亡夫の御命日　唐津市　山門幸夫

貢献はドルだけにして怖いから

子離れの素振りが見えて肩を揉む

第5回　堺市民芸術祭川柳大会

とき　**9月29日**（日）13時

ところ　堺市立栂文化会館
（泉北高速とが美木多駅）

お話　八木三日女先生

宿題（各題2句）

「海」重谷　蜂彩選
「星」奥山　晴生選
「弟」河内　天笑選
「肌」住田英比古選
「生家」墨　作二郎選
「波乱」西田柳宏子選
「出合い」梶川雄次郎選

参加費　1000円

主催　堺市文化団体連絡協議会
堺川柳協会

第15回　茗人忌川柳大会

とき　**8月25日**（日）午前10時開場　11時半締切

ところ　ホテル・ニューいなば
（鳥取市永楽温泉町403）

◎おはなし　川柳塔社主幹　西尾　栞氏

兼題（各題2句）席題なし

「幕」田中正坊選
「噛む」春城武庫坊選
「遠慮」久家代仕男選
「竿」小林妻子選
「髪」小西雄々選
「掘る」但見石花菜選
「いねむり」小林由多香選

会費　3500円（作品集・懇親会を含む）

投句　投句料1000円を同封、**8月15日**までに着くようううみなり川柳会へ。

うみなり川柳会

〒680　鳥取市相生町3丁目204（森田熊生方）
電話　0857－23－4672

—水煙抄

秀句鑑賞

—七月号から

石川 侃流洞

方言がもつれ話を解きほぐす

高畠 五月

最近、地方でも多くの団地が造成され、各地からいろいろの人達が移住して来て、コンセンサスに欠ける街が形成されている。しかし同郷同士の連帯感は強く、少々のいざこざでも、方言の温みにほぐれて行く。

花いじり時は止ったままでいる

槻谷 一葉

忙中のひととき、花壇の手入れをしている。植え替えたり、雑草を抜いたり、すっかり夢中になって、時間の経つのを忘れてしまった。「時は止ったまま」に敬服。

ペンネーム老いの血潮もまだ若い

藤井 高子

私のとこの川柳会に満百歳のご老人がいて考え方でも若い者顔負けの句を作っている。ペンネームがそうさせるのであろうか。若い血を滾らせることが、長寿を保つ秘訣なのだろうか。

遠まわりするときめきの刻がある

寺中 三枝子

少しでも長く二人でいたい。そんなときめきは、年を取っても変りないのです。

ふくれてる財布は一円玉の所為

大川 幸子

消費税には大分慣れて来たが、一円玉を数えて買物をするのは、どうも繁雑である。そこで一円玉のお釣りを貰う習慣がついてしまって財布はふくれるばかり。財布はふくれたって裕福じゃないのよ、錯覚しないで、と主婦の嘆きが聞えてくる。

盲導犬の温い瞳に神を見た

亀井 円女

盲導犬という先入感かも知れないが、とても温い瞳をして、主人を見守っている。確かに神様が主人に与えた瞳のようだ。

いい部下を掌握してるめくら判

白石 春嶺

部長へ決裁の判コを貰いに行った。「うまく行きそうかね。ウンそうか。頼むよ」と簡単に押してくれたり、判は机の上にある、押しといてくれという時もある。自分の仕事には絶対責任を持つという部下を見抜いた、思い遣りの、めくら判だとも思う。

自販機の冷たい音に慣れてきた

鈴木 公弘

自販機が導入されて、その冷たさに、声の出るものが現われたが、何故か不評のようである。お金を入れてボタンを押す、ガチャンと出る、それが現代人にマッチしたようであるが、自販機に慣れさせられたといった方が本音かも知れない。

タンポポが踏まれる場所に咲いている

山田 保蔵

帰化タンポポが在来種を駆逐して、平地に咲くのは、ほとんど西洋タンポポである。その繁殖力はすばらしく、少々踏まれたって根を張り、平気で花を咲かせている。作者の驚きが目に見えるようだ。

先生は綽名の方で覚えてる

田中 薫

卒業後、久方振りに同窓会に出た。話題はやはり、学生時代の思い出ばかり。「○○先生昔とちっとも変らんよ」と言われても、本名だけでは話がつながらない。「それ、ポンやんのことだよ」と綽名で言われると、すぐに思い出した。「迷惑かけたなあ」とありし日が目の前に浮かんで来た。

暇になると電話して来る友がある

井崎 ミサ子

この忙しいのに、つまらん電話は迷惑だと思うのだが、やはり嬉しい。

台風をつれて娘が里帰り

浜田 民子

老夫婦の静かな生活を乱す孫がやって来た。でも目に入れても痛くない。帰ると淋しい。

句評リレー

四・五・六月号から

小西雄々　神夏磯典子　青枝鉄治　八木千代

仮の世の仮の命の数え唄

矢内　寿恵子

雄々　現実に生き抜くために、毎日の反省と、いろいろな自戒を下五「数え唄」としたところに、この句の良さがあると思います。ただ、「の」の字が四回も繰り返されているのが少々気になります。

典子　雄々さんの下五の解釈に同感です。「仮の世の仮の命」と詠われた作者の謙虚さにうたれました。四回目の「の」が気になりますが、下五に対してはこの表現がふさわしいのではないでしょうか。

鉄治　下五にこの句のポイントがあると思います。「の」の字四つは、やはり気になります。仮の世に生かされ…または仮の世にあってという意味合いで、二つ目を「に」としてはいかがでしょうか。

千代　雄々さんの間いに答えようと、四回の「の」の字に向き合ってみましたけれど、それより「仮の」「仮の」とある説明の強調が気になります。悠久の自然の営みと比べればという万感の想いが走り過ぎたのでしょう。

雄々　さて、いろいろな句評が出ましたが、この句を反芻しているうちに、「の」の字のことを先送りにすると、私自身これと同じような生活を繰り返しているのに気付きます。

典子　表現方法に少しひっかかりがあったにしても、作られた句でなく、作者自身感じとられたものであれば心を打ちます。その点で、佳句だと思います。

鉄治　同感。作られた句ではなく、作者の実感句として伝わってくるところに、この句の魅力を感じます。

千代　仮のいのちにしても、それだからこそ、一日ずつ重ねる営みの重さをずっしりと感じさせる「数え唄」という措辞の選び方が適切だから。寿恵子さんのひたむきな調べに少々の拘りも押し流されてしまいます。

愛情を小出しにくれる樹の温み

田辺　炙六

雄々　どさっと一回限りの愛情をもらってそれっきり振り向いてくれないよりも、何時もそっと見守ってくれて、絶えることのない愛情をそそいでもらう方が有り難い。「樹の温み」は、父や母の温みと解すると、一層その感が強い。明るい句で共鳴するものがある。

典子　川柳らしいやさしさのある句です。とかく現代は愛情を小出しにしなくなった夫婦が多いので、「樹の温み」を、夫、妻と解してもよいと思うのですが…。

鉄治　ほのぼのとしたものを感じさせる句です。けばけばしさを好まない自然界の樹木はもちろんのこと、父母、夫妻など、広く人間社会の温みに置き換えて理解してもよろしいかと思います。

千代　樹の解釈は三人の方と同意見です。

芯の太い温みを樹と書いた座五には共感しますが、「愛情を…」は今までに書かれ過ぎているかと。辛口になって申し訳ないです。

雄々　人間味が十七文字の中に十分でているし、こうした事実を何回となく見せつけられ、ほのぼのとしたものを感じたことがあるので、心に残る句といえましょう。

典子　「愛情を…」が今までに書かれ過ぎていると言われる千代さんの意見にハッとしました。読みの浅い私を反省しています。

鉄治　すんなりと受け止められる句と理解していましたが、千代さんの「愛情を…」のご指摘、そこまで求められるものかと、ちょっと考えさせられました、

千代　無理なくまとまっている優しい句に違いありませんが、炙六さんの力量ならば、もっと圧縮した骨太の樹の句ができるはずと作者を知っているだけに。敢えて言わせてください。

私の名を軽くしたのは藁の馬

岩本　雀踊子

雄々　常に自分自身を前面に出さず、控え目な雀踊子さんらしい句だと思います。相手側に花を持たせた描写が「藁の馬」で生きている。軽味の句としての持味もある。

典子　鑑賞眼の浅い私にはすぐに軽味の句と受けとれませんので、皆様のご意見をかみしめて理解したいと思います。

鉄治　残念ながら今の私には、この句を理解する力はありません。従って、雄々さんのおっしゃる軽味の句かどうかも分かりません。

千代　「藁の馬」にすぎなかったと、自身をその中に置かれた謙虚さが好きでひきこまれます。「私の名を軽くした…」という心の深部の隙を、わが手で抉り出されたつらさにも打たれてしまうのです。

雄々　ある時は飄々と、ある時は伝統的な作句をされる雀踊子さんですが、この句は、前の方に属する句だと考えます。「藁の馬」という下五で、派手ではないが淡々とした味が出た句だと解釈しますが…。

典子　「藁の馬」を自身に置かれたと言われる千代さんの評で分かってきました。この作者でこの謙虚さ、とても勉強になりました。

鉄治　「川柳に素養のない人にその句意を理解してもらい、しかも共感の得られる句作り」をモットーにしている今の私には、難解句でしたが、千代さん・雄々さんの解説で理解を得ました。唯、この句の良さを知るためには、まだ少々時間がかかります。

千代　雄々さんの評とほぼ同じです。私自身、ある日はあわれな藁の馬、ある時は走ろうとして動けぬ滑稽な藁の馬。けれど、どこまでも馬であろうとしているところなど、雀踊子さんと共に泣き笑いしてしまうのです。

冬の無風　森は力を蓄える

池　森　子

雄々　山陰の冬は、無風の日は殆どなく、日本海から吹く北風に煽られる。そのため、秋の終りには冬を迎える準備に大童で、いわゆる冬仕度が大事な行事の一つである。

この句は、それを代弁するように、冬の静かな日に、空っ風や大荒れの風雪に対して、負けないように準備し対処するという、努力と戒めの情景がうかがえる。

典子　人生にも四季があり、苦労のどん底に落ちた時でも人々の情けや励ましもある。勇気づけられた力を蓄えて春を迎えたいと思う。「冬の無風」が少し気になりますが、好きな句です。

鉄治　暖国育ちの私には、自然の厳しさをさほど実感としては受け止められませんが、人生航路に置き換えると、容易に理解できます。治に居て乱を忘れぬ平素の心がけが、や

がて芽を吹く春を迎えることになる。
上の語に少しぎくしゃくとしたものを感じます。

千代　「無風」という凄みが冒頭に利いていて、一字あけの叙法にもその意が強められています。雄々さんの読み取られた情景を感じたのは同じですが、森子さんの力でなら、その「森は…」以降の表現にも少し苦労してほしいと、苦言を述べさせてください。

雄々　上の語の「冬の無風」は、これで良いと思います。表現を変えて推敲してみましたが、結局、これに落ち着きました。自然界がそうであるように、人も生活の知恵を広く日常生活で活用しながら、生きていく姿が浮かびます。

典子　上五が気になっていましたが、皆様のご意見で納得できました。

鉄治　上の語について、あれこれ私なりに適当な表現を試みましたが、駄目でした。中・下の語はこれで良いと思っていましたが、千代さんのご指摘は私へのものと受け止め、勉強させていただきます。

千代　「冬の無風」は、森子さんの発見。そのあとは森子さんの意志でしょう。少し理が勝っていますが、歯切れのいい句だと思います。

丸を描く技術ばかりがうまくなる

西浦小鹿

雄々　人生に角を立てていては、潤いがなくなり、仲よく社会生活を営むことはできない。人格を円満にし、温かい気持で日常生活を送るよう心掛けて、ようやく到着したという姿が、句の中に見える。真面目に取り組む小鹿さんの姿勢が嬉しい。

典子　同感です。真面目すぎて悲哀すら感じられます。時にはわがままも言わないと息がつまります。「技術ばかりが」の表現がすばらしい。

鉄治　私も同感です。だから「三猿を守って此の世丸く住み」となるのでしょうが、典子さんのおっしゃるとおり、鬱憤を晴らす機会も時には必要だと思います。だから私は、川柳に託するという手も使っています。下の語を「うまくなり」と、余韻を持たせた方が良いように思います。

千代　男性と女性では受取り方も違うほうがあたりまえでしょうから。私は典子さんの説に傾きます。つまり句の裏の負の調べが気になるのです。「技術ばかりが」にこめられた慟哭を聞き流せないのです。それでも丸を描く稽古をしつづけましょうね。小鹿さん。

雄々　やっと人間の角がとれたという心境で、これから社会の歪みや隠れていた汚れが目につき、これらに対する処世術を習得することも必要となるでしょう。

典子　私はまだまだ上手に丸が描けませんが、川柳を続けることによって沢山の人を知り、人生を知って技術を磨きたいと思います。

鉄治　私の場合、人生を丸く描く技術ばかりを追求してゆくと、卑屈になりはしないかという懸念を持ちます。今の心境はどうしてもズバリ・チクリの批判精神が先行します。

千代　皆さんがそれぞれに自分の事と受けとめての情熱をこめた句評。小鹿さんと共に車座で語り合うような空気を感じます。それだけの力が句にあるということです。

ひいふうみい　おぼえて欲をかぞえ出す

永田俊子

雄々　満たされたいという願いや、ほしがる心が無くなったら、人生も黄昏時になってしまう。その点を突いて、この句はまとまっているが、もう一歩踏みこんだ描写があればさらに良くなると思います。

典子　上五の童謡的な表現に「欲をかぞえ

出す」ときつい表現を持ってこられた手法が素晴らしい。その欲の一つが宇宙旅行だったりしたら楽しくなります。

鉄治　上の語に新鮮味を感じさせられます。成長期にある子どもの、日常生活を捉えたほほえましい風景。これが昂じてくるとハナに付いてきますがね。親の背を見て育つ子のため、親自身の言動に注意したいものです。

千代　「欲をかぞえ出す」のは作者自身の嘆きでしょうし、私も含めての人間の業で、物事を知るにつれ芽生えてくる欲。その欲を上手にたのしめばいいものを。汚れてきた部分ばかり哀しがるのも、持って生まれた業なのかと。この句、当分、曳きずりそうです。

雄々　欲の一つが宇宙旅行とは、典子さんらしい着眼点だと思います。また欲望を「人間の業」という千代さんの考えでこの句を鑑賞すると、味が出てくるのを覚えます。

典子　自分の甘さが恥ずかしくなります。雄々さんのおっしゃるとおり、「欲望を人間の業」とされた千代さんの考え方で深い句になりました。

鉄治　欲望を「人間の業」とおっしゃる千代さんの考え方で、改めて鑑賞すると、別の味わい方がありますね。作者自身どのような考え方で詠まれたものか、関心があります。

千代　ひいふうみい…と私も声を出して唱えています。幼いころからの記憶を手繰り、しだいに運命にまで想いが至ります。

俊子さんの考えと同じなのか、違うのか。とにかく余情の中にいます。

ある主張メダカの群れに裁かれる

鶴　久　百万両

雄々　一つの意見を強く言い張っても、賛成もあれば反対もある。メダカのようにか弱いものでも、心を合わせれば困難な問題もたくみに処理する力を発揮することができるという、人生訓に似た気持で読みました。

「メダカの群れ」の言葉が、この句を支えていると考えます。

典子　人生には妥協も必要ということでしょうか。メダカに目をつけられて救われました。「裁かれる」がきついように思うのですが、自分を戒めていらっしゃるのでしょう。いい句だと思います。

鉄治　頂点に立つと、ともすれば肩書きで物事を処理する弊害に陥りやすい。よく下部の意見を聞き入れて方向づけをすることが肝要。三人寄れば文殊の知恵とやらで、キラリと光る素晴らしいヒントを与えられる。

千代　水面をみつめて佇ち尽している男の背姿が浮かびます。「ある主張」はきっと正しいことなのでしょう。正しすぎるから、つらすぎて受け容れられなかったのでしょう。無心ともみえる「メダカ」の泳ぎに裁かれて救われたと気付く人間らしさに、読むほうも救われて安堵します。

雄々　「裁かれる」の解釈で、いろいろな意味にとれますが、いつも私たちの周囲でこうした光景が目に入ることを思い出します。

典子　「メダカの群れ」を「下部の意見」と受け取られた鉄治さんのお言葉も妥当だと思います。雄々さん同様、「裁かれる」の解釈でこの句は生きてくる。

鉄治　四十数年にわたって宮仕えをした私は、この句を見て直感的に、組織の頂点に立つ者の運命もしくは、あるべき姿を示唆した句と受け止め、前掲の発言になった次第です。たとえ一人一人は、無力に近いメダカ的存在の下部であっても、その集団のエネルギーでもってトップが方向づけをさせられる……そんな経験を幾度かさせられました。

千代　複雑な心理を静かに見事に書き切られています。雄々さん、典子さん、鉄治さん、幅の広い真摯な句評を展開されました。それが私の臨場感となりました。有難いです。

銀河系

河内天笑選

橋本市　岸本木魚

盛り砂のように老妻すわり込む
片仮名の言葉あふれてじれったい
もう嘘も言えぬ男で出番なし

西宮市　門谷たず子

つかの間のアバンチュールよ夏帽子
てのひらの過去を大事に持ち歩く
笹舟の流れにまかす恋なかば

西宮市　西口いわゑ

バラ咲いた朝をいい日と決めている
ためらっていては渡れぬ天の川

青森市　工藤甲吉

わずかだが我にも固定資産税
ほんのりと酔うてあなたは酔芙蓉

米子市　八木千代

人の手に渡した毬をまだ想う
野の隅にあつまる弱い影法師

桜井市　岩本雀踊子

禁酒禁煙生きるとはむつかしい
正義感あるから皆に邪魔がられ

岡山県　小林妻子

いいチャンスだったと駅までの傘が
歳伏せて女は得意がって見せ

鳥取市　小谷美っ千

昼の月　昨日の恋はどうなった
うれしゅうて体が先に弾みだす

大阪市　桝本蕗児

旅先でボタンがちぎれそうになる
週末を真っ白にして待っている

米子市　林荒介

月光を浴びて公園多弁なり
手のひらは何時も故郷を向いている

米子市　木村冨美子

満ち足りて鼻が天井ばかり向く
あたたかい言葉で敵をねむらせる

出雲市　森山健歩

てっぺんでみんな見えると限らない
嘘混ぜてあるから売れているのです

鳥取県　田賀八千代

悪女には更年期などありません
女一人生きて骨まで強くなる

高槻市　川島諷云児

残り火を燃やして妻を困らせる
迷いから覚めた頃には後がない

米子市　小西雄々

植木屋も屋根屋も降りてくる三時
エチケット気にして酔いが回らない

尼崎市　春城武庫坊

五月闇　時計止めたい頬と頬
胸に持つ切札少し黴が生え

名古屋市　藤井高子

ロボットのあとを駆けてる胃の痛み
節操を捨てたか自動ドア開く

和歌山市　後藤正子

潔く橋を渡って行く日傘
風がめくるページに駅の名がひとつ

鳥取県　土橋はるお

とって置きの話を虫が食っている
一週間に十日ぐらいは飲んでるな

兵庫県　遠山可住

クスクスと噂は初夏の風に乗り
ひとりしゃべって何を相談しに来たの

鳥取県　大角幸代

それなりの美学で明日の米洗う
人間として時々は泣くことに

羽曳野市　徳山みつこ

脱税の恨みはどこへどのように
手洗いで本音を耳にする上司

倉敷市　田辺炙六

気がついてみればおだての舟の中
奥能登も春はやさしい貌となり

西宮市　林　はつ絵

千枚田米の輸入を知っている

岸和田市　島　崎　冨志子

流行に疎いがわたし花粉症

出雲市　島　重　昭

生ぐさい話に動悸打っている

大阪市　藤　田　頂留子

一言のミスが攻守を変えました

砂川市　大　橋　政　良

だるま落しを考えている鞄持ち

姫路市　丁　坪　サワ子

少しドライになって若さに溶けたいな

鳥取県　江　原　とみお

恩を一つそろばん玉に乗せている

米子市　政　岡　日枝子

ふりむくな後ろで穴を掘る音が

和歌山市　松　崎　幸　子

想い出を高速バスで追う旅路

大阪市　板　東　倫　子

更年期と反抗期とのサバイバル

鳥取市　西　村　黙　光

夏の浜真っ赤な風が吹き荒れる

岸和田市　三　輪　通　彦

活字派とマンガ世代で噛み合わず

守口市　結　城　君　子

人間が好きだ泣いても笑っても

出雲市　板　垣　夢　酔

綺麗だとうちの亭主は言わぬなり

和歌山市　木　本　朱　夏

むらさきにわたしを染める花しょうぶ

豊中市　田　中　正　坊

若いねと言われベレーを買い替える

大阪市　大　福　留　吉

貸し借りもなく年金で古希迎え

熊本市　遠　山　夏　生

母縫った雑巾だろう持ちがよい

町田市　竹　内　紫　錆

挟殺されても外人のガム

羽曳野市　吉　川　寿　美

飽食の海で溺れている河童

堺　市　宮　本　かりん

インスタント並べて明日がある二人

和歌山市　堀　畑　靖　子

人間で罪の煙によくむせる

和泉市　中　川　楓

叱られても嬉しい人を師と決める

西宮市　奥　田　みつ子

女だから弱いよわいと言うておく

和歌山市　桜　井　千　秀

灯を消すと鬼がささやきかけてくる

米子市　金　山　夕　子

草の根に自分の驕り思い知る

鳥取県　新　家　完　司

それからはいつも喪服を持って行く

大阪市　神夏磯　典　子

沢庵をバリバリ噛んだ日を思う

米子市　沢　田　千　春

思い切り笑えるなんてありがたい

唐津市　久　保　正　敏

エステティック已惚れ鏡見て終る

大阪府　籾　山　隆

薬前と薬後に飯を食うてます

寝屋川市　江　口　度

アレレレレ父ちゃんの臍まっすぐだ

米子市　石　垣　花　子

怖い事はカードの裏に書いてある

富田林市　藤　岡　花　梢

朝の挨拶嫁がすこうし荒れている

伊丹市　樫　谷　寿　馬

も一人のぼくが居るかも銀河系

堺　市　板　尾　岳　人

嗚呼夫婦ダブルベッドで読む聖書

和歌山市　内　芝　登志代

逆らって出たのに四季の宅急便

兵庫県　酒　井　靖　子

お人好し無縁の水にまた浸る

兵庫県　中　野　とよ子

雑巾をかけ一日のレール敷く

有田市　松　井　かなめ

菩薩にも夜叉にもなれる女にて

大阪市　尾　崎　黄　紅

二で割った歳で生きてる朗らかさ

大阪市　亀　井　円　女

辛口の鏡が説教してくれる

寝屋川市　太田　とし子
耳だけがピクピク動き知らん顔

弘前市　村田　善保
想い出が妊ってゆく散歩道

岸和田市　古野　ひで
気の弱い人の本気は胸を打つ

吹田市　山本　希久子
ゆっくりと遮断機が降り恋終る

豊中市　田中　道胤
昔から後列左翼隅の席

今治市　矢野　佳雲
見えるとこしか信じないコンパクト

吹田市　栗谷　春子
野沢菜を買い忘れては一大事

唐津市　仁部　四郎
ライバルと四つに組んでる出勤簿

広島県　田村　新造
定年でいつか馴染んだ昼の酒

鳥取県　石谷　美恵子
不倫めくドラマは夫と見たくない

唐津市　浜本　治幸
過疎の村めっきり減った鯉幟

鳥取県　田村　きみ子
わたくしの部屋にないのは亡夫だけだ

唐津市　野崎　ハル
古典美の力士の髷よとこしえに

松山市　谷　真風
太鼓が鳴れば踊りたくなる翁童子

鳥取県　土橋　螢
亡夫の齢越すとは何と恥ずかしや

兵庫県　北川　とみ子
その中の雑魚一ぴきが翔びたがり

大阪市　北　勝美
時間調整の市バスに駆け込んだ

七尾市　松高　秀峰
趣味のない老いの気休め草を刈る

竹原市　信本　博子
わたし似の娘がいつも言い負かす

大阪市　今西　静子
呼び出しの電話を父が切っている

唐津市　山口　ふさ子
山菜がわたしを楽しくしてくれる

唐津市　福島　紀一
かぼちゃの花がこんなに美しかったとは

和歌山市　森　茜
GNPに埋められていく海のうた

鳥取市　武田　帆雀
三粒ほど辣韮があれば呑める口

和歌山市　青枝　鉄治
嘘言えぬ男に遠い回り椅子

鳥取県　西原　艶子
新しい恋は思い出捨ててから

和歌山市　山田　高夫
人の面被った鬼はいくさ好き

鳥取県　羽津川　公乃
梅雨晴れ間ウツも一緒に陽に当てる

和歌山市　牛尾　緑良
副作用読みながらでも飲む薬

倉吉市　奥谷　弘朗
計算をされた甘さにひっかかり

岡山県　矢内　寿恵子
惜しまれて惜しんで打った句読点

芦屋市　根来　敬
くじ運が悪いだけではないらしい

鳥取市　美田　旋風
泣き言を聞けば親しみ湧いてくる

和泉市　西岡　洛酔
夫婦独楽浮世の余白剝げたまま

和歌山市　田中　みね
天国へ下見に行って帰らない

弘前市　波多野　五楽庵
ヘルシーの味にさっぱり馴染めない

広島県　森川　抜智
待たすより待つのが好きな性分で

和歌山市　堀端　三男
硬骨漢意外と涙もろかった

岡山県　福原　辰江
想像のキャンバス虹にする余生

広島市　中村　要
闘病の乱れを恥じる退院日

出雲市　久谷　まこと
影法師お互い愚痴はこぼすまい

岡山県　千原　理瑛
ガムテープで心の傷をはりつくす

岡山県　松本元江
青空が好き雨も好き風も好き

藤井寺市　高田美代子
ベレー帽の歩幅大正モダニズム

鳥取県　上田俊路
留守番の電話に鬼の笑い声

倉敷市　小野克枝
濁り酒干して近くて遠い人

寝屋川市　堀江光子
昔知らぬ人に昔のもてたこと

高知市　北川竹萌
めがねほめられた少女がうれしそう

静岡市　永倉柳華
お洒落して朝の散歩にある秘密

出雲市　富田蘭水
肩書きでうまった名刺信じない

大阪府　深日白光子
老妻を連れうどん屋が性に合い

堺市　高橋千万子
赴任よし恋文に似た妻の筆

羽曳野市　芦田絢子
知能指数と別なところでクイズ解く

鳥取県　西川和子
母の声聞いていらいら治まった

海南市　三宅保州
飼犬は野犬になった夢を見る

尼崎市　春城年代
けたたましく今朝一番に来た番

寝屋川市　平松かすみ
五千万値引きをしても売れぬ家

姫路市　山崎治夢
仮初めの土地に根づいて枝を張り

大阪市　家村高雄
山の水パックにされて売れてます

和歌山市　山川克子
ローソンでカップラーメン買う外車

鳥取県　伊吹富恵
鯖味噌煮山椒の匂い初夏を食べ

今治市　渡邊伊津志
リゾートに狙われている海の彩

鳴門市　八木芳水
豊かさの時代に馴れた忘れ物

大阪市　岡田ふみ
大企業の稲荷信仰摩訶不思議

米子市　白根ふみ
リサイクル地球が癒える日を思う

千葉県　上鈴木春枝
掃除機の音でどかせる粗大ゴミ

今治市　越智一水
リゾートブーム白砂青松やせ細り

和歌山市　福本英子
細々貯めてごっそり下ろす交際費

藤井寺市　中島志洋
才女よりやはり丈夫な嫁がいい

鳥取県　林露杖
エンジンの音に呑まれた田植唄

高知県　赤川菊野
無理すなと今日も遺影にいたわられ

東大阪市　今岡貞人
古希の顔　鏡は上手言いません

和歌山市　山口三千子
屑籠にストレス溜めて梅雨ごもり

香川県　田中菜実子（小四）
テントウ虫水玉もようかわいいな

静岡市　渥美弧秀
視野一ぱい緑迎える万歩計

岸和田市　清野こう
身を護るとげのきびしさ花あざみ

岸和田市　芳地狸村
しゃがんでも顔が拝めぬ如来様

米子市　田中亜弥
おばあちゃんの笑顔に皆が救われる

宝塚市　丸山よし津
平穏を何より愛す窓明り

吹田市　西岡豊
やれやれと古希の峠で茶をすする

京都市　松川杜的
ジューンブライドくちなしの花真っ白い

茨木市　堀良江
リュック一つぶらり昔の道辿る

大阪市　塩田新一郎
滴りの音に目覚める山の宿

▼投句は、川柳塔用箋またはハガキに**3句**
毎月**15日**までに川柳塔社事務所へ

女性コーナー

黄香の花

小出智子選

里の湯に積年の垢浮いている　和歌山市　松崎　幸子
百円貨踏んで私のものとする　米子市　新　正子
父に似た人に足元気づかわれ　西宮市　門谷たず子
遠雷をかすかに聞いて老い深む　出雲市　石倉芙佐子
表紙絵の小さい窓がひらいている　和歌山市　後藤　正子
肩先に蝶が止まっているうつつ　西宮市　林　はつ絵
親馬鹿とわかってはいる夜の雨　大阪市　西出　楓楽
生き方を一年草に問うてみる　寝屋川市　太田　俊子
まな板の音がしている母がいる　岡山県　土居ひでの
菜の花のまん中にある老母の顔　西宮市　奥田みつ子
鏡見るとためらうことが多くなる　和歌山市　古久保和子
長靴を履いて遠慮のない歩幅　青森県　福士　トキ
脱衣場の籠に目がある口がある　姫路市　丁坪サワ子
姑に習いこの頃嫁に習う日々　岡山県　矢内寿恵子
光ってる内は大事にしてもらう　和歌山市　森　茜
雨の中来て下さったおもてなし　和泉市　中川　楓
言いにくい言葉大阪弁にする　松原市　佐藤　奏月
ドレスアップしてもわたしにちがいない　島根県　松本　文子
暖かい方へ傾く癖がつき　和歌山市　桜井　千秀
名目はどうあれ鎧見えている　和歌山市　木本　朱夏
緑陰の風しあわせをいただきぬ　羽曳野市　吉川　寿美
もう一度飛ばねばならぬ羽づくろい　堺　市　宮本かりん
プライドを少しくすぐる自動ドア　和歌山市　西山　幸
こころを繋ぐ杭をときどき見失う　堺　市　小西　小雪
紫陽花を活けて花瓶のたよりなし　堺　市　山本　半銭
目のはしに子が遊んでる畑仕事　和歌山市　堀畑　靖子
ジーパンを穿く雑用がたんとあり　米子市　石垣　花子
仏様とのつながりだけの本家さん　堺　市　高橋千万子
たまたまの一喝父権よみがえる　和歌山市　山口三千子
分身のように眼鏡を持ち歩き　和歌山市　松井かなめ
歯の浮くようなお世辞用心なさいませ　米子市　服部　朗子
負けました老母が横文字聞くのです　米子市　林　瑞枝
海は女で陽気に船を遊ばせる　和歌山市　田中　みね
火中の栗拾ってからの風当たり　羽曳野市　徳山みつこ
どこまでも雲ついてくる旅の窓　熊本県　岩切　康子
兄弟にときどき逢ってつなぐ縁　松江市　安食　友子
祖母の座を白蟻なんか住ませない　兵庫県　浦辺　静江
気立てよく富士額まで祖母ゆずり　柏　市　西井つや子
愛された記憶も遠い鏡掛け　大阪市　上鈴木春枝
商人の父が定年決めた春　米子市　渡部さと美
百合ぱっと切って下さるその気性　米子市　寺沢みど里
仲直りしよう金魚も群れている　大阪市　政岡日枝子
蒼天に父の麦藁帽子浮く　稲本　凡子
晩年は温い言葉が好きになる

人形の国へしばらく逃避行　寝屋川市　豊福　路子
本のあいだで古いあなたに逢いました　和歌山市　福井　桂香
肩の力抜いてやさしくなれました　羽曳野市　芦田　絢子
余生なお港に錨下ろしかね　寝屋川市　坂上　高栄
コンパスの足を縮めてゆく余生　名古屋市　藤井　高子
捨て石になれば確かな母の位置　鳥取県　西原　艶子
ああ言えばこう言う若さなつかしい　八尾市　宮西　弥生
糠床の上手な友を大切に　貝塚市　池田寿美子
祈りのかたちで化石になる母よ　富田林市　池　森子
落ち合うところ決めて訣れる事にする　和歌山市　田中　輝子
ある時はそっと手許に置く電話　東京都　山口　新子
年中無休　私は振子です　大阪市　神夏磯典子
数え唄やっぱり亡母に辿りつく　米子市　中井　ゆき
かたくなに指黒うして蕗をむく　吹田市　栗谷　春子
仏の水替えて朝が始動する　西宮市　西口いわゑ
あやとりの糸が昔を語りだす　米子市　沢田　千春
嫁った娘の部屋を館と呼ぶことに　兵庫県　倉垣　恵美
その先を言うては格を下げている　堺　市　桜沢あか里
安定剤案じて電話下された　尼崎市　春城　年代
財産も借金もなし形見分け　和歌山市　福本　英子
ダイエットなどよしなさい桜餅　兵庫県　円増　純子
麦の秋野を行く風になりたいよ　寝屋川市　岸野あやめ
もみ洗いしても言葉の罪おちぬ　枚方市　森本　節子
やつれたねキミ心まで枯らすなよ　佐賀県　寺中三枝子
しあわせの卵をひとつ守り抜く　鳥取市　小谷美っ千

寺のこと老母に相談したがよい　米子市　白根　ふみ
人並みの温み分け合うのも二人　兵庫県　北川とみ子
六月の雨にこころを遊ばせる　富田林市　片岡智恵子
薬を忘れ必死に書いている手紙　米子市　金山　夕子
開け放つ窓へ独りの背伸びする　大阪市　津守　柳伸
太陽にキッス　トマトにかぶりつく　和歌山市　山川　克子
鏡よかがみ正直すぎはしませんか　大阪市　亀井　円女
見上げれば孫はかがんで聞いてくれ　島根県　栂　みどり
谷の風少しいびつで温かい　米子市　木村冨美子
軽く見た歩に足元をすくわれる　香川県　川崎ひかり
何時の間に年をとったか齢にきく　岡山県　川端　柳子
住みなれて空気のうまさ忘れてた　岡山県　松本　元江
言葉なく涙ぐんでる除幕の日　岡山県　千原　理瑛
不器用な指で誓書に名を連ね　岡山県　山本　玉恵

ゴシックの**一句目**、女は一旦嫁いでしまうと里帰りもままならぬものである。子育てを終えた今、生れ育った家の風呂は殊更ものを思わせる。ゆっくりと這入る里の湯に浮いているのは、父母の積年の垢と見た作者。非常に洞察が深く、里帰りでこれだけに詠われた句は少ない。**二句目**、たった百円貨と思うが、百円貨だからこの句は楽しい。これが紙幣だったらこうはいかない。踏んだことによって、自分の物であるとするその心理が微妙に働いてこの句をおもしろくさせた。

◇

投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1—18—10
小出　智子

葉書

板東倫子選

見かけなくなった葉書の土瓶敷き　白光子
筆まめの葉書に心詰めてある　悟郎
父の日に葉書で孫の初便り　太一郎
孫からの葉書隅にはチビマル子　達子
合格の葉書と走る田圃みち　妻子
葉書にはやっぱり書けぬ恋の文字　シマ子
一枚の葉書が消した蟠り　温子
絶筆となった恩師の年賀状　虹汀
日曜のパンを焦がした喪の葉書　寿美
礼状の葉書に滲むお人柄　典子
旧仮名の母のはがきが暖かい　渓声
ポケットで葉書の角がとれていた　宵明
どこからか宛名嗅がれているメール　ただし
その葉書きてから音信不通なり　ろ亭
愚痴となる葉書だんだん小さい字に　あずき
達者だと葉書が着いた日の訃報　サワ子
全快と葉書に書ける日をかぞえ　静子
義理だけの葉書に堅い字が並ぶ　洛酔
よろこびのハガキ少うし化粧する　寿恵子
葉書一まい出しそびれてから不仲　枯梢
ワープロで来たさよならのカモメール　章
生きているしるしひょっこり来るはがき　玉恵
孤島から五日がかりできた葉書　しげお
クイズ出す葉書へ神の依怙ひいき　雄々
季節風のようにハガキがあなたから　緑良
蝶のように彼の葉書が飛んで来る　ゆり子
葉書から封書にかわる恋二章　砥代
奥さんをちょっと気にして書く葉書　鉄治
一の矢として絵葉書を投函す　正子
往復葉書の切取り線に義理がある　たず子
年金の葉書隣へ誤配され　狸村
逢いたいと税務署からの葉書くる　み ね
うっぷんを葉書に託す投書欄　白峰
督促の葉書間違いなしに来る　重人
絵葉書の字が酔うている旅だより　明水
万里の長城葉書に一句旅半ば　正敏
ワープロの葉書できつく断られ　俊路

佳

匿名の葉書苦情を箇条がき　螢
腹ばいで絵葉書を書く旅の宿　愛論
君に忠一銭四厘のなれの果て　幸夫
絵葉書の夕日へ行って見たくなり　いわゐ
催促の葉書は文字がとがってる　諷云児

人

隣から葉書で文句言ってくる　はるお

地

人妻へ葉書で済ますエチケット　正坊

天

師の御手蹟(おんて)葉書一葉捨てられぬ　岸野あやめ

軸

うれしくてそらんじるまで読む葉書　好花

焼く

野田素身郎選

手際よく焼きめしもする共稼ぎ　とし子
焼きすてた未練の灰がまだ温い　保州
モノクロで焼野が原を覚えてる　薫
炭焼珈琲　怠惰な午後の五月闇　正敏
直情径行若い命を焼く抗議　博子
過去を焼く煙がしみるあかね雲　喬水
亡父を焼くボタン押す手が泣きじゃくる　白峰
豊葦原瑞穂の国でパンを焼く　正子
玉子焼き老母に飽きたと言い出せず　しげお
娘が焼いたクッキー自慢ばかりする　信義
性懲りもなく寝煙草で焼く畳　洛酔
煩悩を焼くに火種が見つからぬ　有一朗
日記焼く煙が何故か目に沁みる　通彦
手を焼いた子が一番の親思い　宵明
秋風が焼く気にさせた古手紙　文子
我が身焼くように恋しい手紙焼く　あやめ
焼くまでは直らぬ癖がひとつあり　治夢
落葉焼く尼僧が似合う山の庵　杜的
駅裏にタコ焼のうまい店がある　彩子
古手紙焼いて明日に立ち向う　博男
焼鳥屋上司肴にコップ酒　雄々
飽食の世へつつましく鰯焼く

網膜を焼いて離れぬきのこ雲　高夫
焼け石に水を承知で振る反旗　鉄治
神の名で砂漠の砂も空も焼き　大柏
過去焼いて嫁にゆきます角隠し　夢酔
手紙焼く恋の終りの白い灰　章久
栄螺焼き焚火を囲む海女の昼　清芳
容赦なく家も田も焼く火砕流　一乗
孫と行く夕やけ小やけの田圃道　親踏
換気扇となりもサンマ焼けました　宵草
戦争で焼けたページが埋まらない　渓声
まだ熱い遺骨親父は生きている　虹汀
焼き捨てた灰が形のまま残る　あずき
この村が好き夕焼けが美しい　南奉
巡礼へ阿弥陀堂から夕焼ける　度
耐えしのぶ焼いてしまえばいいものを　螢
幸せの香りで朝のパンが焼け　希久子
産院の妻へ焼き芋たのまれる　帆雀
成功をしたから無駄な手紙焼く　伊津志
焼け跡のリンゴの唄で生きて来た　(舵)隆
肌を焼くのにわざわざのパスポート　柳子
焼きなすび女ひとりのおそい昼　寿美
地
火葬場のお世辞きれいに焼けました　愛論
天
にぎりめしあの焼跡を忘れない　田中正坊
軸
御札焼納十分お陰うけました

かすか

門谷たず子選

樟脳のかすかに匂う衣替え　倫子
かすかに残る記憶の中にある故郷　元江
女の香あすかに匂うお下げ髪　高夫
糸電話かすかな愛を温める　彩子
花と蝶かすかな思慕のハーモニー　圭坊
病む母のかすかな寝息明り消す　有一朗
気がかりをかすかに見える山に問う　富喜子
赤ちゃんを抱けばかすかに乳匂う　抜智
騙されて遣る気かすかに母の声　忠雄
そこはかとなき香りを置いて立つ女　薫
幼名がかすかに言えた孤児記憶　ろ亭
風鐸のかすかにゆれて飛行雲　杜的
亡母の声かすかに聞いた手術台　寿美
真心に触れてかすかに胸が鳴る　玉恵
写経百遍かすかに覚ゆ安堵感　鉄治
責められてかすかに動く喉仏　帆雀
切手はるかすかな絆信じてる　裕美
補聴器のかすかな音を杖に日々　明水
覚めかけた麻酔にかすかな医師の顔　好花
ため息がかすかにもれるモードショー　正坊
冗談の中のかすかな唐辛子　しげお
古文書にかすかに残る先祖の名　杏村
花時計かすかな風にまわりだす　文子
行間にかすかに浮かぶ恋の文字　みつ子
灯を消しておんなかすかな悔いがある　砥代
よく眠る老母へかすかな危惧を抱く　シマ子
次代へのかすかな不安地球病む　希久子
花みずきかすかな記憶たぐり寄せ　いわる
華やいでシャネルかすかに老母の旅　章
大慈大悲かすかに動く仏の灯　佳雲
ご先祖とかすかに契る般若経　緑良
いつ噴くかマグマかすかに匂う妻　良江
許されぬ恋へかすかな火を点し　愛論
雨の日の画廊かすかに動くもの　蕗児
晩い春かすかに歯車が狂う　螢
逢うたびにかすかに積るものがある　艶子
愛の記憶かすかな痛み伴えり　渓声
佳
沙羅双樹落ちてかすかな息遣い　あずき
再会に乳房かすかに弾む音　清芳
羊水でかすかにいのち鼓動する　隆
積木積む　かすかに父の応援歌　柳子
鳩居堂の香りかすかに亡母の部屋　諷云児
人
蓑虫がかすかに揺れている孤独　よし津
地
影法師かすかに揺れている野心　和子
天
かすかだが娘が花になる気配　新正子
軸
生母と別れたかすかな記憶の中の雪

初歩教室

題 ― 同居

辻　白渓子

今月の題「同居」は、家族との同居が圧倒的に多く、表現により内容が変っていたように思いますが、着想も表現も同じようなものがあって残念でした。やはり作句は異なった着想・表現を心がけることが必要ではないかと思います。

犬と猫小鳥も同居の独り者　好花
（犬　猫と同居物好きだと見られ）

縁談も母と同居で思案され　治夢
（縁談が母と同居でまとまらず）

台所二脚増やして軋む椅子　章久
（食卓の椅子を増やしている同居）

幸せは息子同居で居てくれる　みね子
（幸せと思う同居を言い触らす）

犬小屋に同居しているボスの猫　喜子
（いつからか犬小屋猫も同居する）

我儘だから同居はきっといい薬　円女
（同居して嫁の我儘目に余る）

同居する何もかも助けてくれる父母がいる　志重
（同居して親の援助に頼り切る）

愛犬は飼うと言うより同居人　洋
（飼い犬が同居しているワンルーム）

同居して三度三度がものがなし　美葉
（同居して三度の食事に気を使う）

生き甲斐は同居の中で見つかろか　登代
（生き甲斐を同居の中で見つけ出す）

同居で助けて貰い共稼ぎ　幟
（同居して気兼ねのいらぬ共稼ぎ）

同居人世帯主より威張ってる　静子
（出戻りの娘が口を出す同居）

同居する孫じいちゃんとうまが合い　金吾
（同居する孫が一番よく慕う）

一人娘と同居夢見る4LK　姫女
（4LK娘が同居しに戻り）

同居して二年目結婚式を挙げ　秀香
（二年目になって同居が式を挙げ）

三猿を頭に置いて住む同居　芳水
（三猿の諺通りにする同居）

ローン払う同居で親のすねかじる　保夫
（同居して親がローンを払わされ）

ジョギングへ同居の孫に起される　春風
（同居して孫とジョギング始め出す）

同居でも良いと言う嫁決めて来た　一枝
（同居でも良いと言う方に嫁を決め）

拾うてきた猫が座布団占領し　和子
（拾うて来た猫がうろうろする同居）

住み心地次第になれる老夫婦　明吉
（好きなことさせて貰うている同居）

同居でもいいと言うたは何時のこと　敬
（同居でもいいと言うてたのを忘れ）

同居して嫁の長所が分かりかけ　春子
（欠点のない嫁同居して分かり）

同居して世代差の壁厚み知り　隆
（同居して時々意見食い違う）

同居して嫁の気ままを発見す　高雄
（同居して嫁の気ままを愚痴にする）

気まま虫封じ同居の和を保つ　志華子
（同居して気ままを直す努力する）

同居ですバアチャン閑で趣味作り　ふみ
（同居する祖母のゆとりに趣味がある）

同棲という名の愛が同居する　清柳
（恋人と愛を育てている同居）

同居する息子夫婦に幸もらう　彩子
（同居する息子夫婦の知恵を借る）

今風で同居はいやと言う姑　しづ子
（有難いことで同居は嫌と言う姑）

同居して淋しくないのがうれしい　友子
（淋しいと思うたことのない同居）

表札は二世帯同居ひとり住む　幸枝
（二世帯の同居へ表札一つだけ）

門標の家長が生きている同居　忠　禄
（表札の主は無職と言う同居）
旧居捨て子との同居にふみきれず　一　乗
（子と同居考えてない設計図）
同居はしても大きな夢がある　繁　男
（マイホーム持つ夢秘めている同居）
白旗を立てたら同居してくれる　マサヱ
（同居してもらう白旗用意する）
同居してパソコン覚え若がえり　喜代子
（パソコンを覚えて孫と同居する）
三世帯同居の朝へ目が廻る　和　枝
（忙しい朝に馴れてる三世帯）
九官鳥に監視されている同居　とし子
（九官鳥が話相手になる同居）
同居して小まめに動く様になり　民　子
（まめすぎて同居の夫けむたがれ）
三世代末の住家よ冷茶呑む　高　栄
（三世代同居へ冷茶すぐに減る）
同居して少しは遠慮嫁姑　昭　治
（同居して姑の方が遠慮する）
手早いとほめられ嫁に使われる　美代子
（同居した嫁にほめられ使われる）
同居して三日保たない嫁姑　ふさ子
（最初から同居は無理な嫁姑）
三世代同居の壁は愚痴でぬる　とよ子
（愚痴多い同居になった三世代）

あの世でも一緒に住もうお前とは　辰　男
（あの世でも一緒とはっきり夫言う）
同居してテレビは孫に占拠され　ますみ
（同居して孫が自由にするテレビ）
年金が幅をきかせている同居　絢　子
（年金があるので気兼ねせぬ同居）
同居して水と油が溶けあわぬ　渓　声
（同居して水と油のような仲）
呑み込んだ言の葉ばかり抱く同居　春　枝
（聞き流すことも大事と知る同居）
堂々とごはんまだかと同居人　杏　村
（ごはんまだですか遠慮をせぬ同居）
同居して互いに融通し合ってる　富喜子
（別世帯続けて同居助け合い）
いつからか嫁の流儀というくらし　芳　枝
（三年の同居が嫁に委せきり）
同居して一つ覚えた流行語　静　江
（新しい言葉を同居して覚え）
子と同居朝食の膳夫婦だけ　侑　里
（同居して食事を別にする夫婦）
同居して一歩大事に二歩前進　太一郎
（同居して一歩をとても大切に）
メリットがあるらし燕同居する　隆　雄
（巣にヒナを育てて燕同居する）
言葉飲みまるくつないでいる同居　みつこ
（言葉にも気をつけ同居丸くいる）

資金少し同居しようと本音出す　暁　子
（年金の一部で同居したい母）
同居から友の電話が遠ざかる　君　江
（同居した嫁が電話をよく使う）
同居して時々鬼が顔を出す　ひかり
（同居して心の鬼を押え付け）
二階借り食事をいつでもずらしてる　友　熙
（同居する遠慮が食事までずらす）
同居してうまくいきそう嫁姑　好　花
（いつも嫁折れて同居がうまくいく）
時々はもめる同居の汁の味　章　久
（味噌汁の味へ同居の好き嫌い）
いつの世も親との同居揉めるもと　喜　子
（揉める事にはもう馴れている同居）

今月の着想・表現の良い句

同居して笑顔の演技うまくなる　友　子
夜叉と仏同居させてる妻といる　彩　子
泣き笑う声も賑やか三世代　マサヱ
先祖の地捨てる同居に踏み切れぬ　洋

私の句

同居してから贅沢になった嫁　白渓子
押しかけて同居をしたと悪びれず　〃

◇

題「**匿名**」　**8月15日**締切（10月号発表）
宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3—19　辻　白渓子

■ずいそう

温泉はしご

西尾　栞

第十五回全日本川柳愛知大会が晴天に恵まれ、七〇八名という好成績で終了した。私はもう一晩、クラウンホテルに泊った。そして考えた。

せめて足腰のたつ間にと思って、古古ムーンとしゃれて、翌日、豊橋駅発一〇時三四分の飯田線に乗った。この線は昔三つの会社で経営していた時分に一度乗ったことがある。今はJRとなって車両も綺麗になっていたが、伊那の渓谷を走るのと単線のため、飯田駅へ一四時五分に着いた。天竜駅という駅から私たちより五歳くらい若い夫婦が自分らの横へ座った。これから昼神温泉へ行くのだと言うと夫婦は私たちも昨夜、昼神温泉に泊ったが、山が深いのでテレビが映らなかったことを話した。その話を聞いて私は途端に嬉しくなった。

家に居ると一日中テレビ中毒でいるのが、テレビの映らない山深い温泉とは、願ってもないことだと快哉を叫んだ。昼神温泉は伊那華という名の旅館で、着くまでは田舎とばかり思っていたから、オープンして三年目だという近代建築の旅館なのでびっくりし、案内してくれた女中さんにテレビの映らない話をすると、そんなことあらしまへんとリモコンを渡された。ロビーは自在鉤がかかった囲炉裏があって、温泉は槇か檜でつくられてあると想像して楽しんでいたのに、何も彼も近代設備で、バイブラ湯、ジェット湯、サウナ風呂とニュージャパン式ですっかり夢が破れた。

翌十二日は、飯田から岡谷へ出て中央線の大月で乗り換え、富士急の富士吉田から忍野温泉鐘山苑という豪華絢爛たる宿に泊った。両側に並んだ浴衣の女中さんに迎えられて、シャンデリアのきらめく大ホールに入ると、正面の浮舞台で十二単の女性が琴を演奏している。前から後ろからカメラが撮影する中をエレベーターで九階まで上る。梅雨の最中というのに、くっきりと富士山が窓を額縁にして現れる。温泉は大滝の湯、庭園の湯と仲々広いが、生憎の団体で混雑していた。夜は女子従業員の武田節の剣舞と男子従業員の大太鼓で賑やかであった。

翌朝ベッドで目を覚ますと、寝ながらにして頂上に雪をいただいた富士山がのっと現れ

新同人紹介

山根八重
―紫香・由多香・螢・諷人・盛桜推薦

石尾かつ乃
―紫香・由多香・螢・盛桜・諷人推薦

黒田くに子
―紫香・由多香・螢・諷人・盛桜推薦

太田幸枝
―紫香・由多香・螢・盛桜・諷人推薦

乾　隆風
―紫香・由多香・螢・盛桜・諷人推薦

西川和子
―紫香・由多香・螢・盛桜・諷人推薦

た。日本一の富士山をこんな真近に見るのは初めてで、現在地は標高千メートル以上の所にいるのだから裾野がない、五合目くらいから上だけが窓に入る。俗謡の「日本一のお富士さん、甲斐で見るより駿河一番」の甲斐の国よりは余りにも真近で、尊さがいささか欠けるようだ。

車の窓、富士急の窓から堪能した富士山と大月で別れる。大月を一一時に出ると、小渕沢へ正午に着いた。ここで日本一高い所を走る高原列車小海線に乗る。丁度昼時なので、駅の売店で「うまい甲斐」という名の弁当を買う。清里駅で大分降りる人があったので、そろそろ弁当を食べる。間もなくこの線の一番高い野辺山に着く。私はかつてこの駅で国鉄を待たせてタバコを買うた憶い出がある。その当時は、高原列車は行くという煙をなびかせて小さな箱を二、三両ひっぱって走っていた。

小諸へ一五時二四分に着くと、連絡よく上田へ一六時八分着、タクシーで別所温泉花屋へ投宿、廊下伝いに離れの座敷へ案内される。展望風呂というのは男女混浴というので早速タオルを手に水車の回る廊下をつき当るとそこに展望風呂があった。折よく誰も入っていないので、女房はよかったわねと言いながら久しぶりで背を流してくれる。するとドアが開いて男は四十歳前後、女は三十歳前後のカップルが入って来た。湯舟の端へ入ると思いきや、二人はのうのうと中央に寝そべって入っている。私の目はいやでも女の方にばかりゆく。のうのうと寝そべっているので、股間の黒いものがユラユラとゆれるのがいやでも目につく。成程、展望風呂だと感心していると、女房は知ってか知らずにか、案外早く背を流した。大分手ぬきしたらしい。夕食は、部屋へもってきてくれた。昼神温泉で蜂の子と馬さしを敬遠した女房は、朝鮮人蔘の天ぷらを何の抵抗もなく食べて、ビールをぐいとあけた。温泉はしごの最後の信州の鎌倉の夜は閑かに更けて行った。

一秒を二秒で刻む古時計
時の流れの美しき宿

第15回全日本川柳愛知大会

文部大臣奨励賞

子の絵から緑が消えるのが怖い
石川県　中嶋伊之助

川柳大賞

人間を探すと釈迦の掌に触れる
福島県　江尻　麦秋

第9回 夜市川柳大会

とき 8月4日(日) 午前11時開場

ところ 堺総合福祉会館4階和室大広間
(南海高野線堺東駅下車南へ200m、西へ200m、堺郵便局の南隣)

兼題と選者(各題2句)

「化ける」　土橋はるお選
「転ぶ」　高須賀金太選
「毒」　藤田泰子選
「どきどき」　奥山晴生選
「川」　後藤正子選
「コップ」　春城武庫坊選
「びっくり」　政岡日枝子選
「逃げる」　赤木和子選
「月」　八木千代選
「にっこり」　小島蘭幸選

※出句締切午後1時(出句は出席者に限る。各題秀句3句に呈賞)

会費 1000円(昼食・作品集とも)

夜市川柳 募集

第3回「街」石部明 8月末

投句先 〒593 堺市堀上緑町2—9—2
河内天笑方 堺川柳会

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (8)

橘高薫風

大正十五年の七月号の路郎巻頭言は「大空を求む」と題する一文。全文を左に記す。

病気というものは、いろんなことを考えさせる。そんなに偉くない人間でも、一寸乙なことを考えさせる。忙しい人よりも浪人が、いかにも偉そうなことを考え出すのも、この部類に属するらしい。

病気の中から一年有半が生れたり、子規の俳句が生れたりする。そのかわり一層死んでのけようかなどという無分別も起る。透谷や眉山も出る。しかし達者でも有島武郎のような詩的ぶらんこも出るから、あながち病気でなければ駄目だと病気を讃美している訳ではない。

僕は近年よく病気をやる。ぼちぼち偉くなる前兆だと諦めれば諦められぬこともないがただ病気だけは一人前にやっても、偉くなる方は半人前も進まないのではありがたくもない。まだまだ僕は準備時代なのであるから、今殺されては甚だ迷惑をする。もう少し待って貰いたいと思う。

文字を知るは苦のはじめなりで、僕はなまなかの文字を知ったために、その文字によって家族を養わなければならない。川柳を立派な芸術として天下に普及せしめなければならない。それは大それた考えかも知れないが、僕にとっては、大それた考えだとも思っていない。是が非でもやって見せる。それが青洞門を穿つことよりも幾層倍の難事業であろうとも、それは今の僕には問題ではない。ただこつこつと穿つのみである。どこでハタと突きあたろうとも、それは問題ではないのである。案外早く青い碧い大空が見えるかも知れない。いや僕自身の死の前にして必ず大空を発見するであろう。それを求むることのみによって生きる今の僕である。

編集後記では、「又私が寝た。それがために七月号の原稿がどうなるかと思っていたが案じるよりは生むが易いのたとえで、思ったよりも内容充実で、前号よりも前前号よりも頁数を増やさねばならぬ盛況を呈した。編集は僕の枕許で二柳子、松郎、馬行、刀三などが集ってやってくれた。」とあり、六月九日に病臥して二十二日にはまだ床の中で十三日に開いた柳談会の原稿を書かれた様子。それでも柳談会では、「川柳雑誌社の川柳観について」話をしたとの記事があるので、当時は斬新な川柳雑誌社系の作品に他社から、論議や批判があったらしいことが分かる。

病気は丁度梅雨期のこととて、風邪をこじらせたものだろうか。路郎先生は、呼吸器系よりも消化器系の器官がお弱かった。

☆　☆

これからは余談になるのだが、私は去る八日生駒の麻生アートさんご夫妻を訪ねてしばらく歓談をした。路郎先生か葭乃先生のご命日には度々お邪魔をし、アートさんも私の母の命日には豊中まで来て下さりいろんなご教示を得ている。路郎還暦の年に門下生が贈呈した寿像（胸像）があるのだが、個人で保管しているよりも有意義な所に移した方がよいのではないかとのアートさんのご意志により、本社事務所に頂くことにした。来年の路郎忌句会には会場に飾れるし、常任理事会なども寿像に逐一聞いて頂けることとて有難いことと思っている。

路郎先生の寿像は、現在の川柳界に青い碧い大空が見えると感じておられるだろうか。

残暑お見舞い申し上げます

川柳塔社常任理事会

主幹 西尾栞　小出智子

理事長 橘高薫風　塩満敏

副主幹 黒川紫香　高杉鬼遊
野村太茂津　田中正坊

副理事長 西田柳宏子　玉置重人
阿萬萬的　辻白渓子

常任理事 板尾岳人　西出楓楽
榎本吐来　春城武庫坊
奥田みつ子　吐田公一
神谷凡九郎　藤井一二三
河内天笑　宮口笛生
河内月子　宮園射月芳
川島諷云児　吉岡美房
小池しげお

第27回 路郎忌
本社 七月句会

七月八日(月)午後五時半
メンズファッションセンター

梅雨晴れ間のむし暑い路郎忌句会は、例年のように他柳社からも沢山の出席があったため百十二名となり、あわてて椅子を追加する一幕もあった。

はじめに日本川柳協会の「秀句集・推薦句集」の参加依頼があり、橘高薫風氏の「おはなし」となった。内容は路郎忌にちなみ、三十三年から四十年七月に亡くなるまで先生の薫陶を受けた思い出話であった。

行末はどうあろうとも火の如し　路郎

と詠み、職業川柳人を標榜した先生の川柳への努力は、並々でなかったという。その分、人に対しても厳しく、人前でも容赦なく弟子を叱られ、周りの者はいつもピリピリしていたらしい。常に青春を彩濃く持っていた先生の心を若い人に伝え、川柳の発展に力を尽さねばならぬという思いを結びとした。

『番傘』との交換選者は梶川雄次郎氏、席題は京都の保木寿氏選。福本英子さん欠席による代選は春城年代さん。初出席は尼崎市の田中薫、池田市の岡本吉太郎、大阪市の辻香豊の三氏。月間賞は大阪市の西出楓楽さん。

(進行—奏月)(受付—凡九郎・月子)
(清記—楓楽)(記録—射月芳・月子)

席題「いろいろ」　保木　寿選

いろいろとおました今は笑てます　ダン吉
いろいろの声で人妻甘えます　英壬子
いろいろな話がたまる五色豆　しげお
いろいろな絵の具とかして和に生きる　たず子
カルチャーもいろいろ源氏ものがたり　柳伸
いろいろな話　蛇の目の中で聞く　馨
裏芸をいろいろと持ち旨い酒　恭昌
いろいろあるが女装にチョゴリなどいかが　白洋
いろいろと痩せるお薬飲んだけど　雄次郎
小箱いろいろ少女の夢が入れてある　奏月
閃きをいろいろ持って趣味多彩　雅文
僕の事　人はいろいろ言うてはる　射月芳
いろいろな顔が並んでうれしいな　東雲
いろいろな景色を乗せてゆく電車　(後)正子
いろいろとスパイス効かす夏の膳　みつ子
ラーメンでいろいろ噂聞いて去ぬ　月子
いろいろとあって別居をしています　紫香
いろいろあって夏越の祈りなどを持つ　恵美子
いろいろな指に触れさすおじぎ草　しげお
いろいろな彩でだましたのはあなた　柳影
返す言葉をいろいろ喉に溜めている　太茂津
人生いろいろ詩が落ちてる新世界　千海
好きらしいいろいろ世話をしてくれる　憲祐
暴力団いろいろの手で生きのびる　萬的
いろいろな女の手相観て儲け　浩一郎
柳の下にいろいろの恋ありました　作二郎
いろいろな風に出逢っている詩人　岳人
いろいろと都合してます逢うてます　柳宏子
いろいろの男を知っているグラス　鬼遊
いろいろなワイン楽しむ船の旅　浩一郎
女いろいろ男いろいろ茶がうまい　杜的
いろいろなことがおました未亡人　眉水
花火師は花のいろいろ考える　美幸
いろいろな暗号がある子の日記　愛論
カメレオン敵と味方は知っている　薫
森はいろいろきっと話があるだろう　白兎
尼僧談義ほんにいろいろありました　たつお
押し売りもいろいろウインク売りに来る　勝晴
錆付かぬよういろいろとやっている　智子
いろいろがあって眉間に傷をもつ　馨
カラフルな花を仏の日に選ぶ　恵美子
あんな女もこんな女も遠くなる　たつお
宝石箱　女の戦知りつくす　憲祐
軸
税務署の舌も比べに来る新酒　寿

兼題「舞う」　春城年代選

京舞に古都の歴史が呼吸する　千海
舞扇お師匠はんはいけずやわ　正坊
風が舞う峠で狂うように抱く　浩一郎
舞う落葉　土に還れぬ街である　ダン吉

大都会の隅でゆっくり舞い終る　智子
喝采のない舞でした金魚鉢　輝子
白寿の舞はテレビカメラに写される　香豊
ジーパンを脱いで少女は神楽舞う　武庫坊
凜々しさは男以上と見る剣舞　翠公
蝶が舞う短い命の花しぐれ　雀踊子
螢の灯　少しみだらに闇を舞う　みつ子
舞い納め明日はお嫁へ行く扇　月子
鶴が舞うように揺さぶろうこころ　(後)正子
砂塵舞う外人部隊が去るラスト　正坊
小便小僧のしぶきが舞うて虹になる　鬼遊
男舞しごく扇の槍さばき　馨
法燈がゆれて輪廻の風が舞う　千海
舞い終えた男の顎にある余裕　武庫坊
身の程に合せて舞おうしじみ蝶　はつ絵
嫁にゆく妓の舞い納む三番叟　規不風
ひとり舞うさくら小紋が褪せるまで　幸
きりきり舞いしている母が嬉しそう　三男
本能で舞いおおせたるフラダンス　天笑
座ぶとんの乱舞　土俵のみだれ髪　しげお
蝶乱舞　世界羽ばたくハナエ・モリ　寿美
やけ酒に天井の舞うやるせなさ　憲太郎
朱鷺舞わぬどう償うか佐渡の空　雅文
連れ舞の視線に愛が絡みあう　たつお
神楽舞　意中の人があるらしい　眉水
情熱をやんわりたたむ舞扇　ただし
人生の縮図だ外れ馬券舞う　輝子
祇園祭りでうちのOL神楽舞う　度
迷惑な噂が風に舞いあがる　諷云児

地唄舞　扇天地を形どる　雅文
ひとときを舞えば螢が添うように　作二郎
アリランの鼓にチョゴリ蝶になる　寿
佳
龍宮の舞　鯛にひらめと決ってる　笛生
不発弾　抱いてわたしの夏を舞う　幹斉
風が舞う太宰治は旅の人　岳人
生きて舞うおしろい花に降り止まぬ　恵美子
Tシャツの舞妓と出逢った先斗町　杜的
人
舞台暗転　舞のひとりを置き去りに　作二郎
地
やがて舞う蛹が雨に耐えている　みつ子
天
舞うことが下手で夏痩せばかりする　恵美子
軸
舞い終える日はいつか来る立葵　年代

兼題「人妻」　川島諷云児選

人妻があっさり握手してくれる　(松)文子
それにしても喪服が似合う人の妻　敬
誘惑をした人妻に礼を言う　螢
人妻とわかってからは距離を取る　庸佑
しあわせな人妻らしい華がある　(新)正子
すみません君の奥さん好きになる　恵空
人妻の強さ爪が伸びている　雀踊子
人妻を大胆にする宿ゆかた　(小)英子
初恋の君　故郷で人の妻　柳弘
人妻になると化粧を手抜きする　東雲

人妻となって混浴恐れない　愛論
ボクにだけ向いの奥さんよく笑う　眉水
人妻を忘れてはしゃぐ三次会　緑
人妻と妻の違いを考える　智子
妻であることを忘れたことはない　智子
妻になりカードめっきり減りました　ダン吉
人妻と酔ってはならぬ酒を飲む　美房
人妻のアキレス腱を握ってる　三男
妻にないとこ人妻が持っている　紫香
人妻に男の隙は見せられぬ　武庫坊
人妻のパックがやぶれ易くなる　はつ絵
人妻から迷惑そうな返事くる　完次
人妻を賞めると妻に殺される　太茂津
妻も好き人の奥さんもっと好き　シマ子
うわばみのような人妻連れている　達子
蕗谷虹児を愛し続けて人妻に　雄次郎
人妻の吃水線を知っている　はつ絵
神様の前で人妻　嘘をつく　香豊
人妻の匂いは殊のほかよろし　馨
人妻と知りつつのめり込んでます　理瑛
人妻同士　意外にどぎついことも言う　萬的
姦通罪そんな昔もありました　千秀
人妻を褒めると山の神あれる　奏月
もうちょっかい出しなや結婚したらしい　柳宏子
ほたる狩り誘えば子供連れてくる　絹子
人妻の涙は海の味がする　(後)正子
それは無理わたし夫がございます　憲祐
佳
夏風邪の人妻といる遠花火　恵美子

人妻と交わすグラスは風模様　(柿)英一
人妻の吃水線が浅すぎる　楓楽
人妻の不倫は橋の手前まで　しげお
如来座像の瞳になりたくて妻になる　(後)正子
人
人妻の時計は遅刻ばかりする　幹斉
地
人妻はちぎれ釦を持っている　作二郎
天
人妻の日傘は軽く身をかわす　恵美子
軸
人妻とちょっと危険な夢を見る　諷云児

兼題「風」　田中正坊選

草笛を吹けば少女に戻る風　多賀子
風ひゅるり鍵っ子ひとりたそがれる　敬
風を待つうちにコロッと気が変わる　(新)正子
燈明が風も無いのに揺れている　庸佑
啄木鳥の便りを運ぶ森の風　道胤
知らんふりして女扇子の風がくる　螢
うらぶれた看板たたく風の街　年代
悪戯な風を探している詩人　岳人
風向きがときどき変る嫁姑　(小)英子
夏風邪をもらって帰る通夜の席　冬葉
意気ごんだ風へ柳の肩すかし　度
台所　磨いて風をやり過す　楓楽
山頭火　風と歩いて星と寝る　雅文
すぐ変る女心と風の彩　たず子
追い風に乗れぬ男のコップ酒　透太
男の目じっと据わった向い風　ただし
ご近所のおかずがわかる路地の風　鬼遊
風切って来る百点のランドセル　三男
水子塚あやし続ける風車　千秀
まだ会えぬ母を捜して風の街　諷云児
逆風へ紐締めなおす太い眉　重人
楢山へ風に押される時刻表　たず子
峠越えると風あたたかな色を持つ　一二三
四つ角の風はウロウロして困る　紫香
故郷の風　未婚の母を許さない　章久
行雲流水　風のゆくえは問うまいぞ　楓楽
やさしい風　欲しくてリンゴの木をゆする　憲祐
おくれ毛の風に弱身を見透かされ　寿
美術展　静かな風と溶けている　緑
さわさわと風が聞こえる竹人形　三男
頭すげかえて新風待っている　天笑
ピーマンの輪切りへ小さい風の音　寿
言い勝って心に淋しい風が吹く　昭子
そして男は黙って風の音を聞く　透太
哲学の道　哲学の風に逢う　杜的
西からの風が地球を染め直す　馨
佳
風向きで噴水裸婦を見失う　作二郎
風鐸の雨を知らせる西の京　薫
人間に生まれて風に叩かれる　雀踊子
みちのくの旅の果てなる風の石　(柿)英一
海からの風に男の貌になる　武庫坊
人
再選でまたなまぬるい風の町　天笑
地
風待ちの港で阿呆な恋一つ　栞
天
風の中　命ひとつをもて余す　みつ子
軸
揺れ動く心を抱いて風の丘　正坊

兼題「迎える」　梶川雄次郎選

三回忌迎えてひばり唄いつぐ　緑良
迎合の目をポチにみる定年後　仙吉
鍵っ子が迎える寒い夏休み　(新)正子
片減りの靴を迎えて恙なし　保州
ようおこし河内言葉が温かい　薫
お迎え人形ドンドコ舟を供につれ　勝美
手ぶらとは知らず迎えたエアポート　正坊
フルムーン迎えてくれた蟹づくめ　香豊
子には子の母を迎える胸のうち　茜
久し振り迎えの母の小さ過ぎ　光代
迎えうつ敵のひとりは妻だろう　寿美
定年を迎える地図を塗りなおす　たず子
白旗を揚げて迎える古稀の坂　鬼遊
お迎えの催促でない墓参り　理瑛
おいでんさい峠の句碑が迎え待つ　いわゑ
好敵手　迎える花を活けている　美房
村中が迎える過疎に嫁が来る　左久良
うぬぼれへ迎えの人は見えぬ駅　楓楽
息子の嫁　迎える眼鏡かけ替える　萬的
歴史街道　迎えてくれた道祖神　紫香
大臣を迎え駅長硬くなる

願うことといくつ迎え火一つずつ　美幸
原爆のほとけへ水のてんこもり　寿
迎え傘　待つ幸せを噛みしめる　三男
泣きやんで明日迎える米を研ぐ　千秀
迎え傘　朝のケンカを忘れよう　月子
迎え火に詫びて手に乗る蚊を叩く　憲祐
ピチピチチャプチャプパートのママをお迎えに　満津子
迎えうつ言葉選ってる午前二時　絹子
出迎えの中に鍬をかついだ父が居る　栞
退院へ我が家の明かりみな点し　緑
単身赴任　妻を迎える髭を剃り　飛鳥
ホワイトベンツ迎える方も胸を張り　雅文
視えますか心に迎え火を焚こう　(後)正子
目立つから迎えに行かぬことにする　庸佑
友情が待つ長靴の泥まみれ　一二三
敵となる目も出迎えの中に居る　雅文
迎え火のたびに溜った愚痴つげる　馨
大連れて迎えてくれる元上司　紫香
ユーターン裸足を土に迎えられ　太茂津
かすみ草　晶子知るひと迎えにゆく　作二郎
何かある妻が迎えに来てくれた　杜的
仏さんを迎えるように螢とぶ　恵美子
迎え傘　夫の定年近くなる　三男

軸

百までは待てとお迎え追い返す　雄次郎

兼題「文楽」　西尾栞選

卒論に文楽書いていた作家　幹斉
文楽は刀を持つと大上段　眉水
太棹のツレ弾きに酔う野崎村　眉水
泣く所作へ太棹の音が高くなり　萬的
文楽座　橋に涼しさあった頃　馨
文楽の人形に好きな顔がある　狸村
天狗屋が坐りつづけた阿波の土間　茜
文楽の余韻を抱いて法善寺　〆女
文楽の黒子が客の数を読み　寿
太ざおの三味　人形が目をさます　(新)正子
どの人も巡礼おつるに泣いた顔　諷云児
文楽で泣いて淡路の旅終る　(新)正子
外人が見ても文楽面白い　紫香
わが亡母は文楽見ながら産気づき　抜智
文楽を日本の土産にして帰り　左久良
文楽のさわりぐらいなら分る　白渓子
文楽でオペラの話ばかりする　千歩
文楽を理解　日本に帰化をする　雄次郎
文楽人形　恋の悲しみいくつ持つ　いわゑ
観客の首も動いた文楽座　重人
文楽へ行く母と娘のむつまじさ　智子
文楽の親子名乗れぬまま別れ　雅文
文楽を修学旅行みな眠り　昭子
文楽へ誘えば機嫌直す祖母　千歩
壺坂の祖母にならった一とくだり　頂留子
文楽の指の先から泣く女　たず子
太棹が泣き沢市の目が開く　一二三
文楽へ亡母の着物に誘われて　満津子
半七のなげき眉が泣く肩が泣く　憲祐
文楽の親子はみんな情がある　恵空
勘平の眉に情けの死がゆれる　敬
黒衣着てまだ人形に近づけぬ　蕗児
文楽の三味が人形の指叱る　悦郎
梅雨しとど文楽人形欠伸する　太茂津
文楽にみる男性の良き時代　頂留子
大阪に生まれ文楽まだ知らず　柳影
三人の息でお初の色気出し　天笑

佳

文楽の好きな女に従いてゆく　公一
文楽を見てからうまいうどん食う　美房
文楽にかぎり素直になる心　美智子
人形へいのち吹き込む一の糸　薫
七月の〝いろはおくり〟へ酒が降る　結実

人

紋十郎のお染と握手したご縁　柳宏子

地

文楽のセリフを借りる妻と居る　幹斉

天

文楽もトキも減びの美学もつ　楓楽

軸

文楽から泣いて帰って茶漬食べ　栞

花地抄塔

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月**25日**締切・30句以内厳守。所定の原稿用紙に清記をお願いします。　**編集部**

いずも川柳会　吉岡きみえ報

事故現場無事でいたのは時計だけ　清子
捻子巻けば古い話をする時計　青湖
人間の終りに医者が見る時計　草丘
限りある時間に炎える花時計　桂子
時計から急かされている終電車　佐吉
開発に人間不信の森が泣く　翠唱
人間の胸に小さな鬼も住む　律子
動物の中で人間だけ笑う　幸一
心電図遠くに罪が映ってる　重昭
病む父の視線が昨日より遠い　章峰
耳遠くなってもみんなききたがり　桜水
遠くから見守る母がいる安堵　篤子
遠くまで行けば涙も渇くだろ　きみえ
遠い日の雲を追うてる赤トンボ　義良
遠くからわかる父の千鳥足　リチエ
鉄橋を時計代りの汽車が行く　房子
単調な刻みの我が家知る時計　玄好
玄関で耐えてふりむくお立ち酒　流石
玄関に見馴れぬ靴が脱いである　茂美
玄関に出た留守番に髭がある　寿美
玄関の花ほめてから奉賀帳　満江
玄関に靴が溢れるめでたい日　陽子
人間の欲望藁も頼り甲斐　まこと
人間とくらし不幸になった猫　ちかし
人間の祈りに負けた春の絵馬　早苗
人間もホタルも迷う甘い水　肇
人間に生れ小さな灰になる　小鹿
人間がいいから強い風に会う　竹夫
遠くなる人にとばそうカモメール　文子
始めから尻尾を見せていた狐　代仕男

川柳藤井寺　高田美代子報

鮎はねる私の若き日の様に　悦子
肩書がとれてゆっくり眼鏡ふく　敦子
手品師のうやむや皆んな唖然とす　利武
争いはうやむやにして決めてよし　キミ子
笑ったら鏡が同じだけ笑う　美房
銅鏡の歴史を刻む竜模様　ときお
手鏡に十代の僕探してる　修六
姿見の中で女が蝶になる　ケイ子
パトカーがバックミラーの視野にいる　一屯
合わせ鏡の中で昨日のはなしする　美代子
そんな気にさせる鏡は罪深い　政代
寿が一色になる日の鏡　昭子
頂上で裾野時代を忘れ勝ち　宗一
トップ会談北方領土は遠すぎる　智久
頂上に立つと逆らう風が待つ　治子
頂上へ五月の風が寄せてくる　末一
見下ろせばお山の大将僕一人　淑子
頂上を目の前にして肩たたき　三夫
おにぎりの三角頂上より食べる　三郎
登りつめて見れば向うに高い山　吸江
錯覚の頂上だったこの挫折　婦美枝
おりるしかない頂上の恐怖感　昌子
頂上に立つまい高所恐怖症　正枝
頂上に日の丸立てた男泣き　志洋
頂上で貴族になった青葉風　寿美子
頂上の霧にかくれているロマン　たかし
頂上に立つと勲章欲しくなり　みのる
頂上へ登らぬ決断だってある　比呂志

倉吉川柳会　渡辺菩句報

引き金が引けぬ男で長く生き　柳風
親の恩あの世に行って返そうか　秋草
楽しみは夫のおしゃれに凝っている　和枝
寡婦となり男まさりの生地が出る　しづ江
恩人が愛に変ったのに気付き　とめ子
腹を切ることには馴れた男秘書　雄々
揉み消してくれる男に気を許す　螢
好きな人出来ておしゃれが加速する　よしえ
雨宿りちょっと一句が欲しくなる　秋人
花の名を知らぬ男が花を買う　久子
姿見が私のおしゃれ笑ってる　美智子
おしゃれして大仏様に逢いに行く　勝見
この御恩死んでも忘れませんは嘘　観洋

石段を登って行って風になる　石花菜
この石段なんで歩幅に合わないの　勝彦
女だと思ってみたら男の子　御前
雨の詩を乱すいびきが憎らしい　康志
下駄箱にとてもおしゃれな靴がある　京子
爪切ってあしたのおしゃれ考える　ゆり子
切れ味の悪い男ですみません　とみお
石段の凹みは俺が踏んだ跡　独歩
石段をどう上ったか見てる神　寿朗
この頃の男は骨がないそうな　菩句

岸和田川柳会　芳地　狸村報

大穴を当てて静かに飲むビール　勝晴
ひま人が放つ噂の矢に当る　冨志子
思惑が次つぎ当り怖くなる　通彦
烈風に当り自分をひっぱたく　すみえ
電車賃残し大穴狙ってみる　恵空
一転の胸に手堅く閉じておく　浪速子
アクロバット一転二転の見得を切る　小紋
一転の危機が含んだボスの所作　武助
うっかりとギアアップした夜の悔い　一弥
縁でしょう出会いの蟻がお辞儀する　ダン吉
縁遠い娘に賽銭を弾ませる　二南
生活費稼いで渡すだけの縁　文時
教え子の縁を大事に温める　さよ子
もう一度お会いしたいと言う縁　ひで
ひと転びする間も無駄をせぬ男　月子
それなりの努力で当る蛸焼き屋　甘平
不幸続き因縁めいた話聞く　白光子
披露宴変な男と縁が出来　天笑
一転してアイドルよごれ役もする　萬的
一杯機嫌えらい約束したらしい　柳宏子

川柳岩出　小倉　アサ報

支え合う人の一字にある重み　昌子
人情が人の暮しに灯をともす　英子
歯車の片方きしみ狂い出し　春子
人垣を作らぬ君の広い視野　精子
片方の権利を妻がもつ空気　愛子
片方へ寄ったばかりに転げ落ち　義美
片方の目を患えば右光る　千代子
人の世のはかなさ知って花は散る　幸子
イベントに人人ひとの蟻の列　正直
万物は片方だけで成り立たぬ　永年
体重のかかる片方の靴が減り　喜市
役立たぬ片方だけもすてられず　美枝子
結ばれた日から片目は閉じたまま　アサ
片方が止まる勇気のない無念　紳一郎
人生の指針まだまだ有る余白　綾子
共倒れしたくないから妻逃げる　忠雄
人為ミス陶芸日本血で染める　瑞穂
万を積む鯉を買う人つくる人　与呂志

川柳クラブわたの花　片上　英一報

耳の痛い話に耳が寄りたがる　シマ子
内緒事言えぬ老母の耳に負け　美津留
家中が勝てぬおやじの地獄耳　友甫
他人には言わないからと耳を寄せ　泰成
お世辞だと知りつつ耳に快い　春子
忘れずに耳が軍靴の還り待ち　その
まだ耳に女を残しイヤリング　ますみ
商売の耳を夫が別に持ち　トシエ
耳よりの話やっぱり金がいり　龍襄
耳よりな話どこまでほんとかな　みき子
町内を引っかき回す地獄耳　正子
食べてくれと言っていますよパンの耳　弥生
人の言うことは聴かないひとり旅　明子
いい話耳に爽やか春の風　弘直
腹の底見えてうれしい酒をつぎ　一風
孫のあと少しざらつく風呂の底　幸枝
友情をバネにどん底這い上がる　君江
胃の底にストレス溜めて病んでいる　初子

佳句地十選（七月号から）

岩原喬水選

不器用をあらためて知る妻の留守　露児
政治家が嘘をつくので困ります　鬼遊
許すとは言わない父が孫を抱く　半仙
添い寝する母がぐっすり寝てしまい　与呂志
ひとり立ちさせたい凧の糸を切る　旋風
辛酸をなめて仏の顔になる　正坊
裏芸に長けて左遷を免れる　鉄治
連休へせっせと車磨いてる　紫香
軽くとも一円だって生きている　洛酔
回転はにぶいがまじめな水車です　鉄心

わが暮し底を見てきて強くなり　龍
どん底の日々遠くなり春うらら　俊子
妻の手にかかるとすぐに割れる底　英一
山歩き男はやたら手を握る　隆
指切りで愛たしかめた頃の妻　しげる
口車乗せられすぎた玉手箱　暁子
あじさいの碧き色ほど我は好き　芙美子
顔色も変えずにギャルの大ジョッキ　章
よい話ばかりを聴いている仏　鬼遊

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

鍋底を磨いて主婦の座をまもり　すみれ
年金の暮らしに義理が多すぎる　ふさえ
相槌の細くなるまでいた不覚　吟平
貧乏と言う語は知らず子は伸びる　甫正
妥協して帰る夜道にある温み　志重
咲くを待ち散る花愛でて春は逝く　秀香
笹舟に小川の流れも春の曲　伊久栄
探知機へ電話長引きさとられる　㊀美恵子
末席の異論が議事を長引かせ　邦人
頑張れよ父の優しさ背に門出　江山
俺の代だけは頑張る居職の灯　半仙
頑張ったひと言丸い背が伸びる　山人
頑張ってる明治世代の腰のバネ　恒心
水虫も啓蟄知っているらしい　賛平

川柳東大阪　森下　愛論報

悔悛の一瞬からの真人間　信治
面を打つ一瞬鬼の目になって　作二郎
一瞬を戸惑いながら生きている　猪太郎
踏み出した進路に迷いが少しある　美子
胎動にあわせて進む毛糸針　頂留子
あざやかな色着き夢をうれしがり　愛論
あざやかな影絵がゆらぐ薪能　雀踊子
飛び六方さすがあざやか芸決める　隆
母さんを呼んだら星がまたたいた　湖風
冬山に返らぬこだま呼びつづけ　孤舟
おい煙草おい灰皿が直らない　文秋
山に声川に声して春を呼ぶ　章久
新緑あざやか野仏も目を細め　勝美
そよ風のような寝息を子に貰う　柳宏子
そよ風に魂売ったことを恥ず　恒明
そよ風のやさしさに逢う昼食にする　滋啓
茶の香りやがてそよ風町中に　度
花粉症なのでそよ風でも恐い　晋吾

川柳化粧櫓　植村客遊子報

善人とみたか募金が声をかけ　岳詩
取り替える部品があればと思う古希　遊峰
子に送るだけ干柿がぶら下がり　大鷹
師を囲み生徒に返る喜寿の友　輝月
一坪の花壇が春を歌いだす　サワ子
ねむった振り敵とも味方とも知れぬ　葉香
欲ぼけが互いに手相見くらべる　礎石
山荘の歴史は知らず句座みどり　悲子
パチンコへ自然に足が向く休暇　三青
自然の美名も無き花も咲き競い　和笛
愛想よい今日のワイフは何かある　一典
親よりも口うるさい隣の目　美代
あれこれと多趣味の人で今日も留守　嘉
盛り上れ初日金星貴花田　茂章
金余り便利さで家建て替える　姫女
船旅へ根の無い話が座を沸かす　はる子
目くばせへ気付きそれから話題変え　好花
貧しさの中で勇気も育てられ　遊峰
吟行へドレスアップで勢揃い　治夢
物忘れだんだん酷い喜寿の春　永楽
調子良く黒攻め勝った手がふるえ　客遊子

尼崎小園川柳会　井崎ミサ子報

花の季も移り水仙影もなし　智子
近松碑　水子地蔵と向かい合う　六浦
尼崎の文化に近松さんが居る　弘治
紫のあやめに君が似た姿　キク子
一尺の墓に詣でる大スター　寿子
青空にぽっかり浮かぶアドバルン　悦子
こんな日はそうざらにない青い空　年代
青空を見ると洗濯したくなる　ミサ子
青空を突き刺している天守閣　夢之助
青空に弾みがついた万歩計　勇次郎
青空に乗馬で走って見たくなる　向西
青空から帰りたくないブーメラン　武庫坊
青空に向かい大言壮語する　歌子
遠足に疲れて帰る青い空　伊三郎
五月晴れ小鳥になってしまいそう　奏月
ハプニングすんで見上げる青い空　修水
青空の漁港に船の影もなし　紫香

お互いの肩書知らず趣味の会　芳子
肩書に男の賭けた夢がある　美智子
肩書を外せば丸い良い男　十四郎

川柳塔あおもり　波多野五楽庵報

ガラス窓　孫の小さな手型拭く　境
愚者然とガラスに写るおれの顔　彩人
窓の目を家具で塞いだ四畳半　勝男
窓際に置かれて不満抱いて居る　進
バスの窓工事の遅れ見てしまう　敏夫
影武者が踊り出そうな格子窓　つる
天窓の星が覗いていた地獄　凡凡子
窓ごしに後ろ姿を見てただけ　隆利
見送りのミニがまぶしい窓ガラス　一花
疑問符がヌッと佇ってる覗き窓　黙人
窓開けてあなたの息も嫌になる　叶
蝶になって覗いてみたい窓がある　風樹
窓口の向こうに癒な奴がいる　甲吉
灯台の窓は悲しみ見せませぬ　劦
もがいても運の行方はわからない　昭治
思い出の駅なつかしいフルムーン　喜久江
無人駅恋の芽生えが遠ざかる　つとむ
ふしくれた手から田んぼの土が落ち　花峯
定年を楽しくさせる土がある　井蛙
土に耳当てて埴輪の私語を聴く　善保
爪の土いつも取れない農婦です　五楽庵

川柳後楽吟社　従野　健一報

空腹と空の碧さと素浪人　草風
再会へ胸のリボンが波をうつ　美智子
アクセルをゆるめ大人になりました　拓治
粗大ゴミテレビの前の指定席　哲郎
久々に集えば老いの目が光る　たけ志
出世より健康祈る太い指　正秀
口先で賞める仕草が漫画めき　博友
病む日々は空を眺めて籠の鳥　みよ子
いつまでもささやく石の友ができ　吟平
会うたびに明日のいのちを語り出す　金吾
愚痴たんと無報酬への役で聞き　柳五郎
賽銭の音は確かに神承知　浄美
ときめきを知ってから母に嘘がつけ　進
人生の逆光線の中の詩　佐加恵
理解せずうわべで敵となぜ思う　保男
生き残る蝶来年の夢を持ち　鮫虎狼
リンゴ酢の甘さに少し油断する　吉則
財布の紐にケチな男と書いてある　義親
経験の深さを語る母の壺　健一
経験を生かして老いの竹トンボ　照路

西宮北口川柳会　林　はつ絵報

時々は僕に聞こえる天の声　正坊
一拍をズレて笑いの出る洋画　正とし
時つなぐ話題を仲人持っている　白渓子
愛試す言葉人去る時に言う　三笑子
遭難の時刻をずばり腕時計　杜的
嫁ぐ日が迫り無口な父になる　〆女
おぼろ月夜の時を止めたい影二つ　武庫坊
何時もの道いつもの犬に吠えられる　春蘭
苦しさも時つみ重ね風の音　義子
わが胸の時のきざみが速くなる　年代
その時に要る合鍵を持っている　しげお
影法師時にわたしを疎んずる　いわゑ
悠久の流れ一瞬の人と住む　みつ子
ばら色で残りの時が肩叩く　はつ絵
二人きり小さくなった朝の音　能子
爽やかな朝を演出するサラダ　たず子
ふるさとで生きる日の出に鍬をふる　宣子
花の香に近寄るだけで怪しまれ　香子
犬の目に怪しく映る顔を持ち　てる
怪しいと見抜けなかった欲の皮　よし津
二の足を踏むと跳べない水たまり　諷云児
雰囲気へためらいながら出す土産　園歩
ためろうて掃海艇が出遅れる　芳子
ためらっている間に女神背を向ける　富喜子
ためらいを捨てよとメスが光ってる　柳影
種袋振って封切る母のくせ　トミエ
スーパーで満ち足りている暮しむき　英子
することが山ほどもあり堅い椅子　求芽
またここもビルの谷間のたばこやさん　保蔵
怪しいと犬が一番思うてる　紫香

川柳塔鹿野みか月句会（六月）　**土橋螢報**

理想とは違う道でも生きている　しずゑ
でこぼこの路から悟る夫婦道　正恵
凸と凹うちの夫婦のことか知ら　昌子
理想もち高嶺の花に背のびする　房子
これからを波打ち際でかんがえる　公弘

父の背の痕は打たれたものである　飄人
理想とはほど遠くなり平社員　皓司
陰になり日向になって子を育て　静江
理想郷みんなでわたろ彼の岸へ　信江
公約がダルマの陰に捨てられる　大漁
じげ起し太鼓打つ手もくたびれた　みさ江
気短なひとにあわせている歩幅　みさ子
お見合いで理想の人を振りました　早苗
城あとに武士がいて去り難し　英子
いい夢を見るお布団を打っている　和子
長いようで短い旅の人生譜　幸枝
陰徳はつめず凡愚の道を行く　隆風
皇軍と言う名のマスク重かった　喜与志
出張が短いようにと言った日も　孔美子
妥協する言葉短くしています　夕峰
生きいきと少年空へ球を打つ　八重子
待針を打って晴着を縫いました　きみ子
陰口は言うまいきっとはね返る　くに子
でこぼこの道に上手な杖がある　はるお
一本の矢が理想からそれてゆく　三千代
少しだけおや子の理想くい違い　汲香
それなりに短い生命咲きほこり　かつの
影法師ふりむきざまにウインクする　しげる
英雄が起きてくるのはまだ早い　螢

おっぱこ川柳会　木村　明人報

青空を吸い込むふとん里帰り　スミエ
働けるうちが華かと精を出す　いさむ
辛抱に耐えたお陰で今日がある　マサエ
点滴のしずくは亡母の涙かも　白柳子
ライバルはいつも元気でいてほしい　ひかり
鶯のもう一鳴きを待って佇つ　迷香
世の中は運不運がつきまとう　迷貫
戦友が次々香典さらってく　明人
探す人探されている登山口　迷観子
色男もてたあの頃懐かしみ　放任
雨あがり空にかかった虹のはし　小四芙実子
鮮やかな色の服着て歳隠し　よしみ
色眼鏡で見ても皺はなお深し　吟笑
年金で祝ってくれる有難さ　かおり
淡路島他人と先に手をつなぎ　伽名子
雨風が約束やぶる事になり　チカエ
言うまいと心掛けよう人のこと　ふみ
あふれ出る車の流れどこへ行く　正雪

三幸川柳教室　三宅　保州報

屑ダイヤなら買えそうな預金高　百合子
花見席散る花びらも買うてある　正雄
折々の気立て買われて玉の輿　章子
赤いバラ買うネクタイの下心　精子
買わないと出遅れそうなコマーシャル　純子
春風も一緒に買った風車　綾子
泥くさい一途な部下の努力買う　鉄治
GNP地球まるごと買うつもり　桂香
ぐい呑みを溢れさせてる独り言　孝子
ほとぼりがさめて本音の独り言　由梨
仏壇へ今日は嬉しい独り言　玉枝
俎板に話す女のうさ晴らし　さち子
背を向けて嫁と姑の独り言　(岩)和子
自己暗示かける鏡に独り言　(古)和子
聴く耳があると知ってる独り言　定
面壁九年　達磨大師の独り言　朱夏
風紋に印す季節の独り言　公子
遺書という舞台へしるすモノローグ　保州
花粉症予防のマスクいたわられ　幸子
お小言にオイルフェンスが欲しくなる　博章
標的にされそう向きを変えてみる　三千子
予防線張って魅惑の人と飲む　みね
予防線張って女々しいことを言う　高夫
来られては困るとわかる電話口　重次
落ち込まぬ予防に灯り点す部屋　靖子
赤い靴履いて青春ど直ん中　親蹐
足並を揃える靴が狂い出す　当代
ふっ切れた迷い靴音軽くなる　千秀
火傷せぬ距離で止まったハイヒール　好笑
散りしいた花びらすまなそうに踏む　茜

川柳ささやま社　遠山　可住報

娘に持たす勘忍袋の布を織る　純子
脱ぎ捨てた城に涙の壺がある　とよ子
心経をあげてるあいだ雨に濡れ　恵美
保証印気まずい距離にした仲間　百合子
流された石の丸さに教えられ　つや子
不器用な夫婦おだてる呑み仲間　ヒサ子
住みなれた路地に滲んでいる情け　靖子
倦怠期だろうか流れが逆になる　とみ子
飲むだけの仲間でなかった日の温み　貞子

真心の滲んだ見舞に泣かされる　和子
子と枕並べて母の満ちる詩　文平
ただ一人私の仲間影法師　テル
並ですと言える平和な靴の音　冨美
並々と酌ぐ日はたちの髪が伸び　可住

川柳塔まつえ吟社　恒松　叮紅報

街灯は悲しい酒を知っている　太泡
街灯と柳絵になる春の宵　満江
街灯のとこだけ雨が降りやまず　たつみ
街灯が後ろ姿を丸く見せ　米子
街灯の下でお札を数えてる　きみ子
街灯が子供の声と入れかわる　邦代
街灯が空缶捨てる人なげき　幾子
人間の弱さを笑うマスコット　雀踊子
ひとり言いつも聞いてるマスコット　静江
マスコットのしっぽと爪に気をつける　小鹿
栄光の涙を見たいマスコット　雄々
あなたから来るお手紙がマスコット　一葉
セピア色の中に生きてるマスコット　清志
変身をする気になっている毛虫　秀子
嫌われた毛虫やがては蝶になる　房子
まんまるくなって毛虫の護身術　妻子
蝶となる日まで毛虫で耐えている　ちかし
蝶々も毛虫も同じ糞をする　章峰
紙コップ重ねて持たす花莚　多賀子
紙コップ一夜の夢に馴らされる　寿美子
乾杯の声より軽い紙コップ　登志子
旅先で愛をとりもつ紙コップ　長三
ウップンを晴らす男の紙コップ　義良
紙コップだってビールの味がする　静恵
親子して釣り糸たれる長閑な日　みえ
雑魚ばかり釣れて晩酌はずまない　与根一
青い流れを恋人にする釣師たち　瑞枝
エビで釣る話に尾鰭つきやすし　荒介
釣り堀の魚に似てる過保護の子　鶴丸
釣竿もわたしも閑で缶ビール　叮紅

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

笹舟を共に流した友も老い　春子
同じ血が流れているとふと思う　真柳
十字路の流れがかわる物思い　柳伸
椰子の実が流れて島を後にする　美幸
挑戦の流れ一途に太い眉　欣之
満天の星空をのむ大ジョッキ　一風
飲むほどに上役酒のあてにされ　甘平
清濁を合せて飲んだ太っ腹　重人
働いた汗が甘露の水となる　勝美
火砕流人を呑み込む生地獄　朝子
口ぐせに死にたいと言い薬のむ　晴山
飲む事も老いの生甲斐花菖蒲　章
カラオケに母の余生が弾みます　しげる
カラオケの梯子夫婦の息が合い　恒明
カラオケとなればイキイキしてる奴　隆
国鉄の貨車がカラオケ村になる　二南
カラオケの出る潮時に外す席　正子
仕方なくにぎったマイクやみつきに　美津留
裏の田で鳴いてる蛙河内弁　度
特訓の脂汗知る蛙とび　柳宏子
身の程を知らぬ蛙の高のぞみ　雅士
人生は長いゆっくり行こうやせ蛙　かつみ
大阪の蛙せわしい声で鳴く　とみお
厚い壁ヒントをもらう蛙跳び　憲太郎
雷に仁義きってる雨蛙　頂留子
泰然と瞑想めいたガマ蛙　覚然坊
かび臭い納戸の中の影法師　弘直
名酒の味かびも上手に杜氏の腕　喜風
かび匂う森との対話父母の墓　悦郎
窓全開夫婦のかびに風を入れ　シマ子

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

お母さん三回呼んで離陸する　幸夫
楠若葉もゆる警備の陽焼け貌　朴竜
気配りが過ぎて相手に疎まれる　弘
骨壺の中から母が逢いに来る　高明
凝りに凝り糸口幽かに見えて来る　剛司
今切って活けた椿のもろい首　タミ
印影の濃さが自慢の出勤簿　四郎
親も子も国に殉じた偉い人　旭恒
ウグイスの鳴く音に迷うダムの道　ハル
六文の渡し余分はおいて去に　虹汀
飽食の果ては素足で踏まぬ土　正敏
いっせいに咲かせて花の恩返し　紀一
なけなしの財布はたいて夢を買う　ふさ子
雲仙の近くの娘らが気にかかり　喜久亭
妻たちの内緒話が風に乗り　治幸
日めくりの三りんぼうが無事に過ぎ　ちよ

この頃は見えなくなった靴磨き　義美

高槻川柳サークル卯の花　辻白渓子報

頷いて母は何にも問うてこぬ　スミ子
他人から身内の恥を聞かされる　節子
家出する娘見送る野の仏　如水
損得に決断つかぬ柿のたね　静江
スペアキー捨てて他人の顔になる　恵美子
なめんなよ鉄骨飲料のんでいる　正坊
表には目立たぬ損な役ばかり　〆女
頷いて園児の話を聞いてやり　春風
正論を吐くが上司に届かない　紫香
判一つ押せば他人になれるのに　杜的
大海の雑魚で真面目に生きている　芳子
ボランティア損得抜きの瞳が温い　英子
客が去ぬまでは夫を立てておく　しげお
生真面目に拝みごりやくあてにする　武庫坊
末っ子も兄も損だと思い込み　年代
頷いて満更でない返事する　二南
子が頷きやっと再婚決めました　波留吉
目を入れたダルマ大真面目に座る　茶の子
他人さまの噂が好きな群れすずめ　諷云児
年下と結婚真面目に考える　白渓子

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

風みどり少し浮わつく旅かばん　玲子
働いて浮かせた銭が孝行し　朗子
浮き雲に運命ききたし花の宿　寿々子
波に浮くから気楽そうな鳥　八重子
重くかるく言葉浮かせて生きている　日枝子
池に浮く鯉は整形手術後か　松子
根性に浮いた話は聞かされぬ　恵子
浮く雲よ届けてほしい事がある　富美子
花吹雪なおも浮かれるうなじから　ふみ
浮きながら金魚は何を考える　千春
沈めても浮き出るカメの中の文　瑞枝
やすらぎは天の浮橋わたるとき　荒介
古本に重なり合って浮く指紋　花子
哀しみが浮くのか月に月の暈　千代

京都塔の会　松川杜的報

船型を間近に拝み賀茂の里　志女
満ち足りた心へ京の普茶料理　〆女
久方の新緑映える京料理　久留美
野苺の赤がうれしい洛北路　杜的
なだらかに浄土へ続く正伝寺　ただし
名園と向えばわたる風見える　楓楽
遠州作の枯山水に風動く　萬的
鳥も樹も年を重ねて神光院　葉子
句が出来ず鳥の鳴き声聞くばかり　礼子
京に来てひとときの優しい人になる　倫子
葱おかぼ京に田舎の賀茂の里　圭坊
うぐいすが句想をはげます声で鳴き　美穂
寺にあるノートに他人の恋を見る　福子
木漏れ日が心を叩く寺詣り　大輔
方丈の風おおらかに比叡呼ぶ　(小)英子
樹々渡る風には風の彩がある　諷云児
獅子の児が渡るか風がぴたり止む　求芽
戦中派米粒一つ残さない　とみ子
いじめ派に鍵っ子混じる孤独感　達子
派出所も美女には甘い顔をする　芳子
演技派の個性が光る渋い人　久枝
瓦落苦多を溜め込む母は戦中派　江美
振られてもついて行きます好きだから　(福)英子
愛しくて胸の振子が止まらない　透太
捨て犬が悲しいまでに尻尾振る　小夜子
古時計まだねじ巻けば鳴る振子　茶の子
亡父の齢越すまで振らぬ白い旗　三男
悪役が存分披露する野性　二南
酒飲むとすぐに野性になってくる　白渓子
ためらいもなく草原にオスとメス　史風

岩美川柳会　羽津川公乃報

空中散布緑が息を止めている　照女
幽谷の滝がみどりの風誘う　單車
床柱背に権力が入れ替わり　公乃
老いの知恵頼る柱はまだ決めぬ　美恵子
人柱買って出たいが妻子ある　芳江
早道をよって足元すくわれる　民子
別れの予感断つ苦しさを微笑に変え　八千代
野仏に消息断った子を祈る　美代子
頂点で転ぶと視野が深くなる　忠良
仰向けに転ぶと青い空がある　螢

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

催促はしないが母の丸い背　すみ
メロドラマもろい涙を誘われる　修水

情熱がまだ残ってる老いの妻　義嗣
外人さん浴衣に下駄で盆踊り　いわお
赴任地で浴衣の妻が少し酔う　弘治
浴衣着て似合う美人の薄化粧　六浦
村祭り家族揃って浴衣がけ　保蔵
母が縫う浴衣待ってる女の子　昌子
金髪も浴衣姿で輪の中に　敏之
浴衣着て日本男子の顔になり　武庫坊
吟行の度に京都の奥を知る　江美
好きだった力士が消えてゆくさだめ　清太
はりきりのサンバ娘の市民祭　美代
実力はないが気丈な小市民　向西
中流の市民住む街ピアノの音　寅之助
信楽の市民揺るがす列車事故　歌子
市民が一人増えました僕の嫁　夢之助
良し悪しを決める確かな市民の目　十四郎

川柳たけはら　森井　菁居報

お母さんおこるとこわいでもやさしい　小三典之
目ざましがなってもおきれない朝だ　小四千枝
銀婚を過ぎたら妻の主義に添う　菁居
古い枕は思い出話ばかりする　蘭幸
時どきは惚けたふりする老いの知恵　喜美子
塩壺をあけると母の情に会う　静佳
ちょんまげにほんのり男でござんす　麻代
強がりもいつしか涙もろくなり　浪子
思い出の日増しにつのる手の温み　喜久恵
趣味に生き遠く眺める木瓜の花　ヤスエ
回れ右できない道を今日も行く　勲

浮き沈みあっても今日の幸がある　一枝
移植三年桜ん坊が実を付ける　清水
子のくれたカーネーションはよくしゃべる　比呂子
テレビから知恵をもらった晩ごはん　愛子
来春も着てほし夫のシャツたたむ　栄恵
母の日の一日早くゆうパック　房子
花満開何も描きたすものはない　一路
連休に帰らぬ子等よ青春譜　伸子
通りゃんせ山の緑が降りそそぐ　笑子
シベリアの名簿で友の名を探し　新造
真剣な顔が喜劇にしてしまう　静風
生き様が見知らぬ土地で見えてくる　令子
髭面を撫でながらふと妻のこと　美佐雄
父のことほんとは好きな肩車　千代美
助手席があれこれ口を出したがり　笹舟
ヒロシマの痛みは続く抗議電　白狐
内緒ごと抱いて太陽まぶしすぎ　千代子
真っ白い旗を少年振りかざす　邦男
風邪気味の旅でみつけた地酒とや　観杏

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

雨に泣き雨に笑って穂が垂れる　忠雄
まだ揺れるものあり赤を選っている　稚代
砂摑む指から愛は漏れてゆく　栄美子
隣の墓も豊かな香を切らさない　豊太
雨つづく曇る眼鏡を拭き直す　信秋
あじさいを褒めお茶をよばれる雨宿り　好笑
切符いちまい烈しい雨に流される　寿子
雨続き古里思う飯場の灯　紀美女

どしゃ降りへ遮断機容赦なくおりる　三千代
意に添わぬ風にも一度揺れてみる　アサ
これ以上地球を揺すってはならぬ　保州
灯がゆれる哀し命の火が揺れる　忠
生臭く生きて煩悩揺れ動く　克子
母さんは大将我が家ゆるぎなし　登志代
よく揺れる船に賭けてる未来地図　輝子
木漏れ日が揺れてる午後の物思い　精子
指切りの昔むかしを隠す父　与呂志
細い指いつかなれると夢を追う　君枝
その指へ止まると自己を見失う　三男
合掌の指は疑うこと知らず　柳宏子
指人形動く童話へ目を集め　(福)和子
どの指を切っても紅い血が走る　英子
指切りも酔いが醒めればしらん顔　淳太郎
心ない指を咎めるバラの棘　武雄
ふと子らの寝顔豊かに雨を聴く　静代
少しひもじく心豊かな道選ぶ　武治
山積みの廃車豊かな国の恥部　紫香
託すもの有って豊かに舞う枯葉　千寿子
広い海それは豊かな母の愛　高夫
趣味豊か老いの孤独に縁がない　瑞穂

川柳塔とっとり　岩原　喬水報

法螺を吹く蓋を開けば支持者あり　行男
笛吹けば踊ってくれる妻一人　忠雄
妻が吹く笛でギックリ腰になり　山人
草笛を吹いてメダカの友となる　輪多朗
幸不幸混ぜて春風そよと吹く　圭一郎

いつか芽を吹く日信じてタネをまく　旋風
哀しみを吹き払う風待っている　艶子
連休を避けてのんびりフルムーン　友夫
我が家ほどよい所なし旅疲れ　よしお
旅の恥かかずに戻るつまらなさ　風袋
ひとり旅自殺の名所のぞき込む　帆雀
年金で小さな旅行計画し　亨
旅行にも持病の薬持たされる　粗粒
旅行から帰れば孫が飛んでくる　多可志
夏だから旅行は雲の上を行く　螢
山里に生きて緑に感謝する　政子
開発が切った緑は還らない　喬水
緑の日せめてみどりを選って着る　一枝
新緑に染まり人間とり戻す　俊路
ためらわず山の子みどり塗りつぶす　由多香

城北川柳会　吐田　公一報

何べんも店じまいするビラを出し　秀夫
玉手箱生涯しまう宝もの　寿美礼
ここだけの話町内かけ巡る　史風
花時計にまつわる日射し春さなか　春蘭
セールスの美味い話に乗せられる　ふみ
ゆれ動く心をしまう場所がない　きくゑ
フレッシュマン花見の場所取り初仕事　勝美
口一つ昨日の味方　今日は敵　久留美
決心をつけた夕陽が美しい　典子
二階から降りるとしよう春だから　新一郎
酸欠の部屋で会議が捗らず　白峰
裏表見てから仕舞ういい便り　静子
半眼の阿弥陀如来に美の世界　昭子
諦めてしまえる性質で楽に生き　温子
何気なく言ってしまったアホダラ経　登美子
学びたい気持ばかりで日が過ぎる　文子
死線越えたいくさの話はせぬ男　倫子
雑音が入って話もつれ出す　満津子
春の風コートの中に孫抱いて　八重子
美しい波紋広げる石を選る　ただし
蓑虫君五月晴れだよ出ておいで　佐津乃
勲章をしまうと人間らしくなる　静歩
峠越すいのちに母の百度石　公一
土壇場で空振りかわす妻の知恵　達子
幾山河越え金婚の宴に酔う　右近

翠洋会　井上　照子報

初めての自動改札ピーと鳴り　章子
働きのわりに粗略に足の皮　ひろ子
それぞれに脱皮せぬまま離婚する　宏子
面の皮年々歳々厚くなる　みよ子
嬉しそう誰に借りたか女傘　良江
脱皮したつもりでもまだ子供だな　みつ子
合理化のツケがまわった列車事故　正坊
つらの皮金を返したことがない　しげお
出て見れば月も暈きて思案顔　綾子
時迫り電車の中を走りたい　照子
雑兵は大きな傘の下にいる　仙吉郎
終電車みな考える人になる　英一
南無阿弥陀仏　狸唱える列車事故　恭昌
北浜は狸の皮も売っている　真
落書の相合傘も共白髪　絹子
満員車車掌は軽く片手挙げ　蛙
うす皮を剥かれるように皮肉聞く　すすむ
雨を待つ買って貰った赤い傘　正雄
わるい傘持たされているお父さん　東雲
逢うて来た傘の雫にある余韻　透太
梅雨晴間欠伸がうつる昼電車　千歩
桃の皮自分で剥きたかったのに　春子
片ちびの皮靴にある暮し向き　凡子
島の子が街の電車に乗りにくる　光子
翔んだとて所詮夫の傘の中　楓楽
もう男にだまされはせぬ皮下脂肪　さと美
人の輪に隔てはない皮膚の色　宣司
春風を皮膚で感じる白い杖　拓生
持ち主は酔いつぶれてる忘れ傘　鬼遊
猿山がお猿の電車から見える　薫風

川柳高知　川竹　松風報

小さい恋育つ喫茶のレモンティー　千恵子
モーニング掃除洗濯後まわし　快風
あの人も無職と思う喫茶店　竹萌
青空を突く矢車の弾む音　春枝
腕時計そっと外して逢いに行く　菊野
刃物より切れる言葉で人を斬る　さち
結び目も弛んで老姑から荷が届く　幸泉
シベリアの大地名もない花が咲き　朱坊
蝶の舞う平和子孫に残したい　有佳
花束を抱けば絵になる母の顔　圭風
バーゲンに火花を散らす淑女達　功

岩に散る波が岬の景になり　松風

富柳会　池森子報

おべっかをしとく上司のうるさ型　花子
女連れ車中気にせず賑やかに　生子
五月蠅かった躾けで今日の角隠し　昭水
氏神は亡母のぬくもり秘めている　トシエ
ホステスを呼んで叙勲の内祝　文次
ごちゃごちゃと言うて子供に嫌われる　二三子
うるさいが居らねば見たい孫の顔　智久
内祝い落ち着きました新世帯　トシ子
氏神が耳傾ける糸電話　荘次
保証印うるさいことに巻き込まれ　透太
記事になりほってもおけず内祝　(伊)勇
美味しいと言わぬ夫の料理する　花梢
憲法が氏神様をいじめてる　美房
氏神へ日参遠い日の神話　維久子
何べんも好きだと言われうるさがり　岳人
五月蠅いとは言えず紫陽花七変化　森子

打吹川柳会　奥谷弘朗報

的を射ぬ質問の矢に議場だれ　善政
矢面に立たされ黙秘続けてる　喬水
矢をひとつうち込んでみて様子みる　邦俊
抜擢の椅子に吹矢が飛んでくる　典子
出しゃばりの口に突き刺す白羽の矢　白峰
うぬぼれの鼻を外れてゆく矢文　早苗
三本の矢で諭しても信じない　雄々
七人の敵の矢を折り定年期　仙岳
当りくじ番号決める美人の矢　佳女
仕方ないわたしが矢面に立つとする　信子
白羽の矢当ってからの疲労感　ひさ子
矢も盾もたまらず行って見る現場　勝見
放たれた矢は戻らない胸の傷　喜与志
胸を張る寡婦の強さに矢もそれる　孝恵
恩忘れた若い矢尻が向けられる　節子
矢面にいかつい夫の肩がある　幸子
三の矢に督促状がついていた　とみお
根性の二の矢三の矢打つ努力　温子
輪の外に出て矢面に立つおとこ　螢
矢が外れ命拾いの過去を持ち　寿満湖
僕の矢が向う岸まで届かない　小鹿
キューピット老いの胸まで矢を放ち　梅朗
矢絣の女と帰る演歌道　紫映
矢印が頼り梅田の地下歩く　杜的
矢面に立つと男が強く見え　弘朗

サークル檸檬　友碇雅子報

森を出て水はかなしい色になる　美緒
怒りかも血のひく思い普賢岳　キミ
初デート何度も紅を引き直す　三四子
卑怯者気をひいておき逃げている　千代女
これ以上聞いてはならず線を引く　智恵子
自分史に区切りをつける線は赤　今日子
ピアノ弾く娘待ってる広い部屋　美子
水までも買う世の中に誰がした　登美子
水温み早苗とる手もさわやかに　ます子
ただの水されど水こだわりて買う　雅子
円満の秘訣一歩引いている　泰子

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

のどかですゴキブリ退治の話など　智重子
弱音聞くさもありなんというところ　はるみ
私だって弱音吐きたい日もあった　歳栄
弱音など吐いてなるかと句読点　民子
弱音など吐かぬカラスの朝の歌　鈴江
心まで洗ってくれるオルゴール　かつ子
洗礼を受ける候補の声しきり　ヒデ子
平行線もともと次元の違う彩　芳枝
母の味忘れかねてる娘がひとり　好栄
セールスマン弱音を吐くと靴が泣く　聖子
泣き上戸弱音を肴に飲んでいる　ちよえ
洗われる筆のいのちをいとおしむ　博利
一喜一憂させて春蘭やっと咲き　清泉
しとしとと鼻かけ地蔵の泥洗う　白汀

川柳ねやがわ　高田博泉報

観光地のふたり見過ごす思いやり　光子
孫のあるアンコ椿が酌にくる　良三
観光白書労働時間がまだ長い　半蔵門
手ごたえは充分捜査陣動く　庸佑
手ごたえがあってぴくりと動く眉　頂留子
糸切って鮒逆立ちを見せてくれ　菜月
出てこいと言わんばかりのいい天気　小路
改築の風呂の広さよ明るさよ　あやめ
髪染めて明日に賭ける夢を見る　高栄
順送り家族交互の花粉症　雅文

手ごたえを読み切っている太い眉　おさむ
イメージの悪さ笑顔でカバーする　勇太郎
快適な暮し守れと労働歌　波留吉
快適な暮しと他人には見える　度
姑さんに逝かれ背骨が抜けたよう　かすみ
お役所の顔で立会人をやり　藍子
イメージは十指でたりぬ夢を持ち　冬葉
さわりよいお方で深く刻まれる　一笑
いささかの快適春の衣替え　白水
空回り慣れたものです凡夫婦　一途
手ごたえは確か現なまものをいう　速水
買うほうが安いハサミを研がされる　創吾
腹八分酒は別だと言いたそう　時弘
人のためになる欲なら張るがよい　亜成
イメージをどう重ねても亡母朧　章
傘寿とて騒ぐことないお味噌汁　えいめい
快適な原因ユーモア忘れない　君子
おとなしいイメージ守る猫かむり　シマ子
手ごたえがあった電話の弾む声　亜也子
快適でしょうかブルースのように　礫

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

新人類スポンサーにも気まま言い　正子
スポンサーの機嫌こわして降ろされる　堯
ダンナ様私の大事なスポンサー　ミサ子
女盛りが乗り替えてゆくスポンサー　年代
売れっ子のモデルで売れているカレー　石舟
スポンサーを満足させる子の演技　英子
人間の愛憎きざむ古時計　文夫
色褪せたネクタイ締めて長寿会　伊三郎
古傷をかくす自画像描いている　園歩
古文書が出て来て知った新事実　寿子
古い傷がうずく女のくすり指　敬
古狸素知らぬ顔で聞いている　薫
姉の背を越えた柱の古い傷　澄子
古き良き時代知ってる鯨尺　武庫坊
古傷に触れるな月が美しい　〆女
街道で古い逸話を聞いている　静夢
人生の花道忙しすぎないか　紫香
喝采のない花道へ影長く　萬的
花道でスキャンダラスな落し穴　芳子
花道に遠く挽歌聞いている　杜的
死にに行く影花道は雪明り　作二郎
つまずいた石を睨んでけり返し　保蔵
マンションの布団ふくれて叩かれる　六浦
北からの鞄は影絵だけ見せる　定人
女の耳の後に底なし沼がある　洋子
つつじ燃ゆ鏡の汚れ目立つ今朝　栄
年取れば上原謙も粗大ゴミ　みち子
裁ちばさみ買い換え服地派手になる　キク子
男にも所帯やつれのくる孤独　正一
言い値ではサイフの紐が開かない　歌子

堺川柳会　河内　月子報

充実の日々貧しさがなつかしい　泰子
休憩やない考えているのです　天笑
脱ぐことも出来ぬいらだちマと進む　てるよ
広野の隅に姉の小さい雨が降る　金三郎
ティータイム噂ばなしがひとめぐり　寿恵子
大胆な恰好でよける走り梅雨　真柳
雨二日エースの肩を狂わせる　武助
雨降れば足早になるかたつむり　度
諸肌を脱ぐと出てくる名調子　二南
人恋し大き目の傘持って出る　彗梢
脱ぎ去れと他人はいとも簡単に　頂留子
若葉雨　小憩に借る仁王門　春蘭
ティータイムが長い女たちの午後　森子
それとなく逢わす歌舞伎の中休み　道胤
石仏の微笑を雨が深くする　一二三
紫陽花寺へ約束通り雨になる　楓
脱ぎなれた海女にも命綱たぐる　芳水
貧しさを抜けると欲がふかくなる　かりん
行きつけの店で傘借る馴染み客　博光
静かなる休憩に入る父の棺　紀美女
人がふと休みたくなる歳がある　与呂志
コマーシャル目を休ませるためにある　東雲
病院の休憩室にある縮図　ひで
機械から人間となる休憩時　信博
ライバルを目のはしに置くひと休み　半銭

むらくも句会　藤井　明朗報

バーテンがコップ輝くほど磨く　秀子
コップから蝶もとび出す余芸かな　文子
銘水を注げばコップが透きとおる　一葉
鍬洗う手元へうつる宵の月　よし子
みどり濃い茶の香もうれし五月晴れ　百代
病み上がりほほ紅少し濃くする　ヤス子

養命酒小さいコップの美味しくて　千里
出不精の思案の末に靴をはく　保子
やり通す思案の末に決めたこと　八重子
人生の生きざま思案のくり返し　さくら
鳴りやまぬ拍手に応えアンコール　節江
老いの身に思案の日々の流れゆく　寿
新カップル拍手で送るハネムーン　昭子
すっきりと煩悩洗う寺詣り　林蔵
葉桜の想い出つなぐ濃みどり　義良
プランターに競うて花の鉢洗う　島子
洗っても洗っても汚すいたずら子　仲子
口惜しさ洗い流して前を見る　常子
晴れ間みて洗たく物の多いこと　カツ子
きりっとしたまゆの濃さが魅力的　久仁
洗っても落し切れない泣きぼくろ　幸夫
ささやかな幸せ思うコップ酒　明朗

南大阪川柳会　金井文秋報

共稼ぎ揃う食卓喋りすぎ　柳宏子
食卓に昨日のしこりまだ残り　悟郎
食卓も皿一枚で独り住む　頂留子
飛んで帰って食卓につくハネムーン　公一
チャブ台の頃楽しくて貧しくて　トミ子
食卓へ嫁の心を盛り上げる　久子
卑しくてすぐ見返りを期待する　楓楽
火の車卑しい言葉出てしまい　凡子
酒好きの卑しさ日銭空にする　喜風
ご落胤母は卑しき身分なり　新造
お開きへ口卑しいのがまだ粘り　智久

欲望を満たす卑しさ出し過ぎる　庸佑
掴み取り卑しい気持ちだけこぼれ　文江
着飾って心の卑しささらけだす　あいき
品性の卑しさ化粧は騙せない　正好
そろばんを弾いて尻尾振っている　寿美
天狗の鼻折れる奇抜なアイデアだ　奏月
奇抜もいいが街は歩けぬニューモード　萬的
開眼法要エレキギターのひびく古都　度
どんな子になるか奇抜な事が好き　雀踊子
気が引けて奇抜な女と歩けない　東雲
輪島塗鈍い光にある魅力　文秋
どっこいしょ動きがにぶい歳になり　直子
感鈍い男で秘密漏れかかり　覚然坊
妻の勘にぶさに助かる午前様　勝美
貝になる女の意地は見事なり　鬼遊
ささやかな抵抗沈黙する淑女　慶三
沈黙の大樹が知っている先祖　シメ子
沈黙も行の一つになる浮世　清水
沈黙を破って視線浴びて立ち　しんじ

川柳大阪　高須賀金太報

引き際も名横綱のさえた技　一歩
背伸びして誰にはばかる事もない　川童
Q2にNTTも悩んでる　柳弘
蟻の列変えて見たくて撒く砂糖　しげお
足折ってアッシー君をクビになり　敏
慰める術もないから酌いでやり　徹舟
無為無策残り時間が少なすぎ　重人
五月晴れ再就職のにがい汗　司

母の背の軽く弾んで五月晴れ　洛酔
思いっきり怒ってくれた愛の鞭　我勝
怒られる立場に立って聞いてやる　凡九郎
大声でおこる時には河内弁　三吉
答弁がくるくる変わる第九条　末坊
解答はカメラでします競馬場　美津留
解答は玉虫色で老いの知恵　本蔭棒
あいまいな解答出すからもめてます　天平
町内会意見を言えば役が付き　亮太
渋柿もおんなじ色の意地を持ち　希久志
意を決しひとり芝居の足袋をはく　与呂志
意に添わぬ話は鼻の先で聞く　雅巣
きっちりとネクタイ締めて持つ邪心　比呂志
解答はあなたの顔に出ています　金太

川柳はびきの　塩満敏報

梅漬けて夏の暑さをスタンバイ　悦子
消火弾落としてやりたい普賢岳　利武
罪一つ修正液でぬりつぶし　泰子
恋人ができて母の日忘れられ　かつみ
取り消した切符に命救われる　希代司
金で済む話が金で揉めている　志洋
反骨の折れるところも歳の功　胡村
茶を入れて話す言葉を考える　ケイ子
残り火がほんのり燃える老人会　キミ子
睡眠剤きかぬ夜です亡夫を恋う　絢子
展望台一国見えてあとは靄　志津江
口笛がとっても好きな子犬です　みつこ
獄窓で過去なつかしむ座頭市　たけし

新郎は野暮な誓詞と知っている　吐来
真相が時効を待って耐えている　隆
満場一致です口笛吹こうかな　敏

川柳泉尾　吉川　寿美報

遊園地益々甘い小銭入れ　淑子
サイクロン弱い所をなぜ攻める　美南子
ありがとう師にも友にも夫にも　はつ子
信号無視スピード感が面白い　美枝子
美辞麗句罠はしっかり張ってある　悦子
美しい真紅の薔薇にあった罠　可愛
五年前に仕掛けた罠を修理中　マリ子
片足は罠にはまった天の椅子　弘子
スーパーの目玉にされている卵　鬼遊
面白い人の回りに花が咲き　あさこ
人生の日がわりメニュー面白い　和子
面白い夫婦でお金溜まらない　一枝
面白い味を生みだすかくし味　シマ子
面白い話で法事切り上げる　葉子
テッセンや曲りくねった枝に咲き　義一
店頭で曲がったキュウリすねている　敦子
曲がり角それでも話まだ尽きぬ　(中)文子
ジャンケンで軽い男女の曲り角　トミ子
この角を曲がれと匂う沈丁花　伴子
新しい道を曲がって気が変る　サチ
直角に曲がるある日の心意気　美代子
曲がり角で振り向く癖を持っている　美津子
通勤に少し似ているブーメラン　(寺)文子
すぐ曲る針に淋しい影がある　美子
子には子の世界を曲げぬおもちゃ箱　シメ子
手の平で動く夫が面白い　恵美
スキャンダル面白おかしく書き綴る　途子
曲り角ちゃんと知ってる酔うている　千歩
あくまでも自説を曲げぬ鉾の先　寿美

南海川柳会　飯田　悦郎報

ご先祖の墓碑に考え問うてみる　喜風
狙う敵考えている回り椅子　重人
ほほ杖をついても考え浮かばない　勝美
考えるゆとりが詐欺の手を逃れ　文秋
急ぐ蟻いい考えがあるのだな　ダン吉
常用の麻薬が招く身の破滅　志華子
常用のパイプは艶にうかがわせ　しんじ
肩叩き常用の椅子軋み出す　甘平
履き馴れた靴と知ってる土ふまず　柳宏子
洗わない茶器で上座に据えられる　柳伸
五個玉のそろばん父は手放さない　度
蜘蛛の巣にかかった毛虫立ち往生　千鶴子
毛虫という渾名で財を成している　三男
毛虫とて美人が好きか傘に落ち　眉水
ハイキング毛虫に負けて医師を訪う　正好
若葉陰毛虫で居れぬ蝶と化し　覚然坊
毛虫明日の蝶を夢みて耐えている　真砂
妥協せぬ心の底に有る野心　信博
野心など無いと言うたら嘘になる　庸佑
期せずして野心をさらけ出す宴　憲太郎
笑うて済む野心ぐらいにしとこうね　凡九郎
隠されぬ野心言葉の端に出る　二南
メニューにない一品を出す通の味　花仔
舌でなく目でも味覚を味わった　東雲
ひさし振り味覚を知った花の宴　悦郎
句競う味覚おどろくお勘定　しづ子

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

塀の中で六法全書暗記する　きく子
六月の田植え自由化聞きながら　慶子
六十年妻影に居て逆らわず　〆女
六月の雨の音譜に泣くおんな　国公
六方踏み力をこめて幕とじる　一笛
元手出す方が六分でこちら四分　(五)英子
おしどりのようには女房ついてこず　薫
九官鳥　夫婦の声を使い分け　とく子
尾瀬の小屋狭苦しいとの文句なし　富子
狭いせまいと言うて散らかしている書斎　芳子
見栄に輪をかけて女は狭く住み　明光
兎小屋だから喧嘩もできません　蕗児
沙羅の花見ているうちは落ちません　博史
古希過ぎて習う太一の大極拳　明吉
ファジーな掃除機主婦を甘やかす　(小)英子
淋しい日つい電話する娘の家へ　すて
想像も嫉妬の城を越えている　登代子
控え目にするから人に先こされ　悟郎
医者に行く以外はいつも家にいる　白渓子
かすかでも金の匂いに秘書の影　吉太郎
風鈴を鳴らす位の風といる　ただし
電気釜　妻より先に目を覚ます　しげお
メルヘンの森のカラスはピンク色　杜的

柳界展望

編集部

★第1回島根川柳塔まつりは**6月23日**、出席者百名を越す盛会で開かれ、本社同人の次の各氏がそれぞれ天位賞に選ばれた。

夕焼けは神の作品だと思う　江原とみお

千羽には一羽足りない紙の鶴　竹内寿美子

火のような強い女の雨嫌い　土橋　螢

腕枕　道は故郷に辿りつく　林　荒介

伝説の石の心を読む庭師　西村　早苗

★『川柳塔さっぽろ』400号記念誌上川柳大会の大賞・準賞がこのほど次のとおり決定した。

死のはなし春のスーツを買うはなし　上島み恵子

〈準　賞〉

春の罠あおい林檎を持たされる　浪越　靖政

なお、本社同人の奥田みつ子さんが秀作に選ばれた

★第14回阪神文芸祭が**7月7日**、宝塚市立文化施設ベガ・ホールで開かれたが、川柳部門で同人の2氏が入賞、田中正坊・丸山よし津両氏が佳作に選ばれた。

〈**阪神文団連会長賞**〉

未完の詩抱いてどこまでゆく旅ぞ　春城　年代

〈**阪神県民局長賞**〉

かたつむり腹芸などは出来ぬまま　西口いわを

★堺川柳会の9年度夜市川柳のベストテンがこのほど次のとおり決定した。①小島蘭幸②八木千代③赤木和子④政岡日枝子⑤春城武庫坊⑥河内月子⑦奥山晴生⑧藤田泰子⑨高須賀金太⑩河内天笑⑪後藤正子⑫土橋はるお⑬三宅保州⑭新家完司

★豊中もくせい川柳会は**7月15日**の定例句会で平成3年度の最優秀賞に村上とく子、総合得点優秀賞に①松川杜的・田中正坊③桝本露児④辻白渓子⑤満仲きく子の6氏を決定、表彰した。

★1991雑草川柳大会は**9月1日**午前11時から高松市の玉藻城内披雲閣大書院（JR高松駅前）で開催。会費1000円。課題・選者は、流れ＝若草はじめ▽腕＝小山斐山▽丸＝坂下久子▽列＝石部明▽酒＝吹田朝児▽破る＝林荒介▽太郎＝寺尾俊平▽裸＝藤本静港子（各題2句・欠席投句拝辞）。連絡先は高松市東田町21―13・若草はじめ

★川柳塔とっとりは**10月20日**午前10時から鳥取市駅南のしいたけ会館・対翠閣で河村日満氏を偲ぶ川柳大会を開く。兼題・選者は、日の丸＝阿萬萬的▽満足＝森中恵美子▽偲ぶ＝板尾岳人▽温泉＝恒松叮紅▽丘＝八木千代▽ふるさと＝土橋螢▽おいしい＝小林由多香で各題2句、会費2000円投句は**10月10日**必着で、投句料1000円を添え、鳥取市瓦町527岩原喬水へ

★川柳塔唐津支部結成9周年川柳大会は**11月17日**午前10時から唐津市東城内「城内閣」で開く。兼題・選者は、袖＝浜本ちよ▽泡＝河内天笑▽歌う＝古川日曜▽OL＝山口高明▽カード＝樋渡義一▽英雄＝黒川紫香▽九＝田口虹汀（各題2句・欠席投句拝辞）、会費2000円。

★川柳塔きゃらぼくは第27回忘年句会を**12月1日**午前11時から米子駅前・米吾ビルで開く。宿題は波・机・島・ガラス・砂・首・振る・箱・火・遊ぶ・皿（各題2句）、会費3500円。

▽**お便り**△

■有働芳仙氏（熊本市・参与）「…どうにか歩けるようになり、リハビリへ努力しています。咽喉に穴をあけられましたので、呼吸が思うようになりませんが、どうにかなると思い、頑張って療治中です」

▼**訂　正**▲

■**6月号**＝P97下段7行目（新同人）「伊藤芳正」→「伊・藤芳正」→「**佐々木**芳正」。

■**7月号**＝P36上段の句会案内中、選者名「水上比沙子」→「比沙**胡**」、P62下段2句目「季節はおれの芽を…」→「季節は**ずれ**」、P71上段13行目の句は「曼珠沙華**に**いのちの**朱**を学びとる」、P85下段10行目の「句碑三墓」→「三**基**」、表3の本社句会案内の選者名「梶川勇次郎」→「**雄**次郎」。

（**編集部**）

8月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	2日(金)午後1時から ネクタイ・風土・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 家族・星・ホテル	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
八尾市民 川柳会	10日(土)午後6時から 釣る・休む・浴衣・金魚	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	11日(日)午後1時から 涙腺・留守・力む・ルール	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
西宮北口 川柳会	12日(月)午後1時から 棚・冷たい・掘る・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9－4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
高槻川柳 サークル 卯の花	15日(木)　正午から 友情・荷・浴びる・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3－8－8　川島瓢云児 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
富柳会	15日(木)午後1時から 美味しい・お母さん・音痴	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4－1　池森子
南海 川柳会	16日(金)午後6時から 銀行・市場・ショック・配置	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
川柳 ねやがわ	18日(日)　正午から 星・駐車・平和・自由吟	寝屋川市秦公民館 京阪寝屋川市駅からバス秦公民館前 〒572 寝屋川市春日町6－9　高田博泉 句会費 1,000円　投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	19日(月)午後1時から 八・蛙・のんびり・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
南大阪 川柳会	19日(月)午後6時から 不意・無知・有力・類似	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
岸和田 川柳会	22日(木)午後6時から 争う・違反・うかれる・遠い	岸和田市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7－36　植山武助
川柳 東大阪	24日(土)午後6時から 夏休み・優しい・スタミナ・一族	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
はびきの 市民 川柳会	25日(木)午後1時から 冒険・拗ねる・ゴール・(拳)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満敏

編集後記

★「長崎の友を励ます文字が無い　寿馬」―同人の松本ただしさんが〈よみうり時事川柳〉に入選したこの句を紹介し、〝島原大変〟についての政府の対応の鈍さに批判の声が上がっている折柄、「川柳人として何か形のある行動でお手伝いさせていただけたら…」と提言してこられた。ご趣旨には双手をあげて賛成したいので、とりあえずこの欄に書きとめておきたい。

★表紙は、本の〝顔〟である。単行本の場合は、表紙だけでなく、見返し・扉・カバーなどを含めた装丁が大きなウエートを占める。雑誌はそれほどではないものの、編集者はそれなりに工夫をこらす。本誌では毎号、直原玉青先生に季節にマッチした水墨画を描いていただいているが、絵の下地と題字の色彩を決めるという作業がある。

★まず、絵のイメージにふさわしい色彩を印刷インクのメーカーがつくった色見本カードから探し、それに対応する題字の色を選ぶ。二つの色を使うからには、色の組合せ、つまり色彩調和を考えねばならない。調和には類似と対比があり、色彩論的な法則もあるが、最終的には感性にたよるほかはない。

★色の種類は、『日本語大辞典』付録の「色名辞典」によれば三五〇色、前記の色見本でも二七六色あるから毎号、できるだけ同じ色は使わない。本誌が納品された時、真っ先に表紙を眺めいい感じの配色になったか否かを見るのが不安であり楽しみでもある。（正）

●寄らば大樹の陰という。弱い人間が生きていく上での自然な情であろう。だがゆめゆめ油断召さるな、世界的に激動の時代である。いつ突然に大樹が倒れ、押し潰されるかも知れない。

●川柳塔社規約の総則(2)に「川柳塔社は、麻生路郎の『川柳雑誌』の伝統を受け継ぎ、川柳の普及と向上に努めることを目的とする」とある。私は迂闊にもこの規約を真正面から考えた事はなかった。というのも川雑の伝統とは何なのか正直な所、良く知らないからである。路郎先生とはどういう人でその目指された川柳の社会化運動とは何だったのか、耳にする断片的な話や活字から自分なりに像を画くしかない。先生を良く知る先輩同人にはその事を広く詳しく知らしめる義務があるのではなかろうか。

●世にはいろいろな傾向の句や多くの結社がある。文芸として川柳はどうあるべきかなどという資格もその才も持ち合せてないが、人間の悪汁を絞り出す締め木の役を果し、人生をいかに生きるかを知るために川柳がある、と言われた先生の川柳観に賛同の人は疾く川柳塔に来たれ！と夢想する。

〝君、川柳は情熱だよ〟と自分で呟きながら…。（射）

○「どこかで見た句だぞ」

『川柳塔』六月号の私の一句がどうも心に引っかかっていたが、十日ほどして偶然に訳がわかった。その句と同想の句を五月号に発表していたのである。上五は同じ、それ以下は多少異なるのが救いといえば救いなのだが、自分の句を自分で盗作したとの誘りを受けても仕方ないほど似ている。

○鬼遊氏が六月号に「何を信じるか」で書いておられるように、星の数ほどの中からよく似た句をみつけることがある。私も気付かぬままに過ちを犯していないか、いつも気にしているのだが、ひと月前とよく似た句を発表したのは初めてで この記憶力の衰えは大ショックだ。この分では今後が思いやられ、心細くなる。

○ある本の受売りなのだが俳句も含めて十七文字の句が幾とおりできるかは、イロハ四十七文字の十七乗の計算で出る（47^{17}）。ただし濁音は使わず、意味のない十七文字の羅列も含める。

二穣（じょう）六六四七秭（し）九三六五垓（がい）

○六九六京（けい）二一九三兆四三九三億二二一九万二六八七

まさに無尽蔵に近い―これが答えだそうだ。

こんなに沢山の句が産み出せるというのに、盗作問題が起きるとは…。（ふ）

作品募集

10月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）西尾　栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
銀河系（3句）河内天笑選
茴香の花（3句）小出智子選
　「時代」岸本木魚選
　「赤い」新　正子選
　「貯める」山本希久子選
課題吟（3句）
初歩教室「匿　名」（3句）辻　白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

11月号課題吟「勝　つ」「見　学」「ツアー」

お　願　い

「川柳塔」「水煙抄」欄への投句は、本社所定の『川柳塔用箋』をご使用ください。同用箋は1冊200円で、送料は1冊250円、2～3冊360円、数量がまとまれば「ゆうパック」がお得です。

川柳塔社

定価　六百円（送料51円）
半年分　三千八百円（送料共）

平成三年七月二十五日印刷
平成三年八月一日発行

編集兼発行人　西尾　巌
印刷所　藤原童心社

〒545 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六 ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六九一―六九一四番
振替口座大阪8―三三六八番

本社8月句会

日　時　8月7日（水）午後5時半
会　場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点西南角

おはなし　高杉鬼遊
兼　題
「ひらたい」桜井千秀選
「波　乱」吐田公一選
「研　ぐ」榎本吐来選
「文　字」松川杜的選
「　玉　」西尾栞選

席　題　1題　当日発表　各題2句以内
会　費　500円
投　句　柳箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社9月句会　6日（金）

兼　題「香　水」「削　る」「簡　単」「効　く」「　鎖　」

NHK川柳作品募集

課　題「　列　」　橘高　薫風選
ハガキに3句　8月10日締切

投句先　〒540 大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係

発　表　8月25日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課　題「甘　い」　森中恵美子選
ハガキに3句　8月15日締切

投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成三年七月二十五日　印刷
平成三年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七七一号　川柳塔　八月号
定価　六百円（送料　五十一円）

「短詩 平成川柳作家抄」・好評・発売中

＊川柳作家必携の書

全国の新聞（読売・朝日・毎日・東京・中日・その他）に広告、大きな反響を得、好評を博しています。

【装丁】A5判・上製本仕上げ・ビニールカバー・ボール箱入り保存本。

【定価】1850円（消費税込・送料別）

①第一回全国川柳大会（主催・日本伝統美保存会）＊最優秀・優秀・女性奨励賞受賞者の色紙・作家作品抄　＊佳作入賞作家など全入賞作家1485人の作品……

②明治以降有名作家の作品を創作参考の「例句」として収録。

③創作川柳作品の保存欄＊あなたの川柳作品を日誌形式で記入できる編集。

【申し込み方法】＊代金後払い。ハガキに注文冊数と住所氏名を書いてお申し込み下さい。

〒194－01　東京都町田市金井385

芳文館出版・川柳作家抄係

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

豊津住宅株式会社

本　社　豊津住宅ビル

豊　津　店
〒564 吹田市泉町5丁目11—14
TEL (06) 330-0006㈹
FAX (06) 388-6102

関大正門前店
〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166㈹
FAX (06) 388-6886

雑誌 05703—8